THE CENTRAL REVIEW

中央公論

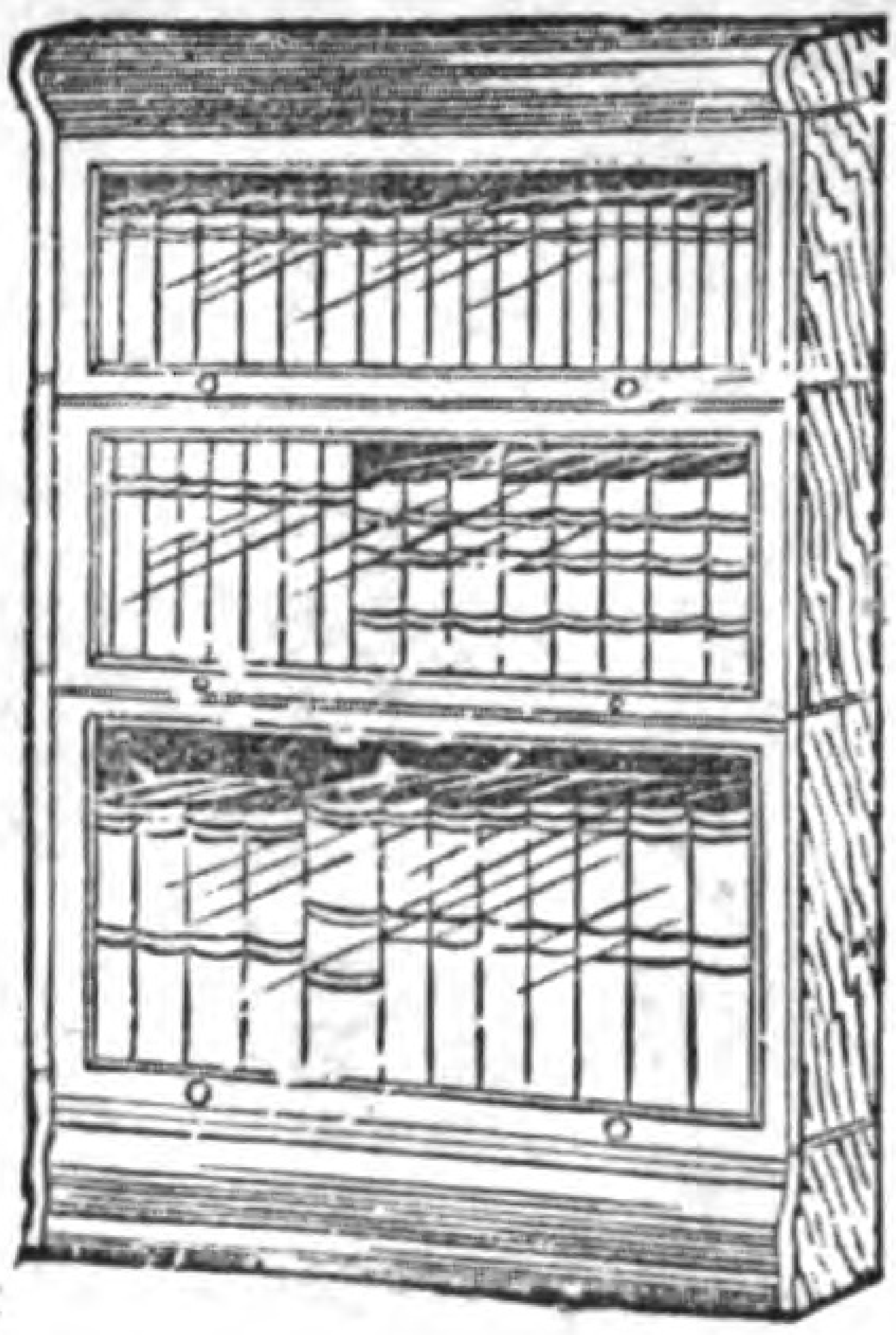
第廿六年　第二號

第二百六十三號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

最新式 最新形 本箱!!!

組合セ本箱（セクショナル、ブックケース）



總高サ	三尺九寸五分
奥行	九寸四分
間口	三尺
櫻製	金参拾圓
欅製	金貳拾八圓
檜欅製	金貳拾六圓也
段函壹個代 櫻製	八圓也
段函壹個代 欅製	七圓五十錢
段函壹個代 檜欅製	七圓也
荷造費壹組	壹圓五拾錢
荷造費段函壹個	五十錢
地方運賃御自辨	

▲欧米諸國に大流行のセクショナル、ブックケースよりも數等進歩したるものにして其特徴を擧ぐれば

▲材料に櫻、欅、檜等を精選し堅牢此上なし

▲形狀優雅に色彩美麗なり

▲在來の本函と異り硝子戸は上部へ隱沒する仕掛なれば書冊及帳簿の出入に便なり

▲壹組の組合せ本箱は積み重ねたる三箇の段函とトップ(屋根)ベース(脚底)の組合せより成る

▲藏書の増加に從ひ段函の數を增加し之を上部に積み重ね四段五段の本箱と爲す事を得

◎説明書無代進呈

東京市銀座大通新橋際 **新橋堂書店發賣**（電話新橋三六七七振替貯金東京二〇〇番）

村井弦齋著

◎家庭改良の最良指針!!!

增補註釋 食道樂

春夏秋冬 合本 定價金貳圓 郵税拾八錢

◎本書には米料理百種、パン料理五十種、病人料理百五十種、日用食品分析表、食器食品價格表、料理心得の歌百種等の附錄あり

增補註釋 食道樂 續篇

春夏秋冬四分本價各壹冊八拾錢郵税各冊拾貳錢

◎春の巻には野菜料理百種、夏の巻には果物料理百種、秋の巻には魚料理百種、冬の巻には肉料理百種の附錄あり

增補訂正 台所重寳記

全壹册 和裝 定價金壹圓 郵税拾貳錢

著者の自序に曰く此書の記事は悉く我が家庭の實驗する所にして余は飽く迄も他人に親切ならん事を期すと

△發行所 東京市麹町區有樂町（振替東京七三八番） 報知社出版部

△發賣所 東京市銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番） 新橋堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

新刊 外交史之双璧

法學博士 有賀長雄著

最近三十年外交史

全貳冊 紙數千八百餘頁 春皮天金函入 ― 歐米外交家九十名肖像挿入 ― 正價金五圓五拾錢 小包料金貳拾錢

有賀博士の外交史は世自ら月旦あり復贅せず就中最近時の外交史に至りては參考すべき一の成書なく散亂せる材料を蒐收整理して之を撰述せざるべからざるを以て學世界に通じ識古今に徹し特に宇内の現勢に精通せる有賀博士に非ざれば斷じて之を善くすべからず本書は博士が無慮**五星霜の心血**を注げる一大新著にして千八百八十一年の三國同盟成立より日韓合邦に至る最近三十年間の世界外交の主要事件を詳論したるものなり宇内各處に續發せる國際事件は極て多端複雜にして紛糾錯綜せるを以て之を詳説して讀者に領解せしむること容易ならず然るに本書は善く外交界に**一貫**せる**理勢**を捉へ因を推し果を尋ねて其細目に論及し一々學理的解説を加へたるを以て如何に紛糾せる事件と雖も一讀して善く其要を得べきなり是れ著者**獨得の手腕**の存する所とす故に本書を繙く者は歐洲外交と東亞事變との間に極て密接の關係ある所以を明にし就中日清日露の兩戰役が如何に歐洲列強の均勢を根柢より動かし以て今日の三國同盟に對する三國協商を馴致したるかを詳にするを得べし本書の所説は一々其徵證を擧げ公文は其譯文を添へて其根據を明にし往々**外交界の神秘**を發き務て其眞相を闡明したるを以て史家及び經世家の一大參考書たるを疑はざるなり

外交史專攻 巽來治郎著

極東近時外交史

全壹册 紙數九百六十頁 春皮天金函入

正價金參圓 小包料金拾貳錢

著者嚮に日清戰役外交史、日露戰役史を著して雷名あり特に戰役外交史の如きは善く**外交の陰微**を穿ちて一世を驚倒し之が爲に**筆禍**を得たり以て著者が如何に外交界の秘奧に精通せるかを見るべし今や世界外交の中心は極東に移り極東の外交は即ち世界の外交たり故に列强外交の表裏を知るは**外交の渦中**に在る本邦の爲に特に緊要とす然るに極東外交を中心とせる新著は絶えて有ることなし是れ有賀博士の最近三十年外交史と共に本著を出せる所以なり有賀博士の外交史を讀む者併せて本著を讀まざるべからず

有賀博士著

十版 近時外交史

全壹册 春皮天金函入

改正貳圓五拾錢 郵稅拾貳錢

◉久しく品切の處今回用紙及製本等前記の二書と同型にて發行せり◉

發兌 東京牛込早稻田 **早稻田大學出版部**

發賣 東京日本橋區本町 **博文館**

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

編修總裁伯爵大隈重信閣下

日本百科大辭典

郵券二錢を投ぜらるれば

見本呈上

全部七卷（索引共）

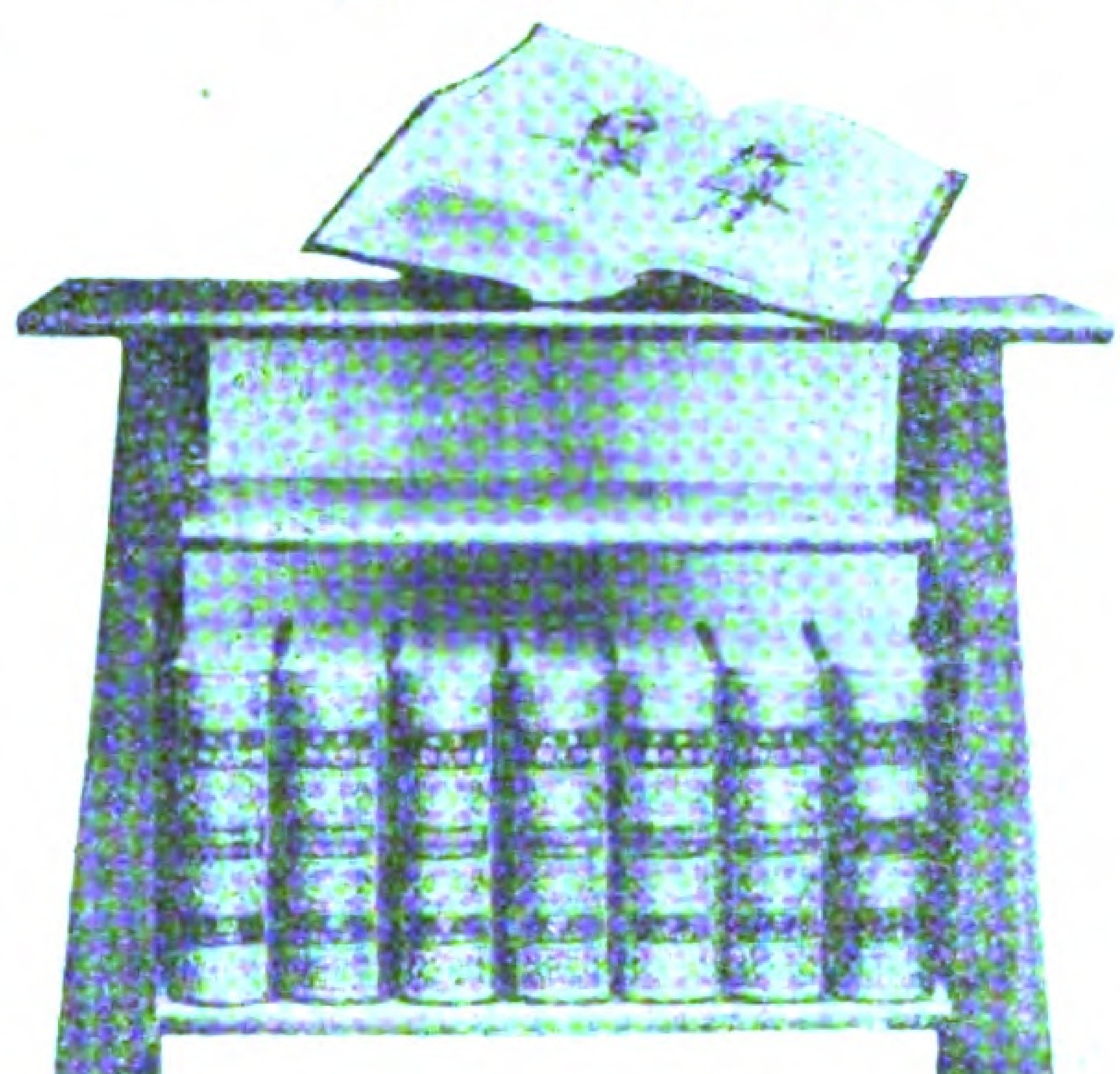
四六倍判　一萬餘頁

正價金六拾五圓

第四卷特價七圓

既成　第一・第二卷　正價拾圓

第三卷特價締切期二月末日



日本百科大辭典

縮寫

第四卷特價七圓三萬部限提供

▽送本は着金順により送達す

▼內地小包送料各卷……四十八錢

▼朝鮮・臺灣・樺太・支那……七十錢

國民の大寶典文化の精髓として謳はれたる日本百科大辭典は卷を重ぬるに隨て益信望を高め購求者の數を激增しつゝあることは既に世人の承認せらるゝ處也諸君が日夜矢の如き督促を放ちて發表の日を期待せられたる第四卷は茲に愈々公刊の報告をなすの光榮を得たり本書が既に過半の功程を終へたる今日に當りては諸君が其の完成の期の近き將來にあるべきことは毫も疑ふの餘地なし殊に第一・第二第三卷發表當時の經驗に徵するも多數殺到の注文に對しては勢ひ着金順送本の公平なる措置をとるの已むなきものあるが故に申込の遲延一日なれば本書が諸君の書齋に到達するの遲速は非常の懸隔を生ずべし先んずれば人を制するの言果して吾人を欺かざるを信じ賜はば一刻だも遷延することなく最も迅速に注文申込あらんことを切に勸告す

發行所　東京神田　三省堂書店　振替口座五一九七

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第廿六年第二號目次

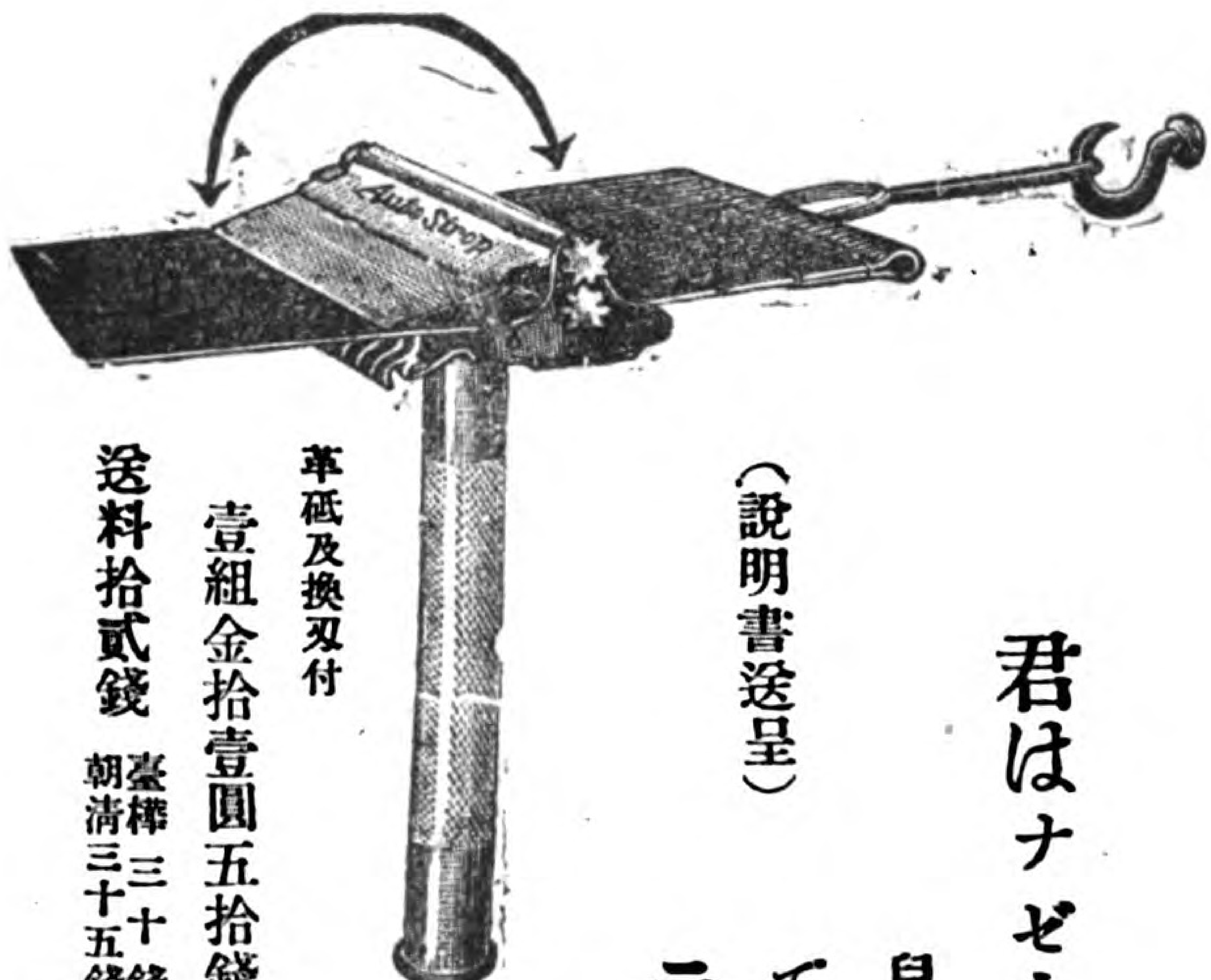
▲公論

▲說苑

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

オートストラップ

自働研安全剃刀



君はナゼ小汚なく鬚を生やしてる？

（説明書送呈）

兒供てさへ安心して造作もなく使へて便利て愉快て時間的にも經費上にも經濟なオートストラップ安全剃刀あるを君は知らざるや

一度でもオートストラップを試みたる諸君は寝るにも起るにもツイ二三日の旅行にもオートストラップを離す事が出來ぬ

オートストラップは便利と安全と清潔と愉快とを與へる文明の利器也

革砥及換刃付
壹組金拾壹圓五拾錢
送料拾貳錢　臺樺三十錢　朝清三十五錢

東京日本橋通
丸善株式會社

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Alpenmärchen



K. DIELITZ PINOC

中央公論



第二十六年
第二號
第二百六十三號

政黨首領を警む

（一）

桂内閣は近時頗ぶる不人望となれり、而して内閣自身もまた稍々政治に荒さまんとする傾向あり、英國との間に關税問題の起るを豫想せず、且つ此の問題より延きて、他の列國とも難問題を生ぜんとする形勢あるべきを洞察せざりし疎虞を第一とし、鐵道廣軌案を提げ來りて財政の破綻を求め、自から所得税法改正を棄てゝ、税制整理を打切りたる如き、其の顯著なる明證とす。

此の時に當つて、政黨が一蹶して内閣を殪し、取て以て代らんとする慾望の禁ず可らざるは當然のみ、將さに殪れんとする内閣と妥協して一期の議會を無事に過さんとするが如きは、血氣剛壯なる政友會員

の斷じて忍びざる所ならん、其幹部の老輩は、桂内閣の繼承者を物色し、成るべくは其の繼承者と提携して一種の聯合内閣を組織するにも、今徒らに桂内閣と絶縁し攻撃するの快は則ち快なるも、差引乘除して黨に利益あらざるを察知し、多少の不人望を忍びても、尚ほ妥協するに如かずと斷ぜんも、少壯血氣の士に至ては、未だ斯くまで考慮する能はず、一血戰を以て敵に勝つの花々しきを夢想して髀肉の歎に堪へざらん。

若し夫れ國民黨の少壯派に至ては、久しく政治狀態の固定せるに倦み、内閣の漸く搖撼せんとするを看、一快戰して以て局面を一新せんと欲するの情更に切なるものあるべし、必らずしも取て替るの成算なきも、甲を仆し乙を倒し、倒して丙丁に至れば、氣運は自から循環して漸く我れに及ぶなきを保せず、内閣と政友會の妥協のために、一寸分も力を伸す能はざるが如きは、殆んど其の耐ゆる所にあらずとす、茲に於てか彼等は政友會の戰志を激勵すべく、兩黨聯合の聲を揚げぬ、先づ兩派少壯家の會見を策しぬ。

原、犬養の如き兩黨の宿老輩も、其の衷心は知らず、表面は此の傾向を利用して各々爲すあらんと企てしや論なからん、少くも政友會の幹部が、之を以て内閣威嚇の用に供せしや疑ふ可らず、蓋し内閣が妥協の意なしと聲言し、且つ一面には解散風を吹かせて以て强硬の體度に出づるや、政友會の幹部に少からず疑惑したる者あるは事實也、彼の廣軌改築案に於ける内閣の謀略は、政友會の意表に出てたりしが如し、現に改築線路に當る東海近畿山陽の諸道に於て、贊成者の到る處に少からざるを利用し、此の勢を以て政黨の内部を攪亂するは勿論、更に廣軌改築を速かならしめずんば、地方未成線の速成また得

て望む可らずと唱へ、未成線速通を標榜して地方の民望を收めんとする政黨の裏を掻けり、是れ政友會の少からず恐慌せる所、若し強ひて戰はゞ、自家の陣中より敵を出すの危禍を免かれざるのみならず、宮中に御信任ある一派及び陸海軍人と怨みを結ぶの不利をも受けざるなきを保せず、是れ平生利害の打算に重きを措く政友會幹部の避けざるを得ざる所、内閣の態度に疑惑せるも故なきにあらず。

内閣と雖も、政友會の進退には少からず懊惱したりしが如し、徒らに戰端を啓くは時局を紛更するのみにして何等の利益あるにあらず、但し政友會果して國民黨を聯ねて一大鏖戰を爲すの決心ならば、假令妥協を求むるも得べからず、却つて益々我が弱を示すのみ、故に内閣は暫らく形勢を觀望し、且つ一面には細作を放つて、政友會中の各團體を煽起し、大に非幹部の聲を揚げしめ、其の聲をして遙かに其の實に過ぎしめたりしが、既にして政友會の眞意を看破するや、竟に密かにアンダアスタンヂングの端緒を開けるが如し、原敬氏が桂侯を訪ふて密かに非幹部團體の聲を放たしめざらんとを要望せるは、實に妥協成立の一證左ならざらんや、少くも妥協を開くの餘地を拓きて、共に歩武を進めつゝある徴候ならざらんや。

（二）

廣軌改築案は、國民黨に取てもまた攪亂の槓杆たるに似たり、未だ節制なくして議論を好むと甚だしき此の黨は、其の大會の準備會に於て、端なくも此の案に論戰を開けるが、首領の一人なる仙石貢氏は、廣軌が自家の宿論たるに於て、且つ桂侯との會見に際して明言せるに於て、假令脫黨するも廣軌案を贊

すといひ、犬養毅氏例に由て之を反駁せしが、結局委員十五人を設けて之を調査することとし、大會決議の宣言には、暫らく之を掲げざることとなれり、然るに十九日の大會に於ては此の決定を打破し、大多數を以て廣軌案否決の宣言を發表するに至れるを以て、今や仙石氏一派の去就は大なる疑問となりぬ。

此の間政府側若くは他に事を好むの策士あり、乘じて以て兩者を煽動し敎唆せんか、面白き政黨戰は演ぜらるべし、仙石氏が脫黨の場合、大石正己氏は其の情誼上果して同じく進退せざるや否や、若し大石氏にして仙石氏を助けば、彼の舊改革派なるもの、果して一齊に蹶起するや必然ならん、改革派の一類暫らく垢を含み辱を忍べりと雖も、機を看て志を逐げんとする久し、今や仙石一派と共に猛然蹶起せんか、國民黨の紛擾は宛かも鼎沸の如くなるべし、犬養氏は例に由て惡戰し苦闘すべし、河野廣中氏島田三郎氏等は例に由て踏跙逡巡すべし、是れ或は政黨革新の端緖たるも未だ測る可らず。

若し國民黨にして廣軌改案に贊成せん乎、政友會は頗ぶる苦境に陷ゐらざるを得ざりしならん、國民黨中央俱樂部共に廣軌に贊成して、而して政友會獨り之に反對せん乎、黨中に異論者を生じて、政府の壓迫、地方の抗議のため、幾んど分裂をも免かれざる可ければ也、然るに國民黨既に廣軌反對と決す、政友會は今や安んじて內閣の死命を制するを得ん、廣軌案の運命は一に繫りて政友會の掌中に存すれば也、政友會は思ふがまゝに內閣を操縱し、思ふがまゝの條件を取りて以て妥協を爲すを得べし、故に國民黨が廣軌反對を宣言せしは、政友會に取て大なる利益也、國民黨の策士或は之を以て政友會をして大に政府を窘ましめ、以て兩者の間に一大溝渠を築成するに止まらず、場合によりては政友國民の提携を

も看るべきを豫想して、咄嗟に此の宣言を發表せしものか。

但だ仙石氏一派の進退は、今後一の疑問なるべし、若し大勢の到底可ならざるを看て默止せば則ち已む、然らずして奮起し、而して多くの策士其の間に籌略を試みんか、何等の展開を視るや俄かに測知すべからざるものあらんとす、思ふに政府側の策士は、死物狂ひとなつて廣軌案の形勢を盛返さんとすべし、獨り國民黨に紛更を起さしむるに止まらず、或は政友會中にも波瀾を揚げしむべし、兩黨の領袖が之を抑ゆるの巧拙は吾人多くの興味を以て之を傍觀せん。

（三）

然れども政友會にして廣軌案に就て甚だ多きを望まず、或は未成線の速通を條件として賛意を表せんか、内閣と政友會との妥協全く成りて、國民黨の存在は殆んど認識せられざると一般ならん、事玆に至らば、今年の議會も亦大體に於て無事ならん、小なる波瀾あるも、結局内閣と政友會と致命傷を負ふに至らず、聊かながらも面目を保ちて交綏するに終るべし。

是れ平凡の極也、然り、平凡なりと雖も多分此の外に出でざらん、國民の彌よ倦むや言なきのみ。

（四）

形勢は實に斯の如し、然れども吾人は政黨首領の反省を促さゞるを得ざるものあり、政黨は理にあらずして勢ひ也、已に存在する以上、力めて之を善用するを智とす、是れ經世家の希望する所にして、政黨を指導する首領其の人の任ならずや。

素より公式にはいふ可らざるも、政黨をして國民の意思を代表せしむるとは、頗ぶる國民の便とする所なるべし、或は政黨を指導し、政黨を透して國民に政治教育を施すも亦妙ならずとせず、政黨の存在を幸ひに斯くするは、是れ政黨を善用する所以なりとす。

此の前提を以て、吾人は政黨首領の任務を判斷するに、多く謬りなきを得べし。他なし、彼等の志は常に國家社會にあらざる可らず、民衆のために謀すを以て主眼とせざる可らず、素より政黨として權威を要する以上、多數に由て力を得ざる可らず、多數を得るがためには、若干の機略と駈引とを要せんとは、之を認めざる能はずと雖も、多數を得るがために俗衆に媚び、俗衆の意を迎へて愚論に殉ずるが如き、國家社會の利益に反して、獨り一黨の私利私情を主とするが如きは、必らず之を避けざる可らず。

今の政黨には果して此の公心ありや、堂々乎として國家社會を指導し、其の經綸を實にするの抱負ありや、政黨の議會にある、豫算提出の權を有せざるも、之を修正し補綴する特權を有す、夫れ豫算は一切の政綱を、具體的に實行する所以なるを以て、政黨に果して經綸あらば、豫算に就て旗鼓堂々大に政府と爭はざる可らず、外交を難じて移民の滿韓集中を非とし、太平洋の彼岸に大に殖民するの抱負あらば、新たに移民局を設くるも可也、益々中米南米の航路を盛んにするも可也、即ち其の費目を加へて豫算を修正せしむるを捷徑とせずや、或は海軍擴張を小規模に過ぐと爲すか、更に幾萬噸の艦艇幾隻を建造するの案を立てゝ、其の經費を提出せしむるも易々たらん、或は北守南進を可とするか、北方の經營

費を節減して南方進取の諸經費を計上せしむべきのみ、此の大方針を以て豫算を修正し補綴することを爲さず、僅かに豫算委員會に於て、外交又は陸海軍に就て質問的演說を試むるに止め、豫算に就て大なる修正を加ふる能はざるは何ぞや。

内閣を罵つて藩閥又は官僚と爲し、其の爲す所多くは非立憲なりといひ、政黨内閣にあらざれば憲政の完美を得べからざるが如くに呼稱す、斯くして自家の内閣に立たんことを主張するのみにして、内閣に立て行ふべき經綸に至ては、幾んど寸分だもあることなし、是れ唯だ政權を得て私威を張り私情を恣にせんと欲するのみ、由て以て國家社會を向上し發展せしむる計圖あるにあらず、奚んぞ國民の信用を得べけんや、否、國民を指導するが如き、思ひも寄らざるのみ。

藩閥内閣は尙ほ十年の精苦を積みて日清日露の大戰役を敢行したりしにあらずや、彼等には一定の目的を立てゝ、倦まず怠らず其の準備を爲すの經綸ありき、是れ頌辭にあらず、諛言にあらずして事實也、然り、何ものよりも明確なる事實也、今の政黨者流が元首の信任を得ず、國民の信用を得ざる素より其の所のみ。

（五）

政黨の分裂する可也、連合する可也、内閣と妥協するも可なり、大に奮戰するも亦可也、要は國家社會のためにする公心に出て、國民を指導し、少くも國民に政治敎育を施すの善意と經綸とあれば可也、之なくして徒らに訌爭し紛擾し、分裂し和合し、妥協し開戰するも、國民には何等の交涉あらず、國民

は寧ろ年々歳々其の同一事々繰返すを視るに堪えず、竟に之を唾棄するに至るべし、政黨首領たる者深く心せざる可んや。

國務大臣の進退伺ひ

(一)

刑法第七十三條に該當する逆徒の犯罪出て、其の特別裁判所に於て宣告を下すや、桂、平田、大浦、小松原の四大臣は、恐懼措く所を知らずとして、罪を闕下に待てるに、至尊は其の儀に及ばず、益々精勵して國務に當るべき旨御沙汰を下し給へり。

四大臣の恐懼せるは、治安の責任あるに於て(內務大臣)、犯罪の發端が其の管下の製材所にあるに於て(臨時農商務大臣、農商務大臣)なるべし、逆徒の凶謀が危害を至尊の龍體にまでも加へんとせし以上、大臣が恐懼する洵に理なきに非ず、然れども何が故に待罪と稱して進退伺ひを爲したるや、抑も大臣の本義として、進退伺ひなるものあるべきや、之あると果して立憲政に於て許すべきや否や、吾人は天下未だ起て之を切論する者あらざるを慨す。

農商務次官齋藤某が衆議院より官紀振肅を楯として彈劾せられ、延きて後藤農商務大臣にまでも及ぶや、時の總理大臣たりし伊藤公は、一篇の奏文(然かも漢文なりしと記憶す)を闕下に奉りて進退を伺へ

るに、陛下には優詔を賜はりて在職を命じさせ給ひ、公は此の奏文と優詔とを議場に公けにしたりしことありき、大臣の進退伺ひは、恐らくは之と今回の四大臣の其れとなるべし、少くも立憲政創始以後に於て然るべし。

吾人は伊藤公の措置を第一に非難したりき、隨つて今回の事も、亦四大臣を非難せざらんと欲するも得ざるのみ、吾人の見は、進退伺ひなるものは普通官僚に於て爲すに止まり、國務大臣に在ては、斷然之を許す可らずと做すに在ればなり。

(二)

國務大臣は、辭職に由て一切公けの責任を解除せらる、苟くも刑法に問はるゝ犯罪人たらざる以上、換言すれば政治上一切の責任は、總て辭職に由て解除せらる、是れ普通官吏と選を異にする所以にして、又現に國務大臣に對する懲戒なるものあらざる所以とす。憲法上國務大臣の義として定むる所斯の如きが故に、大臣の辭職は君主と雖も奈何ともす可らず、隨つて大臣は其の責任を他に分つ能はず、又嫁するを許さず。

彼の陰謀を企てし逆徒の出でしを以て、果して施政宜しきを得ざるの結果とする乎、或は董督其の宜しきを得ざりし罪とする乎、換言すれば大臣自個の責任なりとする乎、然らば則ち斷じて其の職を辭すべきのみ、何を惑ふて進退を至尊に伺ふを要せんや。

吾人の見を以てすれば、彼の逆徒の出づるを未發に防止し得たるは、實に當局の功績とす、世或は警

察の彼等を尾行するの過酷なりしを責むる者あり、然れども之を以て彼等が未曾有の大逆無道を企てし動機と做す可らざるや勿論にして、寧ろ尾行監視の斯の如く嚴密なりしが爲に、幸ひに彼の大逆謀を未發に防止し得たるを慶すべきのみ、思へ、彼等をして其の大逆謀に着手し實施せしめて、萬々一にも至尊並びに皇族の御身に不祥事あるか、或は御怪我にてもあらせられ、或は宮城其の他を爆發するが如きとあらん乎、若くは鹵簿を紛亂せしむるが如きとあらん乎、歷史有てより未曾有の汚點を後世に貽す可く、忠誠なる臣民は、昊天に號泣し、彼等逆徒の肉を啖ふもまた奈何ともす可らざらんとす、想ひ一び茲に至らば、誰れか悚然として肌に粟を生ぜざらんや、唯だ幸ひに之を未發に防止し得たりしものは、至尊の聖德天に徹して、常に天佑を享有し玉ふが故のみにあらず、又實に警察の尾行監視極めて嚴密なりし効果ならずや、即ち當局の用心命令其の宜きを得たりし結果ならずや。

此の點よりいへば、大臣の如き寧ろ功あるも罪すべき所以を視ず、至尊の大御心を忖度し奉つるは餘りに畏れ多し、唯だ四大臣等に至ては果して事體を視ると能はずとする乎。

農商務大臣は素より製材所を管す、然かも其の雇ひ職工の徒に至るまでも、一々其の身元を知るとは不可能也、之を以て責任ありとす可らざるや言を要せず。

若し不幸にして彼等逆徒の陰謀を知る能はず、之を防止するの手段に出でずして、竟に凶逆を恣にせしめん乎、此の時に當つて大臣豈責任を逭れんや、內閣を擧げて總辭職を爲さんと論なきのみ、治安秩序を維持するの力を缺くもの素より局に立たしむ可らざれば也。

寧ろ功あるも罪あらず、假令恩賞を望むを非とするも、罪を闕下に俟つの理あらざる也、然るに敢て進退を奉伺す、今の大臣なるもの果して然かく理義に昧きか。

犬養毅氏は、國民黨の公會に於て、彼の未曾有の逆徒の出てたる一助因を以て、今の如く藩閥流が久しく政權を獨占するに歸せしといへり、吾人の見を以てすれは、是れ實に淺薄極まるもの也、若し氏の説の如くならば、米國大統領は何が故に無政府主義者の兇手に殪されたる乎、何が故に佛國大統領カルノオ氏も同じ毒手に斃されたりし乎、若し彼等逆臣にして、眞に一部の徒が政權を獨占するに激せしとすれば、何が故に桂侯以下に危害を加へんとはせざりしぞ、言ふまでもなく無政府主義者は國家社會を無視して、現在の階級を一切破壞せんとするもの也、此の見地よりして大逆無道の擧を敢てせしのみ、假令少數黨たる犬養氏一派政府に立つも、無政府主義者は依然として大逆無道を企てん、之を知らざる犬養氏の説は、淺薄嗤ふべきものにあらずして何ぞや。

桂侯等の四大臣にして、若し犬養氏と見を同じくするか、然らば則ち何が故に自から其の内閣を去らざるや、若し犬養氏にして國務大臣たらば、或は責を引きて辭職するも亦測る可らず、然れども吾人は斯る場合内閣に何等の責任あらずとす、責任あらざるに職を辭するは、大臣責任の義を無視する也、其の進退に惑ふ可らざるに惑ふは不明也、少くも四大臣は不明の譏を免かる可らず。

(三)

大臣には進退伺ひを許す可らず、之を許す時は、責任を元首に嫁するの幾を生ず可ければ也。

支那及び我が藤原時代に在ては、權臣等故らに骸骨を乞ひ、骸骨を乞ふ毎に優詔を賜りて其の職に留まれるの例甚だ多し、是れ權臣權を恃みて、信任を君主に强ゆる也、實は君主を侮れる不臣の擧にして、立憲政の今日に在ては、斷じて容す可らざるものとす。

四大臣の罪を闕下に待つや、素より權臣の權を恃みて至尊の御信任を强ゆるものにあらざるや言を俟たず、然れども大臣進退を奉伺する結果は、漸くにして責任を至尊に嫁し奉つるの惡例を開かんとす、或る事實問題に對する大臣の進退伺ひに就て、至尊より留職を命じ給ふとあらば、問題の責任は漸やくにして君主に嫁せらる可ければ也、夫れ立憲大臣の本義は、責任を他に分つを許さず、如何ぞ之を君主に嫁し奉つるを許す可けんや。

吾人は素より今の黨人の如く、大臣を目して非立憲と爲すものにあらず、然れども今回の進退伺ひに就ては、彼等果して立憲大臣の義を知れりや否やを疑はざる能はざるのみ。

夫れ大逆無道の犯人の出てしは、悲むべき事象にして、大臣等の恐悚し惶懼する素より其の處にして、眷々たる其の誠意は、吾人も亦深く之を諒とすと雖も、現に大臣たる以上、待罪と稱して進退を奉伺するは斷じて非也、吾人は之を切論して以て立憲大臣の本義を明瞭ならしめんとす、讀む人亦吾人の微衷を諒とすべき乎。

宗教家教育家の人格

釋迦、孔子、耶蘇は所謂世界の三聖也、其の人死して古きは三千餘年、新らしきも幾んど二千年なるに、其の言其の說、尙ほ不朽にして、益々光輝を揚ぐるは何ぞや、其の人格崇高なれば也。

孔子は牛を飼ふ卑吏ともなりき、一國の大宰相ともなりき、到る處夙く好成績を擧げ得たりき、然れども才の斯の如くなるもの、古今箕以て量るべし、彼れの不朽なる所以は玆にあらず。

彼れは仁義を以て個人に敎へ、王道を以て一世を救はんとし、陳蔡の阨に處しても尙ほ安然として節を渝へざりき。

其の才を以てし、其の藝を以てせば、彼れや到る處宰相の印綬を佩びて勢威と富貴とに飽き得しならん、然かも救人濟世の心深く、終生不遇にして怨まず、弟子を治めて道を講習したりき、其の人格の珠の如くして潔き、實に多く其の比を視ず。

基督は卑人の子なり、生れながらにして盲者の眼を明かにし、跛者を起たしむるの奇術を有したりき、然かも是れ多くの修驗者豫言者の能くせし處、彼の不朽なる豈此の小術の爲めならんや。

彼はナサレの野にも法を說き、一切世俗の人をして總て汚れたる罪を悔ひ賠はしめんと欲し、熱烈に異端を排して其理を揚るに努めたりき、之がために多くの異敎者に憎まれ、權勢者に怨まれ、竟に鐵索に縛せられ、荊棘を冠せられしも避けず、十字架上に磔殺せられても尙ほ屈せず、人を敎へ世を救ふが

ため、復活して永く現はれんと誓ひたりき、其の人格の崇高偉大なる、幾んど人間を超脱す、歐米人が二千年來救世主として崇むる實に故ありと謂ふべし。

釋迦牟尼は王者也、美妻あり、愛兒あり、人生榮華の極を盡す、然かも四門を出てゝ世相を觀、世を救ふの大志を起すや、王位と榮華とを捨てゝ、孤影飄然として遠く山に入り、樹下石上に趺坐して有らゆる苦惱に打勝ち、屢々死してまた活き、覺に悟道徹底す、始めは絕世の好丈夫玆に至て唯だ僅かに骨立するのみ、是より一切の富貴を斥け、慈悲忍辱を主として衆生の濟度にのみ盡瘁す、其の志操の宏大にして人格の崇嚴なる、洵に三聖の冠冕たり、論語バイブルは簡にして何人も誦すべく、其の言說二聖と共に不朽なるも、佛典は乃ち然る能はず、抑もウパニシャドの哲學深遠にして、釋迦牟尼世に出でざりし時より存し、後に阿難馬鳴あり、列祖相受けて彼の巨然たる典經を結集せしのみ、唯だ人格の高大なると共に敎典も亦甚大甚深にして、萬世に相傳へて不朽とす。

然れども佛敎の不朽なるは必らずしも敎典にあらず、實に釋迦牟尼の人格也、然り、其の宏大崇嚴なる人格によりて、萬世の後尙ほ人を感孚して涅槃を得せしむるのみ。

後の宗敎家敎育家動もすれば此の事實を顧みず、徒らに其の言說を高妙ならしめて以て競ふて効果を擧げんとす、其の努むること彌よ多くして獲る所彌よ少き其所のみ、彼等の理を說き知を盡すや、幾んど前聖に優るといはざるも、又必らずしも多く讓るあらず、然るに人の感化さるゝもの幾んど全く之あらざるは何ぞや、其の人格低ければ也、彼等自から其の人格に由て、人を敎へ世を救はんとせざれば也。

妻妾相和せず、親子內に鬩ぎて外に醜聲を傳へ、甚だしきは法廷に晒され、新聞紙に傳へられて、一代の嗤ひを招くあり、而して傲然として自から一宗の開拓者といひ、當代の活菩薩と稱す、甚だしい哉彼等の自から知らざるや、德は人格に在り、其の智術を以てせば、古の三聖何ぞ今の學者に及ばんや、然かも千萬世に不朽なるは、其の人格の高さ、恰かも人間を超越すれば也、人の聖となり神となり佛となるは、智にあらず、術にあらず、德也、人格也、所謂自我をして神の人格化と同一ならしむれば也、救世の志あるもの夫れ深く之を思へ。

日米親交策

法學博士 小河滋次郎

北亞米利加は一衣帶水を隔てゝ太平洋の彼岸に位し我が開國以來、政治的、經濟的及び社會的發展の上に最も密接の關係を有する隣邦であつて、自然の地勢から考へて見ても此關係は將來と雖も永久に持續せらるべくまた持續せらるゝことが相互の利益であると信ずる、日米の關係に付て近年往々にして兎角の物議を試むる者あるを耳にする所であるが一個人間にしても其交際の親密を加ふるに從て益々關係が複雜となり其間には自ら色々面倒なこともまた時としては面白からぬことも必生するを免かれぬと同じく況んや廣き範圍、紛糾せる事情の下に於ける國交關係の上にあつて時として多少の利害の衝突、感情の阻隔あるを免かれざるは當然であつて何も深く憂ふるに足らざるのみならず寧ろ國交の益々親密を加ふるに至りたる事實を證明するものとして之を樂觀し、一時の出來事は總て其解決を我が外交の當局に信賴して安心し、我々一般の國民としては虛心坦懷、各方面より益々此自然的日米の隣交關係を親密ならしむるの工夫を講ずることが特に我が文明の發展及び平和の進運の上に必要なることゝ信ずる、一犬虛を吠へて萬犬實を傳ふ、少くも勢の激する所、心ある者、亦た多少、疑惑の念を起し、疑念の存する所、自ら求めて感情の疎隔を來たし、終には知

らず識らず、所謂瓢箪から駒を生ずるの珍事を惹き起すに至るを免かれざるものである、能く彼我の國情を詳かにし若くは親しく彼の國民に接して其眞相を知る者に於ては固より日米兩國の間に今日と雖も何等一點の蟠雲あるを認めざる所であつて親交の順潮に進みつつあるを信じ且つ進まんことを祈りつゝあることゝ信ずる、余が北米滯留の期間は前後を通じて僅かに一個月半に過ぎず、交游の範圍亦た敢て廣かりしと云ふには非ざれども萬國會議に列席して多くの上流米國人に接し、廣く各州を歴遊して多くの地方各方面の有力者に應酬したる所に由り他の歐洲各國を週遊して得たる印象と比較して之を言へば余の學系上の關係より何れかと云へば米國趣味に對して平生さほどの好感を有せざる者なるにも拘はらず啻に專門科學の研究の上に豫想以外の利益を得たるのみならず米國々民の概して我れに深厚の同情を有し、國としてまた個人として大に敬愛すべく而して他國に見る能はざる特性に富めるものある事實を認めたことである、先回、米國に渡航せられたる澁澤男爵以下の實業團の一行の如きも略ぼ余と同一の感想を齎らし歸へられたりとか傳へ聞いて居る所であるが是れは左もあるべきことゝて渡米者の多くの者が必す其感想を同ふすることゝ思ふ、誤解は不知に基く、相互の國民をして其國の眞相を知らしむると云ふことが誤解を防ぎ親交を進むる最良の手段たるは言ふまでもなきことであるが日本人として米國を知らず、特に米國民の間に未だ我が日本の國情の了解せられて居らぬことは意外に甚しきものあるの事實である、地勢及び歴史の上から歐羅巴と違ひ米國などに於ては最ふ少し日本の文明の眞相が知れ渡つて居ることだらうと思ひの外、實際に當て見ると其知れる程度の極めて薄く且つ低くして事々物々其見當違ひの甚しきに驚かさるゝことが多いのである、米國人の側から見たら日本人亦た然りと云ふてあらふが兎に角相互の間に未知のこともあれば皮想的に速斷せられつゝあることも多くこれが原因となつて幾多の誤解又は意思の阻隔を惹き起すに至ることあるは勿論、之が爲めには國

交に由り文明發展の上に相互に收め得らるべき幾多の利益も之を捨てゝ顧みぬと云ふやうなことになつて居るてはないかと思ふ、今後益々日米の親交を密接せしめんが爲めには米國人をして大に我が國情の眞相を知らしむるの道を講ずることの必要てあるは勿論、近年頭本元貞君の經營の下に紐育に設立せる東洋通信局の如きは確かに此目的に向て有力なる一機關たるを得べく我が一般國民としても外國人殊に米國人に對して一層大に來遊の便を圖り誠心誠意を以て成るべく彼れに滿足を與へつゝ我れの眞相を了解せしむるの歡迎を爲すも亦た必要のことゝ思ふが何れかと言へば彼れの我れを知るを待つに及ばず、進んで先づ最ふ一層我れより彼れを知り努めて彼れに接近するの道を講ずることが急務であると信ずる、由來、米國は我が開國に先鞭を着けたる深き緣故あると共に我が文運の開發に付ても各方面に渉つて比較的最も多くの援助を與へたるの歷史を有するに拘はらず、實際また經濟的及び社會的の上に年々長足の進歩を以て益々接近の度を加ふる所ありたるに拘はらず精神的方面若くは學問的關係の上より之を觀れば明治初年の親密なるに反して年々反て相疎隔するの傾向を來たしつゝあるやうに見へる、早い咄が曾ては我が俊才の米國に留學する者の數も多く米國歸へりと云へば隨分、社會の各方面に幅を利かすことを得たものであるが今の狀態は即ち全く之れに反し、米風甚だ競はず、書生の留學と云ひ官邊の取調と云ひ千遍一律、歐洲に非ざれば殆んど一の得る所のものなきかに盲信し、滔々風を成すの結果、甚しきは即ち齒科を獨乙に修め電氣事業を英國又は佛國に調査して足れりと爲す者あるのみならず、多年米國に專攻して成業を告ぐるに至りたる所の者も足一とたび歐洲の地を踏まざれば人に信ぜられず自らも亦た安んずる能はざるべしと云ふやうな事情である、此くの如くにして日米兩國の間に精神的若くは學問的關係の漸々相疎隔するの傾向を來たすは寧ろ自然の勢と謂ふべく、若し夫れ科學其他各種の研究に關する事項に於て實際、果して歐洲を以て米國に優される者ありとの事實なら

ば兎も角も余の信ずる所を以て之を見れば歴史的關係の上より歐洲の北米合衆國に先進たるの地位を占むるは勿論なりと雖も歴史の先後は必ずしも實質的文明の價値を斷ずるの標準たる能はず文明の古きを以て貴しとなさば西班牙葡萄牙を以て最も貴しとすべく、英佛また荷蘭に及ばず、獨乙の如きは新まへの文明國として最下班の地位に列せしめねばならぬ譯である、此下風に立つべき而して實際また多くの點に文明の處女たるを免かれざる獨乙を謳歌するの勇氣ある我が學界の人にして各種の科學又は制度の上に古き歐洲に見る能はざる多くの新説若くは長所を有する米國に顧みる所なしと云ふは如何にも辻褄の合はぬ咄と謂はざるを得ぬ、然かも思ふに之は必ずしも故意に出てたる譯でない、或は英學派と云ひ或は佛學派と云ひ或は獨乙系と稱し、時に由て變更したる政略上の方針が何時となく知らず識らずの間に學界の風潮を支配し、學者の眼中唯だ歐羅巴あるのみを知り猫も杓子も相率ゐて歐洲に學ぶことになつたが爲めに大勢終に歐洲方面に偏傾し自然と米國を我が學界より忘るゝやうな風をなすに至りたるものと思ふ、勿論、今日に於ても我が學界に於ける各方面の有力者にして米國に學んで一家を爲し現に尚ほ米國に在て研究を遂げ修養を進めつゝある者も少くない、然かも一面に於ては官邊などに於ける留學生と云へば十人が十人殆んど皆な歐洲の方面にのみ派遣せしめらるゝの實況なるに加へて所謂米國歸りと稱する者の内には勞働に專らなりしが爲めに學問上の知識の甚だ淺薄なるを免かれざる者も多いことであるが故にさらぬだに滔々たる世の風潮に支配せられて一般社會の重きを米國歸へりに――少くも學問の上に――置かざる等の事情と相待て玉石混淆、學問上の成功者までをも動もすれば即ち皿拭學者なりと輕蔑するが如きことゝなり其人と共に米國に於ける文明又は科學の價値を疑ひ往々にして終に米國は物質的進歩の著るしきものあるに反し精神的には殆んど一の學ぶに足るものなしと云ふが如き淺薄なる速斷を下す者あるに至らしむる次第であつて若し心ある者をして此言[illegible]

かしめたならば如何に日本人の米國を理解することの淺薄なるの甚しきに驚かしむることであらふ、日米間の親交を計るの道は前にも言ふが如く精神的及び物質的、總ての方面より成るべく彼我相接近せんことを努むるに如かずてあるが今の我國の立場より之を見れば特に重きを精神的方面の接近に置き差向き先づ學問界の連絡を最ふ一層密着ならしむるの方針を取り科學の種類に由て各國夫れ〳〵特得の長所のあることてあれば例へば等しく官邊より留學生又は調査員を派遣する場合に於ても唯歐洲方面にのみ偏重するが如き慣例を改め廣く歐米各國に於て研究調査を命ぜられたる派出員の如きも其實、歐主米從、米國の視察と云ふは名のみにして僅に紐育桑港間を素通り的横斷して我が任務了はれりとするやうな從來の弊を矯め、紐育なり市俄古なり將た母斯頓なり相當の地點に綏然腰を据ゑて十分米國の本領を研究するやうに爲たいものてある、而して此の精神的に米國との接近を計ると云ふことは啻に日米の親交を進むるに有效なるのみならず、直接にはまた我が學界の發展我が文明の進運に直接偉大の原動力を加ふることになると思ふ、外國崇拜、固とより褒めた噺に非ず、而かも或る限られたる一國の學系に傾かんとするが如き風潮あるは今の我が學界に見るの弊にして學問の獨立、之が爲めに危く國運の發達、之が爲めに既往すてに幾多の障害を蒙り將來、また益々其惡影響を蒙むる所あらんとす、今にして此弊を矯むるの必要より之を見るもまた廣く知識を世界に求むるの大旨の上より之を見るも今の我が學界に更に亞米利加研究の新科目を加ふること最も機宜に適したる策てあると信ずる。

他の方面は姑く擱き單に余の從事する狹き刑事學の範圍に就て之を觀る、由來、米國に在ては刑事制度の局面を展開したる若くは展開すべき新説新施設の各國に率先して唱道實行せられたるもの甚だ多く此點に於ては流石に文明の先進を以て誇る歐洲にあつても常に節を屈して米國に學ぶの已むを得ざる立場に居る姿てある。監獄改良の先驅をなしたるも米國てある、獄制

に所謂分房式なるもの丶如きも一に之を「セパレートシステム」又は「ペンシルバニヤシステム」と稱し、今より約百年前の昔しに「フヰラデルフヰヤ」に建設せられたる監獄が即ち此主義を實行したるものであつて今の各國に於て獄制改良の理想とする歸着點も亦た此に外ならぬ次第である、一たび此主義の米國に實行せらるゝを見るや英佛獨其他の各國は競つて委員を米國に派遣し、其齎らし歸りたる研究調査の報告が即ち歐洲に於ける具體的獄制改良の進行を促がすに至つた譯てあつて獄制の改良は延いてまた一般刑罰制度の革新を必然ならしむるの結果を見たのである、其他或は「プロベーションシステム」(試驗制度或は處刑猶豫制度とも稱す)と稱し或はパロールシステム(誓約的釋放制度と譯す我が假出獄制度に似て非なるものなり)と稱し或は「レホルマトリーシステム」(感化的處刑法)と稱し或はインデターミネートセンテンス(不定刑期)と稱し或はジユブナールコード(幼年裁判所)と稱するが如き、何れも刑事制度の新施設として一世を聳動し其多くのものは既に他の各國に採用し若くは少くも採用せられんとしつゝある所なるが其先鞭を着けたるものは即ち皆、米國である、或は應報觀念或は目的觀念、或は人格主義或は事實主義、實際に用なき空理空論に喧々囂々として刑制の活動如何を顧慮するに遑まなき歐洲特に歐大陸諸國の現況なるに反して米國に在ては或は死刑の廢止と云ふが如き或は幼年犯罪者の感化法と云ふが如き或は累犯者又は低能犯罪者に對する特別處分法と云ふが如き其他犯罪豫防に關する社會的各種の保護救濟制度と云ふが如き一般刑制の上に新紀元を劃すべき模範的施設は着々として實行せられ而して其效果もまた日に益々著るしきものあるを現はして居る、凡そ物、一長あれは一短あり、利のある所弊亦た之れに作ふあるを免かれざる所であつて米國に於ける刑制の新施設と雖も固とより大に之れが取捨を要すること勿論なるも少くも一日も早く之を研究調査するは學者の任務であつて其結果の如何に由つては直ちに我が立法の實際に現はれて刑制の改善に資せしめらるゝ譯てあ

る、然るに我が今日の事實は即ち如何學者多くは米國を知らず、少くも直接、米國に於て米國を知ることを欲せず、偶々英佛又は獨乙を介して朧氣に其一斑を知る所あるに過ぎず、之を知るも初めは即ち尙ほ之を信ぜず、固とより進んで之を研究せんとするが如きことも爲さず、歐洲の學界に喧傳せられ將さに研究熱の闌ならんとするに當つてや後れ馳せに漸く此に耳を傾け其立法の實際に採用せらるゝを見るに及ぶや愴惶として忽ち盲從を敢てし唯だ歐洲若くは歐洲の或る一國の之を是認し之を採用したりとの故を以て恰も鬼の首でも得たるが如くに得々として新制度の萬能を謳歌する始末である、何ぞ知らん其所謂新制度なるもの歐洲に於ける面倒なる裏書の手續を了するまでには短きも十年、長きはすでに二十年以上の久しきを過ぎて居つて本家本元の米國に在てはすでに店曝しのセコンドハンドとして扱はれて居る代物であらんとは、古物、必ずしも不可に非ず、然かも多くの歲月を經過し且つ遠く歐洲を迂回したるが爲めに本質は即ち著るしく變化を來たし少くも歐洲的に變形せしめられたるが爲めに其物固有の本領を滅し精神を失ふに至りたるもの比々皆是れなりと云ふ事實である、外國崇拜の弊と云ふべく如何にも堪へ難き次第に非ずや、近く我が新刑法の上に採用せられたる所謂行刑猶豫制度なるものゝ如きは其實例の最も著るしきものゝ一である、此制度の始めて米國に實行せられたのは今から最ふ殆んど四十年も前のことで其結果の極めて有效であつたことは實施後二三年の後には既に世間に發表せられて居つたのである、其れが歐羅巴に知られて先づ英國に採用せられ、一八八〇年の末から九〇年の初めにかけて白耳義佛蘭西と段々多くの國に實行せらるゝやうになつたのであるが獨乙の裏書の手間取りたるが爲めに漸く數年前に至て始めて新制度として是れが我が立法の實際に現はるゝとになつた、而して此制度の實質如何と云へば米國に於て有效の結果を收め得たる「プロベーションシステム」其物の本領は殆んど全く滅却し去られて居る歐羅巴に於て到る所に豫期の成功を見る能はざりし所

以てあつて歐化したる變形の儘之を我れに移したる此制度前途の運命もまた豫め之を測り知るに難からざる所である、尙ほまた近年に至り漸く我が法曹の一部に喧傳せらるゝやうになつた幼年裁判所の問題に就て之を見るも若し是れが歐洲の學界に於ける研究の目的物に供せらるゝことなく若くは歐洲各國に立法の上に之を歡迎採用することがなかつたならば數年以來既に一衣帶水の彼岸國に於て着々其成功を實現しつゝあるに拘はらず我れに在つては恐く尙ほ學界の多くの人の知る所とならず、偶々之を知て之を紹介する所の者ありと雖も到底今日の如き機運を見るに至ることは出來なかつたことてあらふ、日米兩國の間に學界若くは精神界の連絡を缺く所以の事實を證明するものと謂ふべく地理的及び歷史的に最も近く且つ便利なるべき密接の關係あるに拘はらず、米國に於ける精神界の物資は今日尙ほ歐商の手を經、遠く歐洲を迂回し而かも一旦歐洲的に加工變形せしめられたる上に於て始めて我れに輸入せらるゝと云ふ始末である、恰も自分の直ぐ隣りに立派の製造元のあるを知らず態々遠隔せる不便の地に在る小賣店に就て古い高い而して惡い若くは多くの場合に於て贋造又は模造せられたる代物を求むるやうなものであつて獨り學界の耻辱であるのみならず國家の蒙むるべき不利損失もまた至大なりと謂はざるを得ぬ、日米間に於ける精神界の接近を計ることは此の點より見るも目下の焦眉の急務てあると云ふことは明かてあつて將來、尙ほ一層大に而して直接に亞米利加の精神界を研究するの風が興るやうになつたならば啻に我が學界を富まし我が文運の發展を益することの大なるのみならず精神界の接近は即ち國交の親密を加ふる最も確實の基礎となり原動力となり、平和を愛し人道を貴び義俠に富み進取に旺んなる日米共通の國民性は肝膽相照して此に互に益々其提携々團結し其光輝を發揚せしむることが出來ると信ずる、而して此目的を達すること至難に非らず若し我が學界特に學界に於ける先輩諸氏にして進んで此に思を致し率先以て米國研究の必要を唱へ且つ自らまた之を實行する所あらば上の

好む所下之れより甚しであつて忽ち學界の風向を此に傾けしむるに至ること蓋し期して俟つべしてあると思ふ、固とより米國と言はず歐洲と言はず將東洋諸國たると南洋又は亞弗利加たるとに論なく廣く世界の關係事情を研究することの學者又は經世家の任務とすべき所であるは勿論であつて余は必ずしも米國の研究にのみ全力を傾注すべしと言ふ譯てはない、動もすれば或る限られたる一國又は數國の研究にのみ偏注し若くは其國に於ける研究の結果を俟て始めて他の外國の事情を知ると云ふが如き我が學界の傾きあるが爲めに比較的最も直接研究の必要ある米國を閑却若くは少くも深き注意を拂はざるやの現象あるを憂ひ此弊を矯めて以て大に學界本來の任務を全ふするに至らしめんと欲することが即ち余の終局の目的とする所である、歐羅巴などに行つて見ると到る所、學者の間になかく\盛んに米國の研究が行はれつゝあるの實況であつて特に刑事制度の改正等に就ては最も多く米國の新制度を參酌する所あるが如くに見へる、伯林の大學には交換的に派遣せられたる米國大學の教授が二三名居つて或る講座を受持ち大學の學生に對するの外尙ほ時々各所の公開席等に於て盛んに米國的科學の鼓吹に勤めて居る、米獨間に於ける精神界の關係も是等の事情の爲めに近年益々其接近を見るに至つたと云ふ噂も聞いて居る所である。

一とたび米國の文明に接觸したる所の者は何人と雖も其長足の進歩の著るしきに驚かぬ者はないてあらふ亞米利加を見て歐羅巴に移る、倫敦であらふが巴里であらふが恰も都會を去て田舍に入り、光の世界より闇の世界に移つたやうな靜かな落付いた心を起すこと蓋し十人が十人殆んど其感を同ふする所であると思ふ、活動は即ち米國の生命で此活動あればこそ米國今日の大を成すことが出來たのであつて親しく米國に接近して此活動の美風に學ぶだけでも我が文明の發展に益する所、蓋し至大であらふ米國を視察又は調査したりと稱する者口を開けば即ち曰ふ總ての仕掛けが大袈裟なり、規模餘りに大にして近づくべからず、到底取て以

て我れの模範となすに足らずと何ぞ其度量の小なるや、大を希はざれば小も亦た求め難し、其小なるもの永く終に大たるを得るの望みあるべからず、常に小規模に安んじ五年十年の後必ず既往の非を悟るは今日まて我が經濟的社會的各般の施設の上に經驗し來りたる所の通弊であつて此弊源を除去するに非ざれば到底、將來に向て今の我が帝國を平和的に益々大ならしむる望みが少いことゝ思ふ大なる亞米利加に接近して成るべく我が國民の多くの者に其大規模に活動しつゝあるの實況を周知せしめ努めて彼れと其大を競はんとするの氣象を喚起せしむるが如きは確かに此通弊を除去する所以の有效なる手段であつて大なれば大なるほど益々奮つて以て模範となすの覺悟を奮起するに至らしめんことを切望すべきである、米國の文明は物質的に偏し精神的には比較的尙ほ幼稚の域に在るを免かれずとは往々世人の米國觀として耳にする所であるが是れ亦極めて淺薄なる斷案であると信ずる、物質的進歩の根源は即ち精神的進歩にある、健實なる精神的文明の基礎あるに非ずして如何ぞ能く彼の富强の大を致すことが出來やうとは苟くも常識ある者の必ず思ひ到らねばならぬ所である、信仰、獨立、博愛、是等の觀念を歐洲各國の其れと比較して果して如何、個人性としても國民性としても此觀念の堅實旺盛なること米國の如きは恐く他に其匹儔を見る能はずと斷言するを得ん、職務に忠實勤勉なるは米國々民の特長とする所にして富强の基く所亦た此にありとは世の定論ある所なりと雖も更に進んで彼れをして忠實勤勉ならしむるもの如何と問へば余は是を以て信仰及び獨立の觀念の堅實旺盛なるが爲めなりと答ふるを適當なりと信ず、或は曰く米國は拜金宗の本家なりと是れまた誤れるの甚しきものなりと謂はざるを得ぬ、米國に富豪多く到る所に未だ總ての國民が汲々として貨殖に餘念なきの狀態あるは事實なり、然かも彼れは金の爲めに働くに非ずして働くが爲めに富を致し金を得るの當然なるを信ずるに過ぎずして彼れの働くことの獨立を全ふする人生の自然の義務なりと云ふ堅き信念あるが爲めである、彼れ

は又能く其富を分配し其產を利用するの道を知る、社會公共の用途に對して富豪の屢々巨萬の資を義捐するが如き、慈善救濟の事業の普及を計るが爲めに中產者尙ほ其嚢底を叩いて惜む色なきが如き、私有の庭園を開放して公衆の行樂に供する所あるが如き此くの如きは殆んど絕えて他の各國に其類例あるを見ざる所であつて信仰及び博愛の觀念の旺盛なるに非ざるよりは到底かゝる美風を發現し得らるゝ筈がない、拜金宗と云ふが如きは唯だ金を拵へる一面のみを見ての毒舌に過ぎぬことゝ思ふ廣き意味に於ける國民敎育の爲めに公費を投資する額の夥しきことゝ從て敎育機關の設備の發達普及すること若くは書籍、新聞、紙類の需用せらるゝの多きこと。是れまた他の各國の遠く企及する能はざる所であると云ふ點より之を見るも米國に於ける精神的文明の基礎の堅實であつて其今日の富强を成す所以の偶然ならざることが分かると共に其精神界の總てに就て少くも大に之を研究するの必要を悟ることが出來る次第と信ずる、之を要するに米國は物質的と共に精神的にもまた世界無比の大市場である、此大市場に接近して益々其關係を親密ならしむることは何れにしても國運の發展、文明の進步に百利あつて一害なきことに非ずや、昨非を悟りたる余の米國觀の是非如何、謹んで世論に聽く所あらんが爲めに蕪言の公表を敢てした譯である。

婦人參政權論

マスター、オブアーツ　米田實

日常注意を新聞紙の外電欄に拂ふものは、英國に婦人參政權論者の團體あり、或は數千乃至數萬名、倫敦

ハイドパークに集合して示威運動を試み、或は列をなして市内を横行し、或は首相及諸大臣の邸宅若くは馬車を襲ひ、而會を拒まれて暴行を逞うし、纎弱の身を以て獄裡の人となるの報、頻々として臻るを見ん、夫れ英國は保守的國風を以て名あり、民性質實敦厚にして浮薄輕佻の弊あらず、然るに保守的たる中にも一層保守的たる可き婦人連が俄かに此亂行を試むるに至れるは何故ぞや。

世人動もすれば之を嘲笑して曰く、是現時代文化の發達につれ現はれ來れる一時的病症のみと、或は曰く頭腦劣等なる婦人の運動は斯くの如きのみと。或は曰く是彼等が空想に驅られつゝあるもの也、遠からず參政權論の非を悟つて家庭に歸るの時あらん、之に對するの道は放棄の一語のみと、談何ぞ容易なる。

思ふに倫敦婦人運動の外面を瞥見して、直ちに結論を造らんとするもの、眼には、一夕食卓上の[illegible]罵問題たる外何等の價値なきが如く映ずるならん、然かも經世の士は今少しく深く見ざる可からず、知らず婦人參政權問題は一顧の價値だもあらざる乎。

吾人が之に關して第一に指摘せざるを得ざるは、同問題は最早や空論にあらずして事實なる事是也。

英國婦人運動をのみ知るものは、幾分之を夢想視せんとする傾向ある可しと雖も、飜つて他の邦國を檢せんか、事態は全く一變す、先づ歐洲に於て婦人參政權を認め來れるもの少からず、那威、瑞典、丁抹、露領芬蘭の如き是也。試みに那威の例を引かんに、同國に於ては二十五六年前婦人參政權運動起り、十年以前婦人に地方政治參與、地方官吏就職の權利を附與し、又過去六七年間婦人は陪審官として裁判に干與するを許されたるが、一九〇七年六月、斷乎憲法を修正し婦人に議員選擧權を附與したり、其條件に曰く二十五歲以上に達し、自己若くは其夫が市街地なれば二百クロネル、郡村なれば三百クロネルの所得を有し之に對する租税を收むる那威市民たる婦人は議員選擧權を有するものとすと、轉じて南太平洋の新共和政を見んか、夙に婦人參政權を認めたるものゝ新西蘭（ニユージーランド）あり、同州は一

八五三年英國より自治權を與へられたるが二十五年の後（即ち三十四年前）始めて婦人に學校敎育等に關する事項及學務係等の選擧に關して投票權を附與し、其結果良好なりしを以て、三年後に旅館、酒賣買等の項目をも之に加へ、一八九三年即ち十八年前漸く完全なる選擧權を婦人に附與するに至りたり、又濠洲聯邦は如何と言ふに、一八九六年十月ヸクトリア洲に於て同權を附與し、聯邦組織の翌年即ち一九〇二年、聯邦及新南威州又共に同權を附與したり、更らに新世界の自由的鄉土と稱せらるゝ米國を顧みれば、聯邦に於ては之を認め居らざれども、各州に於ては漸次之を附與するの傾向を示せり、即ちアイダホ、コロラド、ユータ、ワイオミングの四州は全然婦人の選擧權を認め、マサチユセッツ、ミシガン以下二十九州に於ては學校問題に關して之を認め、ルヰジアナ州に於ては租稅問題に關して、アイオワ及モンタサ兩州に於ては公債發行に關して、カンサス州に於ては市選擧及公債發行に關してミネソタ州に於ては公立圖書館に關して此權を認めたり、是を以て之を觀る、社會古く傳說的勢力强き邦國を除き、新進にして立法的變動容易なる民主的邦國に於ては漸次に婦人參政權の主張が容れられつゝあるを知る可き也。

否々、傳說的勢力强き英國に於ても婦人參政權は決して夢想にあらず、又狂熱的婦人の運動は、根柢深き同思潮の上に流るゝ波浪の一部のみ、將來兎も角も或程度の實現を見る可きに至ては、即ち昨年シャックルトン氏が議會に提出し、陸軍卿ホルデン氏が贊成演說をなしたる參政權案が百十票の多數を以て下院の第二議會を通過したるに徴するも明かなるにあらず哉、否な英國に於ても、地方政治に關しては一八九四年以來婦人の參政權を許與し、現に約一百萬人の婦人有權者あり、其他佛國に於ても一箇月半前（昨年十二月）代議院委員會は地方政治に關して婦人の參政權を認むる議案を可決し、伊獨諸國に在りても、近來漸次同一の運動盛んならんとするを見る、是豈一時的狂熱運動の類として蔑視し去る可き問題ならん哉、

然らば則ち所謂婦人參政權附與の主張は果して可歟否歟、此問題は世に識者の眞面目なる考慮を要する所と言はざる可からず、而して予は答へて言はんとす、婦人に對する選擧權附與は根柢に於て不可なりとす可き理由無しと。

何を以てか之を言ふ、夫れ參政權の分布は一國の社會的事情に依りて支配せらるゝものたり、從つて婦人に之を附與すると否とは、婦人が一國の社會に於て占むる所の地位如何に依つて決定するの外ある可からず、而して最も注意す可きは其地位由來一定不變にあらず、他の社會的事情に關聯し若くは之に支配せられて常に變化しつゝあること是也、予の見る所を以てすれば現今婦人參政權に反對する論者の缺點は則ち此重要なる事實を觀過したる一事に存せずんばあらず、論者は曰く婦人の活動區域は家庭に在り、家政の如き兒童教育の如き高尚にして優良なる事業也、以て其全力を集注せしむるに足る、此特殊的社會を放棄して男子の領分を侵し、自然的分業を破らんとするの如きは何等の愚ぞやと、又曰く今日の家族制度は飽く迄維持せざる可からず、參政權附與の如きは之を破壞するものにあらずして何ぞと、是洵に麗はしき議論ならん、又或は最も望ましき理想ならん、然かも吾人の面前に出現して吾人の解決を促しつゝあるものは理想にあらさず、希望にあらずして事實たり、現實なるを奈何せん、換言すれば從來の如き武陵桃源時代的家族制度若くは婦人の地位は、吾人が希望すると否とに關らず、又多少人力を以て防止を試みると否とに關らず、着々破壞せられ、着々變革を見つゝあるを奈何せん。

試みに檢せよ、今や婦人が男子に依賴するを必然とする觀念は漸く打破せられ來れり、婦人にして醫師、官吏、教員、會社員其他各種の職業に從事し、家庭生活に變化を生ぜる實例數々として枚擧に遑あらず、否な彼等の間には獨立的、獨身的生涯を送るものも少からず、又婦人の財產權確立して納稅義務も擴張し、其教育制發達して、先天的優劣問題以外に男女間に於ける懸隔の存在微細となりつゝあり、如何にして玆に至

りたる乎、他なし、婦人の社會的地位は一日も變化の勢を休めざる社會一大過程の中に其地位を有し、從つて複雜なる他の現象と密接の關係を持し、多くの點に於て之に變化を餘儀なくせられて變轉しつゝあるに依る而已、此點は玆に詳說するの遑なし、唯最近產業的革命及進步を始めとし經濟的外圍（エムバイロンメント）大に變化し、教育的外圍も變化し、思想的潮流、國家制度發展の傾向等、各昔年と異れる現象を示せるを見且つ其如何に婦人問題に影響せるかを見れば明瞭ならん、而して步一步、單純より複雜に進み、文化に進む現在社會的發展を阻止し、之を武陵桃源の昔に還すの望み難きこと、今日誰か之を疑はん、然らば即ち社會的發展の一部を構成し、周圍に擁せられて共に進みつゝある婦人問題のみ何んぞ獨り之が復古を謀り得可き理由あらん哉。

已に婦人の社會的地位の變動を許さば、其變動狀態如何に依りて、彼等に自衛的必要上、參政權を主張する論據を與へ、又教育的發達の結果は知識上彼等に參政の資格を與ふ可く、國家は彼等が相當の主張と資格とを兼備する以上、公平の主義に依りて同權を附與するの外無きものと言はざるを得ず、是予が先きに『根柢に於て不可ならず』と宣明したる所以也。然かも是唯根柢として言ふのみ、知らず果して今日に於て同權論者の言の如く完全なる參政權を附與す可きか、是蓋し全く別箇の問題たらずんばあらず。

予先きに曰く參政權附與如何は一國の社會に於ける婦人の地位に依つて決定す可しと、こは參政權附與が根底に於て不可なきを說明する所以たるのみならず、又其附與の程度如何をも指定する所以たり、質率に言へば、今日の文明諸國は大體に於て參政權附與の時機に逢着せり、唯其程度が疑問たるのみ、たとへば婦人にして獨立財產を有し、納稅者たりとせよ、或は特別の職業に從事し、之に對する法律的保護を要すとせよ、其選擧權を求むるは至當のこと也、否々一家の母としても兒童教育問題の如きに關しては最も注意を拂へるものとして、主張するの權利を保たせざる可からず、然かも他方に於ては、國事に參與するものは又參與す

る丈けの知識的資格無かる可からず、爲政家は各自之等の點に關する國内婦人の現態に徹し之を國制に照して、解決するの外無き而已。唯注意す可きは、國家の法律、政治的制度は宗教と同じく社會構造と秩序との根柢たり、從つて他の現象より一層保守的たる可きこと是也、換言すれば之等は他の發達に隨つて徐々に發達す可きものにして、萬一他に先つて發達せんと企てんか、社會は依つて以て立つ所のものを失ひ、破壞し混亂するの外なかる可き也。

試みに一二の實例を見んか、方今婦人に參政權を附與して成功せるものは先づ新西蘭となす、同州や單純の問題多くして、複雜の問題少し、第一外交問題の如き、軍事問題の如きは、英國政府之に處す、加ふるに住民、人種、傳說、思想を同うす、從つて今日の婦人の知識を以てして完全なる投票權を與へられながら參政上弊風を生ぜざるもの也、濠州に至ては婦人參政權附與、新西蘭程成功し居らず、是同州が新西蘭同樣英國の屬地たり、從つて國際的大問題等は自ら處せざる組織たるに係らず、內部の人種、傳說等新西蘭の如く單純なる關係にあらず、從つて問題又複雜の度を增加せるに依るが如し、轉じて米國各州の例を見んか、成功の聲を聞くは、敎育問題若くは地方行政に關し成功を認めたるものに止まれり、即ちルヰジアナ、アイオワ、カンサス以下の諸州にして全然婦人選擧權を認めたるコロラド以下四州は則ち之に與らず（無論婦人參政權論者は我田引水の結論をなし居れども）、若しそれ那威に至つては憲政修正こそ三年半前に行はれたれ、婦人參政權が完全に行はれ始めたるは一年餘以前と記す、故に茲には評せざる可し、要するに現在の實例に照せば、議院政治を執れる邦國に於て、充分に同權を附與して成功せるもの少く、之あるものは政治組織及社會事情に特殊なるものあるに依れり、此特殊なるもの以外の失敗は、則ち社會の構造及秩序の根柢たる政治的制度が、他の現象に先つて進まんとし、爲めに失敗を見たるものと言はざる可からず、吾人をして此點に鑑み、目下英國婦人の現態を見て、結論を下さしめば、

則ち下の如く曰はん、婦人に許すに普通選擧權若くは略々之と同樣のものを以てするは尙早し、寧ろ先きに地方政務院が試みたる婦人の地方政治干與を一層完全にし、擴張するを可なりとせん、議會選擧權附與の如きは、更に婦人の社會的知識的發達が一層大なるに至るの時期を待つ可き而已と。

以上は最近海外に於ける同問題に關して簡短に所思の一端を吐露せるものなるが、終りに臨んで喚起せられざるを得ざるは、日本に於ける婦人參政權附與問題是也、思ふに日本婦人の現態は着々歐米同樣の趨勢に向ふを示せり、其獨立職業、財產、敎育其他社會的境遇等悉く然り、然れども其程度は遙かに後れたり、是今日に於て之等の主張を見ざる所以ならん、又我が國の地方政治の如き、官吏は多く選擧に依らずして任命に依れり、而して外國の婦人參政權附與が多く地方政治より始まるに照せば、婦人參政權問題が我國に勃起するの期は必らずや遠からん、但し我婦人社會も日と共に變移し、斷じて武陵桃源を夢みるを許さず、結局同權を附與せざるを得ざるの時來る可し、從つて經世家は今日より豫じめ思ひを此問題に致し、歐米其他に於ける其進行に注意し徐ろに講究するの要ある可き也。若しそれ彼の同問題を以て一笑に附し去らんとする頑冥なる婦人壓制論者の態度の如きは、斷じて邦家の將來に忠實なる所以にあらざる也。

東京の經濟的價値

毎月坊

茲に東京の經濟的價値と題するのは、東京市其物の經濟力を指していふのではない。日本帝國の首都としての東京が、全國の經濟組織に於て、果して如何なる地位に立ち、又幾何の價値を有するかといふ事を論ぜ

んとするのである。

政治上の中心たる東京に、朝野の有名なる政治家が集まつて居るのは勿論であるが、世の中の人は、之と同時に天下の有力なる實業家も亦皆東京に集つて居るものゝ如くに思つて居る。試みに世人に向て實業家のエライ人十人を選めといふて投票を募集して御覽なさい。十人が十人共恐らくは東京の實業家のみが選ばるゝであらうと思ふ。三十人か四十人を選めといふなら或は東京以外の實業家も入つて來るかも知れないが、十人丈けなら必らず東京からばかり選ばるゝに相違ない。若し此點から見れば、全國の政治を左右すると同じく、東京は又全國の實業をも左右するといふ事になるだらう。

維新以來十數年前迄は、或は今日迄は、さうであつたらう。然しながら今後は果して日本の有力なる實業家をば、東京のみから求むることが出來やうか。試みに金融界を以て之を見るに、東京の銀行預金及び貸出金は、之を大阪に比すれば十と六との割に當る。又東京の人口を二百萬にして大阪のそれを百二十萬とすれば、人口の割合も亦預金貸出と同じく十と六となつて居る。即ち一見すれば東京の經濟力は人口の割合上大阪と相軒輊する所なきやうである。然しながら東京の金融力の主もなる要素をなして居る所の帝室財產。年額六億圓を吐呑する國庫金。及び三百年間の蓄積に成れる華族の財產を除く時は、東京市民の經濟力は平均大阪の市民の經濟力の殆んど半ばに過ぎなからうと思ふ。之を要するに東京の經濟力は政治的社會的に得るものであつて、大阪の經濟力の純然たる商工業に得たるものとは著しく其性質を異にして居る。

更らに又東京の所謂實業家なるものを見れば、其資本に於ては數千萬の多きを擁し、其事業に於ては内外に重きをなして居るものが澤山ある。さりながら、政府の特別の保護に據るか、若くは國庫の補助を受けずして大をなしたるものは幾何あるか。別言すれば東京の實業家の多くは、如何なる政府たるを問はず、時の政府當局者の一顰一笑によつて事業の盛衰を來すが如

き惱れむべき地位に立つて居るのである。

東京の經濟力は維新前と同じく今尙堀止を中心として日本橋の問屋にある。然しながら東京の問屋なるものは關西の問屋と同一の領分を有して居るだらうか。關西の問屋は名古屋以西日本の最も富んだ中國九州の得意を有するのみならず、臺灣朝鮮の新領土は勿論、四億の人口を有する支那をば得意先とするに反して、東京の問屋は關八州、東北、北海道に過ぎない。それ故に寧ろ東京市内に住居して居る二百萬の市民に向て物品を販賣する所の小賣商人を相手とするのを問屋業の主もなる仕事として居る。

近年迄は日本の外國貿易は、横濱を以て主もなる輸出港とし、神戸を以て主もなる輸入港としてゐた。生絲羽二重を初めとして金貨を日本に吸收するものは横濱港であつて、棉花を初めとし金貨を海外に放出するものは神戸港であつた。我國の老財政家の痛く兌換制度の前途に杞憂を抱くものは、横濱を無二の忠臣の如く推賞し、神戸を恰かも惡魔の如く咒咀して居つたが、支那の購買力の增進と共に金貨を吸收する所の輸出貿易も亦漸次横濱を去つて神戸に移つた。若し此勢を以て前途をトすれば、今日まで占めて居つた東京の經濟的勢力は永く維持せらるゝや否や頗る疑問といはねばならぬ。

政治家及び政黨の連中が、近頃積極的經濟政策なる語を用ふるのを往々見受ける。然しながら歐米でいふ積極的經濟政策といふ文字と、日本の政治家のいふ積極的經濟政策といふ言葉とは大變其意味を異にする。日本の政治家のいふ積極的經濟政策といふは、例へば國有鐵道の敷設とか、國費を以てする港灣の改良とかいふ如き、國民の膏血を絞り上げた國費を經濟方面に支出する意味を含んで居る。然しながら眞正の積極的經濟政策といふものは、成るべく租稅の負擔を輕くし、政府の事業の範圍を收縮して國民の資本を豐かにし、國民自身が政治上の力を藉らずして事業を振興するの意味でなければならぬ。東京の實業家の從事して居る主もなる仕事は前に述べた如く、僅々たる東京市民を

得意の主もなるものとする問屋業を除けば、多くは政府の保護に浴して居るか、若くは政府を得意として物品を製造若くは販賣して居る種類に屬するものが多いからして、東京の實業家も亦政治家と同樣に積極的經濟政策なるものを誤解して、政府が積極的に事業を經營するの意味に解するものが多いのみならず、政府が積極的に事業を經營するを以て、自家の營業に最も利益あるものとして居る。然しながら政府の事業は自ら限度がある。而して世界を相手として、就中支那を初め東洋諸國を相手とする民間の純粹事業は日に月に增して行つて殆んど底止する所を知らない。それ故に今にして東京の所謂實業家なるものは、重きを政治方面に置かずして、純然たる民間の事業に其全力を盡すの覺悟がなければ、東京は單純なる政治的首府たるに止つて、經濟的勢力は殆んど全滅するの日に達するだらうと思ふ。

政治舞臺

福本日南

年々歳々花相似、歳々年々人不同といふのは人生の常態である。が我國の政治は歳々年々人も亦相同じである。明治の初年に　天皇は天地に誓つて五條の誓文をお發しになつた。其一箇條に「人心をして倦まざらしむ」と仰せられた。政治の要は此一語に盡きて居るてあらうと深く尊信したが、昨今の狀態で考へれば「人心をして倦ましむ」といふのが今の在朝在野の政治家の第一要義とする處らしい。昨今議會開會の期に際して此政治が如何に活動せるかと顧れば、顧る刻下に吾人をして憮然たらしむる。箇樣な狀態で繼續して行つ

たなら國家の將來は如何になるだらうかと思はしむるのである。桂總理の議會に於ける演說を拜聽すれば陶々平として堯舜の御代に居るの思がある。「締盟列國との交誼益々親善を加へ特に日英同盟の基礎は年を逐うて益々鞏固なるを致し又昨年露國と更に協商を重ねて從來の協約の基礎を一層確實にするを得たり其他各國との協約等孰れも漸次其効果を收め爲めに東洋の平和を增進し帝國の安全を保障するに於て何等遺憾なきを得るは實に國家の幸福なりと云はざる可からず」とある。宛然たる帝王の口吻である。果して此通りならば昨今の所謂何と間のいゝ事でせう。さりながら過去一年間から今日に亘つて日英同盟は左樣親善を加へたかどうだか。關稅問題の失策から昨年中には同盟の基礎其物からが少々疑問になつた事があるではないか。倫敦の商業會議所は恰も巴里の會議所が土耳古の公債に對すると一般、我滿鐵社債に對して御免を蒙るといふ決議をなさんとしたてはないか。其瀨戶際まで至つて暫らく之を見合はせたのは、政府政策の宜しきを得たからであると當局はいはれやうが、其實は關稅問題に對して讓步も讓步、大讓步をなされたから、ヤットの事で喰ひ止めたのである。然し國內に向ては何時も條約の基礎は互惠の上にありといはるゝ。相手に七分の利益を占めさせて自家は何時でも三分の利益に滿足すれば、如何にも互惠でありませう。古人にも此等の風をなしたものがある。我々は當局の所謂相互條約を見る度に古人の一警句を思ひ出す。それは漢人と胡人との旅行談である。確か遊仙窟に箇樣な語があつたと思ふ。漢人と胡人が道連れとなつて旅行をした。相談して一馬を購はうといふ。漢人は此際胡人と約束した。「漢人馬に騎する時は胡人は步行せん。胡人步行する時は漢人は馬に騎せん」箇樣な契約をしてさうして旅行をした。此契約を御覽なさい。宛たる昨今の互惠條約の體裁である。さりながら事實は何となつて居るか。金は同じく釀出したのである。而して馬に騎るは何時も漢人にして膝栗毛に鞭つものは胡人である。此位馬鹿〱しい事はないてはないか。我當局の所謂互惠條

約は概ね此類である。箇樣な條約に滿足すれば對手の國々は何れも喜ぶであらう。斯くの如くにして平和を維持すれば平和は即ち平和であらう。さりながら其間に於て大馬鹿を見るものは何れの國か。日本帝國こそいゝ面の皮である。獨り之は日英間の事のみではない。乃ち對米、乃ち對淸、皆同一の筆法で國交が繼續されて居る。米國について之をいへば、彼は亂暴にも日本人を排斥する。勞働者の働くに最も都合よき新大陸から年々之を驅逐する。堂々たる帝國の政府は之に對して如何なる交涉をなしたかといへば、秘密契約―國人に對しての秘密契約を締結して米人に一層排斥の氣焔を高めさしたではないか。「仰せに從つて我國勞働者の渡航を禁じませう。而して現在米國にある勞働者の數を、段々に減じ、本邦に在住する米人の數と相當るまで減じませう」といふ秘密契約をなしたではないか。又淸國に對しては滿洲に於て讓步し、支那本部の地方に於て讓步し、他の英米獨佛の四國が聯合して投ずる資本の一部をすら我國は分擔し得ないではないか。一例を擧げても此通りである。斯くの如くして英國なり米國なり淸國なりから自家の權利及び利益を抛却する。而して東洋の平和を增進し帝國の安全を保障するといふか。如何にも一時の平和は之によつて保たれやう、一時の安全は之によつて保障されやうが、其下には國家の將來を奈何せんといふ問題が直ちにブラ下つて來るではないか。

　而して當局の政見は遂に此帝國をして一等國の地位から墜落するのを自期するのであるか。一方には斯くの如き退讓をなし、他の一方には結局一等國の地位を失ふを甘んずるの政策を取りつゝある。それは海軍に對する政策によつても知ることが出來る。桂總理の演說によれば「國防の充實を期するは東洋の平和と帝國の安全を維持するに於て已むべからざる事に屬す。之を以て政府は財政の許す範圍に於て之が補充の計畫を立てたり」と明言して居る。言や甚だ立派である。さりながら其計畫が計畫である。如何なる計畫かといへば本年度以降六ヶ年間に亙り總額約八千二百萬圓を追

加せんといふのは當局の所謂大計畫である。此僅々たる八千二百萬圓を以て太平洋上に於ける海軍の優勝權を維持すべしといふか。全體太平洋に於ける海軍の優勝權を維持すると維持せざるとは帝國將來の命脈問題てはないか。已に之が命脈問題てある以上は他の事業を差措いても一きばりきばらざるを得ないのてある。といふのは國の獨立を捍衞する、即ち一國のデチニチーを維持するかせざるかの界てある。勿論其富米國の如き大國と一切の製艦事業を競爭するのは不可能かも知れん。又不必要てもあらう。さりながらそこまて至らずとも今少し奮發すれば太平洋上に顧眄して自ら雄なる丈けの事は出來るのてある。ボロ船六十萬噸を連ねてそれて帝國の國防は能事擧れりといはんと欲するのてあるか。御覧なさい、數年前土耳古と希臘とがクリート問題によつて衝突をした場合、土耳古の艦隊は三十萬噸を算し、希臘のそれは七萬噸に過ぎなかつた。然しながら土耳古の海軍は狸の船の土船てあつた爲めに、三十萬噸の海軍はダルダネルに蟄伏して希臘の七萬噸に對して手も足も出なかつたてはないか。前車の覆るは後車の戒なりといふ格言に過がないなら、現在の六十萬噸は賴みとするに足らぬ。然る以上は今日に於て少くも十年計畫位の下に、戰鬪の第一線に立つべき有力の一艦隊を組織する丈けの準備は、それこそ東洋の平和を維持する上に已むへからざるてはないか。而して政府の計畫は三四尺の小切れに過ぎぬ。帶には短し襷には長し。箇樣な姑息な計畫を以て平和の維持呼ばはりなんどはチャンチャラ可笑しいといはねばならぬ。

扨之に對する寄手の有樣はどうてあるかといへば、之も亦呆れ返つた狀態てある。寄手の優勢なるものはいふまでもなく議會に最大多數を有する政友會てはないか。政友會が此陣頭に臨んて如何なる軍容を整へたか。對議會の宣言を拜見すれば佛家の所謂不就不離の狀態てある。お味方をするともいはず、反對に立つとも見えず。誠に漫然たる態度てある。蓋し同會は之によつて一面は政府を洞喝し、一面は當路の歡心を得や

うとするのてあらう。が戰場の古猛者たる狸サ加減の度合に於ては西園寺侯と桂侯と孰れか老巧てあらう。彼の宣言を讀んてあれて桂侯が洞喝されたと思惟せらるゝてあらうか。少々覺束ない。すれば未だ戰はざるに寄手の內兜は其ドン底まて見透されたに相違ない。而して議會の戰場に出てて戰ふ所のものは餘り名も知れぬ何某の質問演説位に止る。桂侯が政府委員席上に坐して些の痛痒をも感ぜず、空嘯いて微笑するのを見れば、攻鬪軍與し易きのみといふ觀念は微笑の下に歷々と讀むことが出來る。斯くして畢竟此局は妥協か。妥協々々!!。、昨年も妥協。今年も妥協。それて此議會はまアお終ひてあらう。

(完)

従來本誌には財政經濟に關する論説極めて少かりしが、本號よりは毎月坊氏毎月一篇づつ財政經濟の論文を寄せらるゝことゝなれり。此約の成れるは本號締切の間際なりし爲め、本號には極めて間に合せのものを載せたれども次號よりは大いに實のあるものを寄せらるゝ筈也。(編者しるす)



クリスマス

倫敦　繞石生

○クリスマス、カロル

十二月二十二日の夜九時頃、夕食を濟まして家の人達と表の食堂で世間話して居ると、突然玄關のドアの邊で歌の聲がきこえた。

「何處て歌つてるんてす？　ありや何てす？」

と訊ねると、G孃が

『宅のドアの處てせう。クリスマス、カロルてす』

といふ。ヂケンスの『クリスマス、カロル』以來御馴染の言葉だが、實地に耳に聞くのは今日の今が初めてだ。

食堂をホオルへ出て見ると、厚い色硝子の嵌めてあるドアに、ペーヴメントの街燈から射る光を遮つて、小さい頭の影が四つ見えて居る。

子供らしい可愛いゝ聲だ。朗らかな聲ぢや無い。おつかさんの前で讀本の下讀でもしてるやうな、小さい可愛いゝ聲だ。抑揚の餘りに無い歌だ。

僕はドアに身を寄せて耳をすます。

ハー、ザ、ヘーラー、エンゼル、シン
グローリー、ツ、ザ、ニユーボーン、キン

と判然分る。

Hark! the herald angels sing
Glory to the new-born king;
Peace on earth, and mercy mild,
God and sinners reconciled!
Joyful, all ye nations, rise,
Join the triumph of the skies;
Universal nature say,
Christ the Lord is born to-day.

と他の三つのスタンザから成つてる、一番普通なカロルを歌つてるのだ。いくらか貰ふまでは去らぬと見えて、それがすむと、

ワイル、セーバー、ヲッチ、ザアイア、フロック
ス、バイ、ナイ

と更に歌ひ初めた。ワイルからセー、バーと順に聲を上げて、ヲッチを下げ、ザアイアを又下げ、フロックス、バイ、ナイと一音づゝ上げて行く。極めて平易なチユーンだ。少し習つたら僕にも歌へさうだ。

オール、シーテッ、オン、ザ、グラウン

ナイよりも一音下げて(?)オールとやる。一音あげてシー、二音下げてテッド、二音揚げてオン。それからザ、グラウンドと順次尻を揚げる。文句程は僕も見たよのある歌だ。

While shepherds watch'd their flocks by night,
All seated on the ground,
The angel of Lord came down,
And glory shone around.

を第一のスタンザにした六スタンザの歌だ。
餘り長く歌はせるのは氣の毒だ。一文づゝやらうと、そつとドアを開けると、僕の顔を見上げた儘、矢張り歌ひ續けて居る。右の端のが七つ位の女の子、その次が六つ位の女の子、その次は八つ九つの女の子、一番左が十一二の男の子だ。
ヅボンのポケットから銅貨を出して、銘々に一片づゝやると、小さな手をして『サンキユ、サー』と言つて歌をやめた。
『上手に歌ふね』
と言つたら、女の子だけは嬉しさうに、につこり笑つた。
『だれに敎はつたの?』
と訊くと、
『テイチヤ、サー』
と、かすかな聲て、一番小さな女の子が答へた。そして靴音もさせずに玄關の石段を下りて行つた。霧雨が降つてゝ、外は暗かつた。

食堂へ歸るとG孃が
『どうてした』
といふ。僕は一時間位ゆつくり聽きたい、と言つて居ると、隣の玄關へ行つたと見えて、又も
ハー、ザ、ヘーラー、エンゼル、シン
グローリー、ツ、ザ、ニユーボーン、キン
と歌つて居る聲が夢のやうにきこえた。

〇クリスマス、カアド

十二月の初めから、文房具店はクリスマス、カードを賣り出す。廉いのは半片からある。高いのは六片のも一志のもある。中に刷り出してある文句は、
With all Good Wishes for a Merry Xmas and a Bright New Year.
だの
With Best Wishes for a Merry Christmas and a Bright and Prosperous New Year.
だの

All Christmas Joys and Happiness be Yours.

だの

With all Kind Thoughts and Best Wishes for
Christmas.

だのいふ、簡單なのもあれば、テニスンやシエークスピアの長たらしい詩句を冒頭にしたのもある。それが多くは金文字だから美しい。

カードの形と表の繪とは固より千態萬狀だ。日本の繪葉會などは比べ物にならぬ。

今年のクリスマスは日曜日とかち合つたので、前日中に着くやうにいづれも發送する。僕は餘り人とは交際せぬ方だが、それでも二十二日頃から郵便の配達毎に三枚や五枚は屹度來た。

クローヂヤー博士からのは、表はホリイの花環に金の蹄鐵、花環の中は池を隔てゝ雪の森の繪だ。內側はクリスマスの祝儀の文句の他に

The years go speeding past,
And changes come with years—
But Friendship aye will last,
Time but endears.

といふバーンサイドの詩の句が刷つてある。

オスマン、エドワーヅ氏からのは、忘れな草を緣にして、雪に埋れた教會が表の繪て、內側は祝儀の文句の上に

Take this tribute, may it wake Memories sweet
for auld time's sake.

といふシールの文句が、小さく金文字で刷つてある。

ネリイ孃からのは、表は四つ葉の酸漿が金て大きく浮かしてある。內側には

I count myself in nothing else so happy as in a
soul remembering my good friends.

といふ沙翁の句が古代文字て色美しく刷られて居る。

賀　正

だの

謹賀新年

だの書くほかには、
　　なほ平素の疎情を謝し
　　　併せて倍舊の交情を祈る
なんてなと位、それも何の趣向も無く、平の葉書に印刷されたのを見馴れて居る僕には、送つて來たクリスマス、カードがどれもこれも珍らしく又趣味あるもののやうに感じられた。

○クリスマス、プレゼント

親しい間柄、親類縁者の間では、互にクリスマスの贈物をする。貰ふ方で重寶なやうなものをと趣向を凝らす。

僕の今居る家庭には三人娘がある。J孃、G孃、O孃と。小包が届くと、

「私へのは無い？」

「あたしへは三包よ」

なんて、三人とも頗るエキサイトする。手にとるなり、直ぐ紐を切つて、包紙を開く。

「オー、ヂア、——ハンカチッフス、アゲン」

「イズント、ヂス、ナイス」

「ビユーチフル、——ラヴリイ」

「ルック——ヱリイ、プリッチイ、イズントイット」

と、三人が我れ勝に僕に見せる。餘り上等の品でなくとも

「イエス、ヱリイ、プリッチイ」

「アイヴ、ネヷ、シン、サッチ、ア、ビユーチフル、ワン」

など、、心にも無く賞めてやらなきや御機嫌が惡るいらしい。

娘へは書物は餘り來なかつた。然し本屋の前へ立つて見ると、進物用の美裝のが、夥しく飾つてある。ワリス、ミルスの水彩畫插繪の模寫が十枚入つてる、半牛皮、リネン表紙、金縁、十巻本のゼーン、オースチン集の奇麗なのが眼につく。いくらかと見ると、七十志即ち三十五圓。

半ヱラム、リネン表紙、金縁て、脊皮に草花模様の清楚な七卷本のジョージ、エリオット小說集てある。價はと見ると八十志、即ち四十圓。

三十八卷のラスキンのライブラリイ、エヂションがある。サリストン、クロース製のが三十九磅十八志、即ち三百九十九圓、半モロッコのが五十九磅十七志、即ち五百九十八圓五十錢と札がついて居る。

尤も廉い物もある。オーマー、カイヤムのルベヤットなどは、ゼームスの色繪の入つてるのは二十二志六片だが、半ヱラム、リネン表紙、金縁て七志もある。廉いといつても僕等貧書生には斯んな美裝のは到底買へはせぬ。

僕には二十四日に小包が四つ來た。一つはゴランツ教授からので、先生自ら監修出版せられて居るキングス、クラシックス中の、フイッツゼラルドのポロニアス。今一つは、ロース孃からのだ、黑皮表紙の沙翁ソンネット集。前述のゴランツ先生の緖言と語解(グロッサリイ)が添はつてる本だ。今一つは、エルザベス、ビズランド夫人からので、自著の Japanese Letters of Lafcadio Hearn 今一つはキャノン孃からので、メーターリンクのキズダム、アンド、デスチニイてあつた。

○クリスマス、デコレイション

九時半、ゴンゴン〳〵といふ銅鑼の音を聞いて、二階の僕の部屋を出て、階段を下りる。

昨夜のクリスマス、イヴには、別に何の催うしも家(うち)ては無かつたが、娘三人それに息子と老父とが、十一時過ぎまて、下(した)てガタ〳〵コト〳〵言はして居たから、屹度クリスマスの御飾りをするのだらうと思ひながら床(とこ)へ僕は入つた。果して御飾が出來て居る。

僕の今居る家は、玄關のドアを開けてはいると、幅一間(けん)半許り、奧行三間(けん)許りのホールがある。此のホールの中程(なかほど)から右側の壁に接して、絨氈の敷いてある階段がある。左側に腰丈け位の手摺(てすり)が附いて居る。階段は十段上ると、向ひの壁に突き當る。そして左に折れて八段て二階に達する。此の手摺がイング

リシユ、ロオレルの小枝て卷き包まれて居る。

ホールの左側の壁にはキスラーの鉛筆畫が二枚額になつて掛つて居る。額縁が、見ると、蔦て卷かれて居る。

此の左側の壁に食堂へはいる扉があるのだが、この扉の四周もロオレルを繞ぐらしてある。

階段の、左に折れた手摺から、徑二尺許りの心臓形の物が吊るしてある。緋羅紗を貼りつけて、其上へ綿で

CHRISTMAS GREETING

の文字を表はしてある。縁も綿て出來て居る。ホールは薄暗いから、文字は判然目にうつる。

階段の左に折れる處て、手摺から食堂の扉の上部へ、糸につるした金文字がキラ〳〵して居る。厚紙へ金紙を貼つて、それをきりてぬいて文字にしたのだ。手間のかゝつたものだらう。文字の上の方へ糸を通して、瓔珞のやうにしたのだ。弓形に曲て居る。文字は

GLORIA IN EXCERSIS DEO

と讀まれる。

クリスマスにはホリイを使ふ筈だがと思つて見たが、ホリイを使つて無い。ホリイといふ木は、南天の實のやうな赤い實の生る柊だ。

ホールの中央に、天井から瓦斯燈が吊るしてある。これにはミズルトーが一枝結び下げてある。ミズルトーといふのは、或る種の木に出來る寄生木で、二叉〳〵にと枝が分れて居る、末端には楓の實に似た物がついて居る。さう、掛時計の捩に似た形のものだ。そしてその末の小枝の二叉になつた處に、水色の珠數玉のやうな實が生つて居る。此のミズルトーの下てなら女は男を、男は女を、クリスマスの日に限つて接吻勝手といふ話は豫て聞いて居たが、今はそんな習慣は廢れたといふとだ。接吻された男は皮の手袋を女に、女はタイを男に、買つてやらなきやならぬものだ、など何かて讀んだとがあるが、そんな馬鹿な眞似は今はせぬといふ。

一わたり此の飾を見て僕は食堂へはいる。

娘は三人とも早や食卓に就いて居る。息子はまだ寢

て居るらしい。互に『メリイ、クリスマス』を言ひ交はす。何んとなく、いつもより陽氣だ。

見るとファイア、プレイスには盛に火が燃えて居る。マントルピースには諸方からのクリスマス、カードが奇麗に並べ飾つてある。

食卓はいつも通りて、別に飾りが無い。花瓶にはジヨンクイルを心にして同じ樣なナーシッサスがその周圍に八九本挿してあるきりだ。

『御飾りが立派に出來ましたね』

と言ふと、

『今年や、ホリイが稀れて、買へませんてした』

と、尋ねもせぬのにJ孃が辯解した。

○クリスマス、デンナア

小說「夜行く船 Ships that pass in the Night」て文名一時に揚つた閨秀作家ハラデン女史 Beatirce Harraden から十七日によこされた手紙のうちに

Will you give me the pleasure of dining with me and my sister on Sunday, Christmas Day, at two o'clock?

とあつた。僕は有難く之を承諾して置いた。

そこてクリスマス當日の午後二時十五分には僕は女史の食堂の人となつて居た。通路が見下ろされる窓を背に僕が坐る。爐を背に僕の右に、女史の妹のガアトルウド孃。孃の向側、僕の左にハラデン女史がサイド、ボードを背に坐られる。僕の向側には、御客のS孃。雪白のテーブル、クロースの中央にはナルシッサスの花瓶。花瓶の四方にクラッカースが程能く積んてある。銀のナイフ、フォーク、スプンが各自の前に光つて居る。

小間使がスープを持つて出る。女史は和蘭燒の茶碗へ大きなスプンて汲んで皿へその茶碗を藏して配られる。何といふスープか僕は分らなかつた。スプンを取り上げて、みんな謹ましやかに吸ふ。

女史はやがて背後の呼鈴を推される。

小間使——コートも袴も黒い上へ、眞白のエプロン

を掛けて、眞白のキャップを着けた小間使がスープ皿を下げに來る。そして七面鳥のヂッシュを捧げて來た。

女史は肉切りナイフを使ひつけぬからとて、妹の君に切り方を託される。

妹のガアトルウド君、やをらナイフを取つて七面鳥の胸の邊から巧みに肉を切取つて皿へ盛られる。そして姉君へ渡される。姉君はサイドボードから馬鈴薯やスプラウツをそれへ添えて、先づ第一に僕に呉れられる。僕はソースを自分で添へる。

四人の皿が渡つてから、女史は手づからスプアクリング、バルガンヂイの口を抜いて、四人の盃へなみなみと注がれる。お互に樂しきクリスマスを祝ひませう、との挨拶があつて、各自同時に盃を擧げて、メリイクリスマスを飲んだ。

『日本ては一月の一日を祝ふといふとてすが、
どんな飾りをして、どんな御馳走をたべるのてす?』

との質問を受ける。ヘルン先生はそのアンフアミリアル、ジヤパンに旨く書いて居られるが、僕の口ては容易に説明が出來かねる。

此の皿が濟むと所謂クリスマス、プデンが出る。皿へブランデイをそゝいて、それへ火をつけて、ポツポと青い火の燃えてるのを持つて來る。プデンの中央にホリイが一枝つき挿してあつた。

次には、これもクリスマスには附物のミンスパイが出た。松の樹の皮のやうな、カサ〳〵の旨く無いものだが、食はなきやならぬとになつてるから、據なく二つ頂戴する。その代り、すゝめらるるまゝ、ブルガンヂイは更にブリムフルに注いて貰つた。

御馳走はこれ限りだ。それからクラツカースを一本づゝ呉れられる。四人が四人とも、右手に一本もつて兩手を胸の前て左右へ十文字にする。そして左手て、右側の人が差し出してるクラツカーの一端を握るのだ。すると、みんなが左右兩手にクラツカーの一端を握つてるとになる。そして一、二、三て強く互に引張り合ふと、クラツカーは眞ん中から破れて、ポンと大き

な音て破裂する。二三度やつて見た。

クラッカーはボンボンともいふ。極薄い馬糞紙を一二枚、帯心程の丸さ長さに卷いて、色紙に包んで、兩端が捩ぢてある。引張りちぎると、ボンと音を出す仕掛が中にしてあるのだ。そして何か景物が入れてある。

女史は有名なサフラゼットだ。だから景物がサフレージに因んだもの許りだつたのは面白かつた。監獄服に着いてる三つ矢、その三つ矢を、女子社會政治同盟の旗印たる紫白緑に染めたのが附いてるブローチも出た。薬を此の三色に染め分けた三つ葉カタバミの附いたブローチも出た。ブラウニングの詩句の

One fight more, the last and the best.

の印刷してある紙片も出た。

セレイの詩句の

I always go on till I am stopped, and I never am stopped.

が書いてある紙片も出た。

沙翁の「キンタース、テール」中の

Sweet lady,
No court in Europe is too good for thee, what dost thou, then, in prison?

が刷つてある紙片も出た。

女が監獄てかぶらされる、三つ矢についた帽子の色紙製のも出、巡査の帽子の色紙製のも出た。

「みんな之をかぶつて話さうてはありませんか」

とのことて、女三人は女囚徒の帽、僕は――フロックコートの僕は巡査の帽を冠つて、御茶の時刻まて話しつゞけて居た。

○クリスマス、ボックス

クリスマス翌日をボクシング、デイと稱する。一年に四度しか無いバンク、ホリデイスの一日てある。今年はクリスマスが日曜とかち合つたので、例年よりも一日休暇日が減つた譯なので、勅令てボクシング、デイの翌日、即ち二十七日(火曜)をバンク、ホリデイにすることになつた。て今年は三日休暇が續くことになつた。

ボクシング、デイには下男下女、郵便配達、牛乳配達などが、所謂ボックスを貰ひに來る。推しかけて來るのだから面白い。

僕の家庭には十八九の、丈の高い、一寸は見られる顏の、ベシイといふ下女が居る。今一人、舊居た下女

て、今ぢやミシスになつてる二十四五の女が、朝早く來て、部屋の掃除や臺所の用事を手傳つて正午に歸つて行く。アリスといふ女だ。此の二人には、クリスマスの三日前にボックスをやつた。日本雜貨店で求めた、唐縮緬の衣物着た小さな日本の人形と、三枚續きの錦繪と、それに六志(シリング)を封筒に入れて遣つた。「マッチ、オブライジト、サア」てにこ〳〵して居つた。

クリスマスの前日、一寸用事があつて、友人M君を訪ねた。

『内(うち)に居ますか』

と、ドアを明けたメリイといふ下女にきくと、

『イエス、サー。ヰル、ユウ、カム、アプステアス?』

といふから、外套着た儘二階へ上らうとして、

『さうだ、よく來て世話になるから、少しややらなきやなるまい』

と、かう思つて階段中途て、地下室の臺處へ行かうとして居たその下女に

『アイ、セイ』

と言つたら、こつちから何もやらうと言はぬのに、下(しも)から手を出して、僕がカクシから金を出すのを待つて居つた。

二十六日には郵便屋が來た。二十六日は休日だが、午前に一度郵便物を配達する。この配達してあるくのにはやらんでもいゝ、今に別に集めに來るのが來るから、と聞いたので、食堂て新聞を讀んでたら、正午前に郵便屋が一人玄關へ來た。

『クリスマス、ボックス、ブリース』

と請求する。家(うち)の者一同からも一包み遣つた。僕へは、日本からの郵便日(月木土の三日)毎(ごと)に何かしら郵便が來るし、殆んど毎日彼等の手を煩はさぬことは無い程だから、三志包んで渡してやつた。

『サンキユ、サア』

て歸つて行つた。聞けば配達管區を一軒〳〵あるいて、貰つた包を局へ持ち歸つて、悉皆(しつかい)の金額を、局内の配達夫へ平分するのださうな。

クリスマス前には、雜誌はいづれも美裝した、そして多くは附錄の繪があるクリスマス號を發行する。僕は二十九日にヰンゾル、ピアソン、カッセル、ペルメル、ストランド、ロンドン、など十八種ヶ雜誌屋へ注文し

た。すると翌三十日の朝飯過に、下女のベシイが雜誌の大紙包を僕の部屋へ持つて來た。そして

「文房具店（ステイシヨナー）の小僧がボックスを下さいと言つてます」

といふ。そこでその小僧に一志包んでやつた。

一志や二志遣るのは何んでも無いが、向ふからして、『下さい』と請求するのは何だか僕等には變に思はれる。（四十三年十二月三十一日認）

土耳其湯の記

（アドリアチック號に於て）

林田雲梯生

此船には海水温湯と電氣湯と土耳其湯とがある。午前が婦人て午後が男子て、一風呂が一弗（我二圓）てす。

私は十七日（明治四十一年七月）午後三時半に切符を買ひ、案内に伴はれて參りました。先づ食堂を通過して一階を下り、左折右折して入口に往きますと、一方には運動場がありて、之には木馬球戲杯其の他種々の機械が備へありて、西洋人三四人盛に遊んで居ります。驚いたのは皆褌一貫てす。之を一寸覗きて直に他方の戸を入ると淸楚な廣間（甲）てす。中に臥榻が五六、安樂倚子が六七、鏡臺が七八、之に今湯上りらしき西洋人が「タオル」に纒はれて心地よげに睡りて居るものが三四人。私は此室にて主任の赤髯男に紹介されました。其赤髯の體格はなか／＼立派て、其脊の高さと云ひ、其筋肉の發達の模樣と云ひ、丸るて太刀山を今少し美男にしたのてす。此ハイカラ太刀山の指揮て衣服を脱し（素より褌まて）薄き「タオル」一つて局部を蔽ひ、導かるゝまゝ次室（乙）に入る。驚いたのは此室の溫度てす。私は過日來の米國の暑氣に閉口したが是所

は又一段と烈しい。驗溫器があるからすかし見ると華氏の百二十度です——此の前の淸楚の部屋(甲)は八十度位で衣服を脫しても凉しくはない——此處に約一分間計居ると例の太刀山が入り來りて熱いかと尋ねる。「大いに暑い」と返答すると「是から先が大切だ」と笑ひ乍ら次の室(丙)に案内する。前の室と同じく白色の耐火煉瓦で四方を張りつめて全く外氣の流通は杜塞し、其床は熱くて跣では素より步行が出來ぬから、一種の絨段が足の當る所丈け敷てある。臥榻も木の處は手の觸れ樣がない。コンナ時には扇子を思ひ出すが扇子も團扇も必要はないのです。日本では風と云ふものは必ず凉しいと思ふて居るが非常に暑くなると風の來ぬ方がよい。體內の熱より外氣が暑い時は人間の身體に觸るゝ空氣の方が周圍の空氣より冷いから動くと暑い。恰も熱湯に入つた時と同じである。一分二分は耐忍したが、三分四分となると愈々呼吸が苦しくなるが、例の彼も人也、我も人也、他人が耐忍するに我一人耐忍の出來ぬ筈はないと幾度も思ひ返して我慢したが實に耐へ難い。膏汗がポツリ〱床に落る、否落ると云ふより流れ出るのだ。頭は痛くなる、頭髮も燒けさうになる。全體何分間此處に置くだらう? 一日千秋の思ひと云ふことを聞いて居たが、此處では一分間が十年の思位にあたる。夫も其筈、壁に懸けてある驗溫器を見ると、驚くべし百八十度! 酒精の沸騰點です。人間もこんな高熱に一寸でも居らるゝから不思議です。私は實に驚いた、此時戶を排して入り來る者がある。嬉しや助船と思つて顧みれば例の太刀山が洋盞に一杯の氷水を持て來たのである。人は鯨飲したろうと想像しましようが、私は何故にや其半分外飲めなかつた。そして「今何分」と尋ねたら、太刀山は笑ひ乍ら「左樣お前が生きてる間」と云つて直に去つて仕舞つた。マサカ殺すのではあるまい、疑に土耳其湯は熱い、然し跡がセイ〱すると聞いて居るから、例の「彼も人也」主義で一つ此處で睡つて見樣と思つて直にコクリ〱始めた。其瞬間「オールライト」「カムオン」と云ふ聲が聞へた。跡にて聞けば乙の室(百四十度の處)に一

分間、丙の室（百八十度の處）に九分間置くのだ相な。

私は太刀山に伴られて乙の室に歸ると非常に涼しく感じました。左樣でしよう四十度も違ふのだから、試に九十度の熱い處から一歩にて五十度の處に來て御覽風引くのですが、此室は百四十度あるからなか／＼感冒どころでない。次に又此の乙室を越へて丁室に入ると、玆に大理石の寢臺がある。其上に仰臥せしめ、流汗でドロ／＼になつて居る體を指と手で摩擦する。此垢は東京で六月の十四日に落したばかりだから出るは出るは驚く程である。落しては洗ひ、洗ひては落す。脚から頭の頂上まですつかり垢を落してから、あかすりをかけ最後にサボンを以て洗ひ夫れから能く湯をかけて戊の室へと案內する。其處に適度の湯を雨の如く頭から降らする（機械で）。是は日本杯でやる奴の少し大げさので、巡査の交番所の樣な小室の內でやるのである。それがすむと直に室前の海水浴に連れて行く。是れは長凡五間に幅二間ばかり水の深さが百呎ある。一寸泳げる。それをざぶ／＼やると次に再び前の交番所に入り、微溫湯でスッカリ海水を洗ひ落して仕舞ふと、太刀山がタオルで拭ひて吳れる。夫れから又此方へと往くと最初に衣服を脫した甲室だ。

此處に仰俯になると「アルコール」は如何と云ふ「エース」と云ふと先生小壜に一杯持て來て身體を拭て吳る。次に又爪はと問ふ。賴むと云ふと先生種々の機械で先づ足の爪より手の爪まで立派に剪り、次に爪の垢をもすつかり取りて吳れる。夫れから爪の付根の處の皮と爪との處を離してやる。是は想像もしなかつたが隨分いたいが又「彼も人也」主義で忍耐して居たが、足の爪から指の爪まですつかりやつた。是は耐忍ものだが何故に左樣するかと試に問ふたら、「オー君は爪の美を知らぬが君の國は指の美を尊ばぬか」と反問した。彼の說に依れば爪の付根の白い部分が爪の最美なる處で、之が多く顯はれる程爪の美を表はすのである相な。私は美處でない、痛いといつたら、先生笑つて「ドンナ愉快な事でも始めての經驗は痛苦を感ずる。慣るれば慣るゝ程愉快になるのだ」とて大笑した。流石の日

本の「ハイカラ」も之れまでやつてゐるかどうだか。

此の手術了りて「一寸お休みなさい」と云つて前の乙の室に引返した。

此甲室には外に三人の洋人が心地よげに臥してゐる。私も其仲間に入りて三十分ばかり過したが、人の戸を開く音て眼を覺し、五十錢の祝儀を出して我室に歸りました。

勘定して見ると、湯の切符が二圓、アルコール摩擦が五十錢、爪取りが一圓、外に祝儀が要る。一浴四圓!!

太刀山曰く、去年林大使が英國より歸朝の際は此船に乘られ、而して我土耳其湯を試みられた。君は林閣下に代りて大使として赴任するにはあらぬかと。我は「否とよ私は外交官でない、議院の書記官長だ」と申したら、彼は同盟國の高官を斯く幾人も我手に掛くるは我の名譽であると申しました。可憐の大男!!

此湯番は右述太刀山の外に英國大使マグドナルド閣下に髣髴たる長身痩軀の偉丈夫があつた。

露西亞風呂探檢記

花房欽一

某年某日、熊本大佐、衆議院議員短山鷹次郎、及び斯くいふ某局高等官花房欽一(以上三名何れも變名)の三人はモスコーのホテル、メトルポールに泊つた。それて今日は一つ有名なる露西亞風呂の探檢に出かけやうといふので三人一所に宿を出た。三人共に英佛獨の素養はあるが、露西亞語については何にも知らん。何にも知らんが熊本大佐といふ人はなか〳〵大膽な人であつて、丸ッきり言葉の知らん所にも未だ嘗て通譯を

連れて行つた事のない人だ。汽車中でもなか〱面白い事が多かつた。此大佐が歐洲諸國バルカン半島までも日本語ばかりを遣つて旅行し通して來た。そして其言ひ草が奇拔だ。向ふの對手を啞と聾と思へばよい。我輩が日本語で話せば必らず通用する。憖ひに上手でもない外國語を遣ふから却て間違ふ。と斯ういふのである。そこで剽輕な花房と話が合つて一所に面白く旅行した。維納からモスコーに行く途中で笑話をしながら食事をして居ると、露西亜のボーイの持つて來た料理が鳥か獸肉か魚か一寸判斷がつかない。そこでこれは何だらうと評議し合つた。而かも向ふは露西亜語の外知らぬらしいし、こつちは露西亜語は些とも分らん。「大佐一つ君の技量を試すのはこゝだ」と此花房がいつた。大佐は「よし〱」と答へてボーイに向ひ其皿を指して純粹の日本語で以て「オイ、コラ〱、コラ何んだ」といふた。ボーイは「フイッシユ」と答へた。「そら見ろ、露西亜語が分らんでも大丈夫意味は通ずるおやらう」「うむこりやなか〱妙だ」と笑つたことがある。又グラニカといふ國境で露西亜の軍人立合の上て嚴重な訊問を受けた。其時なか〱面白い話がある。向ふて訊問をする時に大佐は一々日本語で返答する。向ふから初め獨逸語で話したが「分らん」とやつた。佛蘭西で問ふたが「知らん」と答へた。英語で聞いたが、又同じく「知らん」と答へた。そして「尋ねるものが日本語で話せ」といつた。向ふても弱つて今度は花房を指して「此人は獨逸語を話すか」と聞く。大佐は「日本語を話す」といふた。「日本人が日本語を話すのは當り前の事で分つてゐる、分つてゐることはいはなくてもよい」と向ふていふ。大佐は「他人の事だからよくは知らんが日本語の外は朝鮮語、臺灣語、琉球語、比律賓語、馬來語位は話す。其外は全て知らんやうだ」とやつた。そこで向ふては益々弱つて嚴重に取調べやうとした。大佐は憤然として「オイ貴樣達!」日本帝國の軍人に向つて無禮をするな! 先頃の戰爭には大目に見てやつたが、こんな無禮をすると、今度捕虜にした時は承知しないぞ!」と叫けんだ。大佐の此大喝一

撃に恐れて、其儘無事に通過することが出來た。

こういふ面白い大佐だ。

そこでいよ〱三人が露西亞風呂探検に出かけた。

大佐は例によつて分らんことがあれば己れが敎へてやるといふ調子だ。一體露西亞の浴場は危險て、金目のものを持つて行けば取らるゝと聞いてゐたから三人共身輕な扮裝て出かけた。通りかゝりのものを捉へては「オイ、露西亞風呂は何處だ？」と大佐が聞く。皆意味が分らぬので其儘通り過ぎる、それで今度は或勞働者を捉へて、身振て顏や頭や身體を擦る眞似をして見せた。處が其男はどう思つたのか吾々を引張つて行つた。行つて見ると實に不思議に思つたのは入口に切符を賣る場所がある。そして其切符を買ふものは燕尾服を着て居る立派な紳士か又は奇麗な服裝をした女などてある。そして「どういふ處が欲しいか」と訊く。「一番上等の處」と答へると一つのボックスが二十ルーブルだといふことだ。湯屋でボックスとは可笑しいと思つて居ると、それは芝居小屋てあつた。これは當日の第一のシクヂリてあつたが、幸にして其處に獨逸語を話すものがあつて、湯屋はかういふ處にあると敎へて與れた。そこで三人はいよ〱本當の露西亞風呂の前に立つことになつた。

湯屋には入口が幾つもある。そして湯も亦幾つもある。入口の處に値段が書いてある。十五コペック乃至三十コペックといふのが一つ。五十コプック乃至一ルーブルといふのが一つ。又他のも一つ入口には一ルーブル半乃至二ルーブルとある。其第三の入口に行くと、大男が出て來た。此男も矢張り英語も佛蘭西語も獨逸語も出來ぬ。然し兎も角も入つて一ルーブル半の方の應接に行くと、どうも臭い。それて二ルーブルの方へ廻つた。こゝは一寸奇麗だ。其處へ座つて居ると、大男が出て來て頻りに左の拳を右の平手て打つ眞似をする。さうしてペラ〱饒舌る。が一向分らない。熊本大佐も合點が行かない。吾々が頻りに考へて居ると、「ハヽアコレヤ湯女の事ぢらう」と我輩が考へたので、上にかゝつてる居る女の寫眞を指すと「ダ、ダ」(然り、

然り）といふ。いくらだと談判を初める。矢張り話は分らぬから紙を出すとルーブルと書いて其上に二十五と數字て書いた。即ち日本の廿五圓てある。「從分高いが、どうだ、己れが一つ試して見よう」と短山先生いひ出した。熊本大佐は少し閉口して居るらしかつたが、短山先生蠻勇を振うて「兎に角己れが一つ試さう」といふ。て我輩は、「露西亞人は懸値をいふから待て〳〵、我輩が一つ負けさしてやらう」といつて紙を取つて二十五といふ數字を消して十と書いた。大男は首を振つて十を消して二十と書く。我輩は又十二と書く。とうとう双方から歩み合つて十五ルーブルて談判落着した。さうして頻りと我輩を引張る。「イヤ我輩ぢやない。短山氏だ」というて短山氏を指した。て短山氏は外の席に引張られ、我輩の所には錠をかけて行つた。やがて石鹸とたわしを持つて來て三十五ペックをとられた。錠を明けて入つて來たのは身の丈け六尺もあらうと思はるゝ大男て褌もなしに素褌て、やつて來た。これには我輩も驚かされた。そして其奴が隣の室に入つて一人づゝ來いといふ。先づ熊本大佐が入つた。大佐の入る間我輩は獨りポツ然として待つて居た。いよいよ我輩の番になつて行くと、風呂は日本の風呂と西洋の風呂の合の子のやうなものだ。桶風呂てなくして石風呂だ。湯は西洋の湯よりもずつと熱い。大抵日本の湯と同じ位だ。そして暖める時には、石の上に蓆を敷いて寢かし少し俯伏加減にして居る。さうすると其の素裸の大男先生は垢を擦る。頭から足までよく洗つて呉れる。又按摩をとつて肩から腰のあたりまで叩く。又湯の中に入れてシッカリ奇麗に洗つて呉れる。目新らしい處は石の上に蓆を敷いて寢かすことや、西洋には珍らしい熱い湯てあることと等だ。それて入浴が濟むと清水て淸め、隣の室に歸す。そこて横になつて休憩する。實にサッパリしてよい心持だ。我々二人が濟んだ頃に、短山先生ニコ〳〵して出て來た。「どうだつた」と訊くと「大變よかつた」といふ。よく訊いて見ると短山先生の方はなか〳〵面白い。我々の方て男が行つた事を、向ふては女がやる。室に入ると女が矢張り素

裸てやつて來る。そしていろ〳〵フザケル。一所に湯に入つて、矢張りよく身體を流して與れる。湯の中に入るものも室に居るものも其二人限りだから其女に向て如何なることとするも一向差支ない。そこて短山先生大いに滿足して「ドウダ、君等も一つやつて見たらどうだ」といふ。然し我輩の方はもう湯は濟ました事だから、其方は遂に實驗せずに了つた。

島の人

黑頭巾

其一

◉航海して島を見るは樂み也。島の人の心胸、面目、吾が詩趣に映ず。

◉吾輩は、島に依つて「島の人」を思ひ、「島の人」に依て島を論ぜんと欲す。

◉輓近、人文地理に干する著述少からず。然れども、未だ「島の研究」の大著あるを聞かず。吾輩敢て、島の研究を江湖に推薦し、併せて「島の人」の覺醒を促がす。

其二

◉薩南に二名島あり、櫻島大島と種子島とす。櫻島は鹿兒島灣に横はりて、山陽の「鹿子城中家幾萬、無窓不納紫屏顏」の句、人口に膾炙す。吾輩、久しく其の奇景を想像す。一游の機を待つこと年あり。

◉櫻島に大根あり、溫泉あり。其の地僻にして太古の如し。薫風に浴して以て神を養ふべし。島の人物言ふべきもの無し。島頂、つねに煙を噴きて、薩州男兒の爲に氣を吐くに似たり。

◉平野次郎、勤王討幕の論を懷抱して鹿兒島に來り、薩人を激して、起たしめんとす。薩人應ぜず。平野憤

りて歌ふ。曰ふ、君が胸の燃ゆる思に比ぶれば、煙は薄し櫻島山。次郎は蓋し一代の奇男兒也。

●種子島の名は鐵砲に由つて、萬古に輝く。島は、禿盡するあらんとも、種子島の名は、永遠に、吾が文明史を飾るに足らん。鐵砲は舊文明を破壞し、新文明を樹立するの一要素也。泰西の鐵砲、日本に傳來するは此地に於てすと傳へらる。

●種子島の大名を種子島氏とす。今、男爵也。島の歷史は、島の人、西村天囚の沿革史論に詳か也。此に贅せず。

●元祿の頃、種子島氏に名君あり。山鹿素行の門人にして、大石良雄と相識る。江戶より歸途、嘗て、大石を赤穗に訪ふ。大石大に喜び、先づ「何は無くとめ」と一獻を呈す。膳の上、唯だ盃と吸物椀を載す。頻りに酒を勸めて、吸物を勸めず。

●酒數行の後、更に吸物椀を捧げ來り、もとの椀を取り去る。大石、乃ち「何卒、御吸物を」と勸む。客謂ふ、蓋し前者は空吸物にして、大石が此の珍客を留むるが爲に、不取敢、酒肴を供したるものならん。一些事、以て、彼が機智を見る。

●元祿の世は、豪華の中に禮意あり。今の紳士ならしめば、恐くは、逸早く、吸物椀を開きて。大石をして面目を失はしむるならん。然れども、大石も去る者、齊東野人には、空吸物を出さゞる可き也。

●種子島は、三百年來、薩摩に隷屬す。薩州兵兒の中『島兵兒』と稱するもの、則ち、此の島の健兒也。而して、西村天囚は島兵兒也。

●大島は、西鄉南洲に依て著はる。南洲、此の島に謫せらるゝのとき、行李蕭然、唯だ、細井平洲の嚶鳴館遺草一部を携ふといふ。平洲は、活學者。遺草は經世の識見あり。南洲が、島に閑居して此の書を讀む。其の默解することあるもの、果して如何ぞや。平洲は沒後に偉大なる讀者を得たり、泉下の喜想ふべし。

●學者、手を以て、天下を濟ふ能はざる者、須らく經世の大文章を身後に留むべし。一人の知己、出でば、經國の大業、其の手に依りて行はれん。

●南洲、此の島に在るとき、菊次郎を生む。今、京都の市長也。彼は、嚶鳴館遺草を讀みしことありや、如何。

●沼津の近海、靜浦に西鄉島あり。侯西鄉從道の別莊ありしに由つて名づく。今、岩崎の有に歸し、設備頗る善美を極む。

其三

●壹岐、對馬は、對馬海峽に横たはり、吾が日本海口を擁護する天與の堅壘ならずんばあらず。此の二堅壘の効果を發揮するは、過去の三千年に非ずして、則ち現代及び迢々たる未來に在り。

●國史に於ける此の二大島は、種々の史的感興を起さしむ。此の二大島が、宛として「飛石」の如く、日韓の間に點在するは、先づ吾日本人をして、朝鮮を比隣とし、以て日本海を箱庭視するの觀念を涵養せしめたる一要素たらずんばあらず。

●此の島人が、熱烈なる祖國の精神は、元寇の役に、遺憾無く發揮せらる。對馬の宗助國、壹岐の平景隆の忠勇なる血液は、永く島人の血管に流れて、島の歴史を爲せり。此の二人者は、此の二大島の氏神として、永遠に神威輝かす可き也。

●壹岐の魚釣山の奇勝は、吾輩、屢之を聞く。景隆以後、未だ名家の出るを識らず。

●吾輩の知人に原乙三あり、教育家也。今、三河の長篠に在り。彼、生平、馬場美濃守を尊崇し、武士道の木鐸と爲す。彼は壹岐の人也。彼の少時、其父、彼に敎ふるに、戰國武士の美風を以てし、就中、美濃守を推賞するに本づくと聞く。則ち名家無しと雖も、士風の見る可きものあり、又以て、微するに足らずんばあらざる也。

●對馬は、殊に、朝鮮密貿易を以て、古來、其の富を爲す。而して、貿易商人の奇傑として擧ぐ可き者あらず。密貿易は、宗氏之を經營す。對馬の人物は、舊藩士の中に在り。

●三百年間、日本の文運史に記す可き者、對馬には、唯一の雨芳森洲あるのみ。彼は一代の碩儒、而して、語學の才、又た得易からざるものあり。淸韓の語に通じ、共に、之を綴り且つ語ることを能くす。韓客、彼を揶揄して、君、就中、日本語を能くすといふに至る。又た當代、文壇の一異采也。

●幕末の對馬は、士氣の振ふことを聞く。而して、勤王佐幕の論爭に、有爲の士、概ね互に勦絶し、維新後また青年を提撕すべき大先輩あること無し。

●宗氏の治處は嚴原に在り。其の石高に比して、士族の數は、非常に多し。嚴原の外、古來殆んど、人物の出ること無し。嚴原は、朝鮮海峽に於ける人物及び繁榮の中樞也。

●九州より壹岐、對馬に渡る可き近港は肥前の呼子港

とす。古賀精里、草場珮川の韓使に迎接する、また此處より解纜す。輓近の郵便船も亦た此より通ず。

●呼子港は、名護屋の對岸に在り。太閤の衣帯に映ぜし城上の松翠は、今、蒼々として、港口を照映す。此の海岸一帶、和船の良港、夜々、絃歌の聲湧く。「呼子のケイラン喰はずにや歸らん」の語あり。ケイランは、名物ケイラン饅頭也。依て以て、船妓の事を咏ずる也。

●維新後、對馬の人物を細谷省軒とす。彼は漢學者にして、小品文を得意とす。彼が、嚴原の商家より出身すること、尤も珍とするに足る。彼には、殆んど常師無し。少時、早く九州に渡る。宜園の流を汲む者なるべし。

●半井桃水も亦た嚴原より出づ。彼は藩醫の家に生る。尺振八の共立學舍に學び、漢學は、小永井小舟に問ふ。吾輩、少時「大阪朝日」を讀み、既に彼の名に熟す。近ごろ、初めて相逢ふ。年齢尚ほ五十許、老實なる人也。

●聞く、帝國座の女優に、川村菊枝あり、年廿一二。或は激賞して、將來、女優の立物なるべしと爲す者あり。頗る箏曲に妙。其の母は嚴原の人。桃水の教育するところ也といふ。

●此の二大島には、今、ともに中學あり。對馬には要港あり、砲臺あり。吾が文運の發展に伴ひ、且つ日清日露二大戰を經て、兩度、決勝の大海戰の砲火を見、島人が、自覺の念、油然として盛長せずんばあらざる可し。則ち、今に於て、語る可き者多からずと雖も、將來、必らず有爲の士風、興起して、朝鮮海峽を飾るの人物輩出するあらん。

其　四

●玄海洋より東北、裏日本の島嶼に至つては、佐渡、隱岐及び長門の青海島（オウミシマ）あり。佐渡の外、大に說く可きものあること無し。

●隱岐は、古來、一國を爲す。蓋し、交通の不便なる、之を一國として行政の自由を與ふるの、治め易きに因るものならん。

●隱岐は黑曜石を產す。其の人物は、史上に現はるゝものあること無し。後醍醐天皇を遷底に隱し奉りて、島より落し參らせし漁夫は、此の島人にして、吾が國史に、尤も多く影響を與へしものならずんばあらず。

●吾輩、青年時、航して瀨戸海を過ぐるに、多度津より乘込み來る紳士あり。風采揚り、擧動、禮に嫺ふ。一揖して坐に就き、船、錨を拔くや、紳士は、洋服を

脱して浴衣を著け、枕を引寄せ、横臥して、紫雪を呑む。

◉船室、唯だ吾曹と彼とあるのみ。則ち、談論、以て時を過ぐ。食堂に入らんとす。彼曰く、僕、生來、船に在るの間、飲食せず、唯だ紫雪を服用するのみ。此行、快談、以て播州灘を經過す。また得難きの快心事也と。

◉此の紳士、中沼清藏。京都三高の教授。漢學者也。吾曹、嘗て其名を聞く。彼、頗る堅固に朱註を奉じ、範疇を出てず。生平、淺見絅齋を崇拜し、事々、悉く、絅齋先生を口にす。刀を握り、肩を怒らし、以て絅齋を風貌す。蓋し少壯時、維新の一志士也。

◉此の慷慨にして、海を恐るゝ紳士は、實に隱岐の人也。爾後吾曹、航海して船暈の客に逢ふ毎に、彼を想起せざること無き也。

其　五

◉下關より北に、裏日本を回航するに、第一に見る良港は、仙崎也。仙崎は、萩の西南、六里に在り、古來、捕鯨を以て名を得る。今、漸く、海運界に著聞す。

◉仙崎は、魚鹽の富、殊に裏日本に雄視す輓近、冬期は、其の魚、多く日本橋の魚市場に來る。魚、日本海の猛濤に慣れ、皮肉脊腴、ことに腐敗し易からざるを以てなり。

◉仙崎灣は、海軍の一要港。其の北の口は、遙に萩に連り、水、廣濶。常備艦隊の全部を泊するに足る。而して、仙崎と相對し、屈曲して灣を抱くところを三隅の澤江とす。海に臨んて、百家の村あり。其の軒を超えて小邱に見ゆ。村田清風の尊聖堂のある處、蔚たる一塊の翠色、則ち清風松とす。小邱より左、半里、奧まりたる平地の村、則ち周布政之助の桑梓の地也。

◉澤江より仙崎灣を望めば宛として湖水の如く、風物頗る明媚也。往年、巡視の官、來る。村人、迎へて、捕鯨の奇景を説く。官人憤り謂ふ、此の湖水、何に由つて鯨鯢を拉し來るを得ん。

◉仙崎灣を劃りて屏風の如くに連亘し、以て北海の風濤を防ぐものを青海島とす。周回七里。其の表面は、翠色滴らんとし、通浦及び大日比の良灣あり。其の背面は、すべて、千仞の絶壁、一帶に削立す。

◉大日比は、夏橙と淨土寺とを以て著はる。寺は地方の一巨刹とす。別に、付屬の尼寺あり。山陰に、一區劃を爲し。尼、富家の女多く、花に灌ぐを以て課とす。時に、水仙花を手にして、佛に供するを望むことあり。

◉大日比は、北に山を負ひ、南、灣に望み、風候ことに溫暖、菓果殊に富む。夏橙、枝繁り、累々たる巨果、金色離陸として、茨垣を壓す。夏橙は則ち長門蜜柑也。長門蜜柑は、專ら萩城下に產す。而して其の本場は則ち大日比也。大日比の產は、皮薄く肉肥えて、味、尤も美也。

◉吾輩も、嘗て、大日比に一遊し、其の野趣の饒きを喜ぶ。若し、之をして大都會の附近に在らしめば、則ち、夙に、幾多の富人と小說家とを吸收したるや、想見す可き也。

◉大日比の村に上利氏多し。大内氏の時、上利一黨此の崎に占據す。大内義隆の陶晴賢に逐はれて、山口を脫して九州に奔るや、先づ通浦を渡つて船を命ぜんとす。上利一黨之を迎へて敬屈す。義隆主從、行疲れて頗る饑ふ。而して山村の中、突嗟、物の饗すべき無し。則ち、飯を山歸來の葉に盛り、以て勸む。義隆喜び、涙下る。守本尊の運慶作觀音の小像を與へて、去つて船に上る。風起つて行く可らず。則ち船を捨てて太寧寺に至つて、主從盡く自刄す。

◉大内氏、太寧寺の最後の一齣、悲壯を極む。蓋し、天目山の武田氏滅亡と共に、戰國の二大悲劇也。後の訪人、此の一齣を脚色せん者、須らく、青海島の一節を脫す可らず。

◉通浦は、今、漁村たり、稍繁華也。捕鯨の一名處とす。戰國の頃、通浦千軒と稱へ、此の島の首府たりしなるべし。征韓の役に、其の水夫は概ね徵發せられて水軍に從ひ、戰沒して歸らず。通浦これより衰ふ。

◉青海島の西部、小湖あり、湖岸好風景あり。新進の陸軍少將大庭次郎は、此より出づ。

◉仙崎の名、日露戰役に由つて、更に海事者に注意せらるゝに至る。仙崎と青海島とは分割するを得ず。幕末、毛利氏の海防を經營するとき、又た、此處を以て、防備の一中心點とす。黑船の動靜を報ずるの信號には旗を用ひ、種々の色彩を以て之を區別し、急飛脚、之を擔ふて以て萩城下に電馳せし也。

◉青海島の名、未だ甚だ著はれず。吾輩、鄕里の青齋より、日夕、つねに其の翠色を望んで、之を愛すること、山陽の東山に於けるに讓らず。吾輩は、人文地理の研究者に向つて、裏日本の、隱れたる一名島を、敢て推薦する者也。

其六

◉萩と仙崎との二點を結び付くる直線を基底とし、此

の二點より朝鮮海に向つて、各、十三里の二等邊三角形の頂點に立つ一孤島を見島とす。周回三里。掀天の怒濤の間に、一粟粒の如く青し。昔し、見島郡たり。今、阿武郡に隷屬して見島村となる。

●此島多く、世間に知られず。唯だ、一葦小舟、僅に萩城下に通ず。韓人、漂著するもの、古來、絶えず。白衣の客、屢、群を爲して、島中に徘徊す。

●此島、日韓文明、接觸の一點として見るべきもの無くんばあらず。聞く、島中、往々、朝鮮土器を出す。而して學者の島に至る者ある無し。先年、篠原市之助、土器石器を調査して歸る。彼は、史學の熱心家也。未だ其の報告を發表するに至らずして歿す、惜む可し。

●頓野廣太郎、大和五條の人、氣象學者也。山口の高等學校に教授たるとき、鳳翩山に山上測候を爲す。本邦に於ける山上測候の嚆矢とす。此人、嘗て、一夏を此島に送つて、氣象を觀測す。

●絶海の孤島に在つては、天威、人意を壓す。見島の人、海を怖るゝこと甚だし。つねに淺渚に游泳して、遠洋漁業に從事する者無し。人々、眼を張つて、滿天の風濤を驚き見る。而して、一箇、新人物出でず。

（次回完結）

吾輩、生平、酷だ燒芋を嗜む。燒芋は羊羹よりも美也。而して燒芋に依て、つねに島を思ふ。此夕、一泊旅行に梅兄別を惜んで、燒芋の折詰を贈り來る。汽車中、此篇を草す。燒芋の温かき香ひ、身に浸みつゝ。

―國府津に於て

黒頭巾記

人物評論（十四）

井上侯爵論



△井上侯爵

文學博士　三宅雄二郎

故岩崎彌之助氏が晩年に言つた、『自分は舊友の訪ねて來ないのを遺憾とする、訪ねて來る者は何か求むるところがある、骨のある者は求むる所ありと思はれるを嫌つて來ぬ、骨のあるのと一緒に話して見たいが其れが出來ぬ、困つたものである』と。この嘆聲を發すべくして發せず、發することさへ思ひ當らぬらしい

のは井上侯である。侯は世話好である、舊友に限らず、新友をも世話する、隨分骨身を入れて世話する、借金の世話する段になると臺所の隅のことまで注意する、實に親切である。が然し自分に頭を下げて取入つて來る者に限る、旨く取入つて來れば乘氣になつて世話をする、閣下に限りますとか、御前に限りますとか言つて氣を迎へれば善い、時には強く出てゝ爭ふ方が却て氣に入ることもあるが、何にせよ氣を迎へねばならぬ、氣を迎へぬ者には一向構ひ附けぬ。扶ければ公益の爲になることが明かで有つても頓着せぬ、世話する心持も世話する仕方も何程か博徒の親分に似て居る、餘り手段の如何を問はぬ、思ひ切つて如何はしいこともする、世話された者はそれ丈有難味を覺ゆるけれど、世話されぬ者は唯だその無理を敢てすることを知り、不都合な奴、怪しからぬ男などと思ふ。

身分が身分丈に、力の及ぶところが廣く、世話したところも多い、子分と言ふべき者が澤山居る、是等は御思召のまゝに働き、病氣と聞けば大騷ぎし、その一人の不幸は帝國の不幸であるかの如く吹聽する。しかし世話にならぬ者は何とも思はない、勝手な眞似する老爺、大抵にくたばればよいと話合ふのもある。是れが敵味方と言ふ關係ならば善い、敵として恐ろしく味方として賴母しいと言ふのは、往々有力者に見るところであつて、敵に憎まるゝのは力のある證據とすべきであるが、侯を褒めないのは敵といふ譯でなく、只直接又は間接に世話にならない丈の事である。如何なる人にも知合に限りがある、如何に世話好であつても世話に限りがある、人を褒めたり誹つたりするのは、知合であるの無いの、世話に爲るの爲らぬのといふのでない、善いと思へば善いと言ふ、實際乃木大將を知つて居る者は甚だ少く、顏を見たものも多くないが、知らなくても褒める、帝國の寶だと言ふ、才幹を疑うてもその爲人を褒めないのはない。が井上侯を褒めるのは直接又は間接に世話になつたものに限るのであつて、これ以外の者は左程に思はない、必ずしも惡く言ふのでなく、偉い人だと思つたりしても、世話になつた者と較べると大なる相違がある。

現に官僚の首領山縣公と並び立ち、桂首相にも勝手が言へるし、政友會の原氏にも勝手が言へる、して實業界の三井を始め、その他にも勝手が通る、それで世間に尊敬されて居るやうであるが、その名を聞いて聊かなりとも慕はしく思ふ者は國民の幾分てあらうか。

利害の關係ない者は隨分惡く思つて居るのがある、體のよい泥棒と譏つたりする、國賓て儲けたとも言ふ。が然し生前立派な傳記の出來て居ること侯のやうなのはなく、生前立派な銅像が出來て居ること侯のやうなのはない。

侯は確かに尋常人でないのに、其の割合に有難く思はれないのは、我が儘て身贔負の甚しいからてもあらう、その善い加減に飾り立てせず、好きなことを爲し嫌ひなことをせぬ、欲しいものを取る、腹が立てば烈火の如く怒る、天眞爛漫と言へば言へやう、然して人情に厚く、肌を脫いて人を扶ける邊、なか〳〵面白い處がある。侯が居らなかつたならば、故伊藤公も彼の如く功を立て得なんだてあらう、まして公より小い連中は尙更らてある、偏へに侯の引立に依つて居る。侯は精力があり、決斷があり、人の危んで居ることも一斷て成立たしめたこと幾回もある。が善惡の差別あつても正邪の差別が判然しない、情の向ふところ公私を混同する。常識て明かに不正と認め得ることを何とも思はず、法律さへ潛りさへすれば差閊ないと思ふ傾向がある、法律を守るのは正義の爲とするよりも獄に入るのは馬鹿げて居るから避くべきであると考ふる方である。侯は法律に問はれにかゝつた事があるが、問はれぬにしても種々善くないことがある、實は司法官が今一層嚴正であれば更に强く法律に問ふべきであつたらう、司法の歷史に往々話にならぬことがある、侯の一生を明さまに顯したならば今更の樣に怪まれやう。

侯は維新に功勞がある、元勳である、而して何故に御信任が左程でないか、推察するに難くないのである。故黑田伯は動もすれば侯を罵つて惡い奴と言つた。然し無理をして思ふことを通さうとするのは、浪花節に語らせて面白く感ぜられさうにないでもない。馬鹿なことに拘泥するのは馬鹿なことであるとし、頓着して構はぬのは愉快らしく聞こえぬでもないが、之をして思ふ存分に力を伸し得せしめたならば、如何なる邊まて情弊が及ぶか測り知られぬ。が侯は其れ許りでない、何時でもさう極つて居りはせぬ、隨分氣紛れてある、思ひ切つて惡いことしても惡いことしてならぬと悟る事もあり、若し弊の及ぶ所甚しいと見たならば、根本的に改めやうともする、唯だ永續させず、右へ曲るかと思へば左に曲り、左に曲るかと見れば右に曲り、自ら立案した所を自ら破壞し、何の結果もないことがある。大體であつて案外卑怯なことがある、平素人が

頭を下げるので、人といふ者は頭を下げる者と思ひ、頭を下げぬ者があると、不思議がつてあわてたりする。伊藤首相が怪我して井上侯が首相代理をした時、衆議院で少しばかり攻撃されて狼狽したが、當時後藤伯が廊下で人に向ひ股を指し、井上は是れが縮み上つて居ると言つた、慣れぬことて狼狽するのであるが、狼狽は狼狽である。が狼狽しても癇癪を起せば棄鉢に強くなつて、梃でも動かなく爲つたりする。兎に角知合の仲では侯の力は缺くべからざるものとなつて居る。時として極めて緻密であつて、思慮分別の到らざるところないが、その邊で左程頼母しく思はれぬけれど、思ひ立つたことを如何しても通さうとするところは他人の及び難いところである。つまり完全に出來上つた人間でなく、出來そこなつた畸形の英傑である。

生前に立派な紀念物が出來上つたのは勢力の頂上に達したのを示して居るが、死後に何程の印象を留むるか、一生涯力を逞くし得たが餘り意義ある生活でないと認めらるゝ點もある。侯だけは一種有力の人物と賞讃するにしても、侯に似て非なるものは誠に言ふに足らぬ、博徒の親分はまだ善からう、鼠小僧の如きものを如何に見るべきであるか。併し侯の情に厚く、場合により理非を顧みざるところは、冷酷不人情の徒を戒むるに足らぬともせぬ。

△井上侯爵論

靜觀居主人

御維新前頃のあの大舞臺に可なり立派な役目を働いた人物の中で、今殘つて居る人は、多分幾らもなからうと思ふ。伊藤公も亡くなつたからして或は井上侯一人でなからうかと思ふ。薩摩の方ではもう疾うの昔に亡くなつて了つて居る。そして其頃の働き加減又は働振りの最も主動的な事などから見れば、伊藤公よりも井上侯の方が無論上であつたでせう。山縣公よりも上なることは固よりいふまでもない。山縣公が國の政治の事に大いに力を込めてやつたのは兵制改革を除いては廢藩置縣の頃が其初めでなかつたらうかと思ふ。其以前は只隊長として又は參謀としてやつた。國政については、意見はあつたかも知れぬが、働振りは見えない。其れに比較すると井上侯は初めから政治家である。倫敦で聯合艦隊の馬關砲撃を聞いて伊藤公と日本

に歸つて來た。其發意者は伊藤公にあらずして井上侯てあるらしい。そして歸て來て生命懸けて開國論を唱へた。其元氣はなか／＼エライものといはなくてはならぬ。そして長州の藩論を決めていよ／＼幕府に抵抗する手筈を定めた。それは一藩の政治ともいへばいへるが矢張り日本の政治に關係して居る。

あの歷史から考へて見れば、井上侯に何か他に備つたものが（それが智慧であるか德であるか私にはよく分らないが）あれば勿論西鄕、大久保、木戸などゝ比肩し得べき地位に立つことが出來たに違ひない。年が少かつた爲めに他人に讓つたとしても後大いに頭を高く上げて、モソットよい役目を引受けたに違ひないと思ふ。處で何か缺けて居るものだからどうも仕方がない。其缺けて居るものゝ何だかは私にはよく分らないが、何か缺けて居るものゝあることは確かと思ふ。あれて御維新前後、西鄕大久保などから隨分嫌はれた事があるてせう。木戸は無論井上侯に保護を加へた。然し征韓論の時に木戸が役に立つ人物を岩倉公や三條公に勸めた時に、井上といはずに伊藤といつて居る。井上侯か參議になつたのは餘程遲いてせう。何時てあつたかよく記憶せぬが、働方の割合からいへば餘程遲れて居ると思ふ。畢竟それは鹿島の時の權勢家から取られなかつた――取られなかつたといふよりは寧ろ嫌はれて居つた、憎まれて居つた爲めてあらうと察せらる。然し其嫌はれたのは何の爲めてあるか、それが果して井上侯の本當の缺點てあつたか、又嫌ふ方の間違てあつたか、私はまだ其點を深く研究した事がない。嘗て江藤新平に大いに追究せられたといふことは、あの人の其時代の行動に餘程不謹愼な事があつた爲めてせう。兎に角司法卿の江藤氏に彼是いはれる丈けの缺點を曝露したに違ひない。江藤は司法制度一方てやる。井上は大藏少輔か大輔かて費用を出さない、そればかりてなく隨分氣儘勝手な事をやつたらしい。そして兎に角財政上から澁澤男と二人て罷めた。若し其時救ふ事が出來たら誰か救つたらうと思ふ。が存外誰も救つてゐない。餘程缺點があつたものと見なくてはならぬ。先づいはゞ瑕瑜並び掩はずといふ譯で、功も功と思はず、過も過と思はぬといふ風がある。が、そこが又井上の井上たる所かも知れない。が正直にいへば、あの人の政治上の意見、經濟上の意見には私は餘り感服した事がない。或事柄について、又は或局部について計る時は頗る熱心て且つ親切だが、どうも大體に粗なる

所があるやうに思ふ。そこが政治家としての缺點のある所だと思ふ。私の目につくのは其れ丈けである。あの人の政治上經濟上の意見には全然あの人の意見が結構だと感じたことはないが、然し我々の傳へ聞く所が間違つてゐるのかも知れない。然し私が感服しないのみならず、外にも感服しない人が多いものと見える。其證據にあの人は未だ一遍も內閣を組織した事ながい。一遍やりかけたがとう／＼やり損つて頭を搔いて引下がつた。大體の組織の能力に缺けて居る爲めでなからうかと思ふ。

缺點は缺點として、美點も亦少くはない。實に非常な美點がある。醇平として醇なる所がある。一つは地位とか名譽とかいふものにあの人は餘り執着心がない。其點は伊藤公と大違ひだ。伊藤公はなか／＼名が好きてあつた。井上侯にはそれがない。然しあの人の第一の功は國の爲めと思つて開國論を唱へた事にあるてせう。

引括めていつて私はあの人はよい人だと思ふ。日本の爲めになつた人と思ふ。內閣總理大臣になつて思ふ通りにやらなかつたのは最も日本の爲めになつたかと思ふ。伊藤公の事業は井上侯が傍から之を助けた爲めに出來た事が餘程澤山ありませう。友誼も二人の間は終生渝らなかつた。井上侯は伊藤公の功を餘程分つべき人て、伊藤公傳を正傳、井上侯傳を副傳として合傳すべきものかも知れない。どうか長生して欲しいものだと思ふ。

△井上侯論

早川鐵冶

凡そ人を評する場合には、よく其の人を知り親しくその人に交際するとを第一の條件とする。私が山縣公の評をやつた節、山縣公邸に親しく出入する或人の話に、早川の評は多少惡口を言つた氣味はあるが、然しよく山縣を知つて居るが故に、當らずと雖も遠くはない。然し何んとか云ふ政治家の評に山縣と伊藤公との間を云爲したのは甚だ不都合極まる。由來今日の政治屋が單に今日の政治屋の考のみを以て吾人國士を批評するのは穩當てない。と此う言つた事がある。

なる程今日の新聞記者や政治家の觀察と、維新前の人々の考へとは違つてゐる。之は畢竟舊と新との相違

てある。此の新思想と舊思想との優劣は、何とも解らぬが、然し武士道とか、大義名分とか云ふ思想に至つては、確かに若い者の方が劣つて居る。此劣つた頭腦を持つた今日の政治家が直ちに此の考へを以つて元老や國士を批判するのは、如何樣少々當を得ぬ。私に井上侯の評をしろと言はるゝは、此點に於て迷惑である。

井上侯と私とは親しく交際した事がない。明治十八年に私が外務省に出た當時の外務卿として面識あり且つ多少親しく話した經驗があるばかりである。大隈伯の場合とか後藤象二郎伯、若くは榎本子の如きは、各々私が嘗ては秘書官として居た所から、隨分公平な評も出來るが、今度の井上侯は何も私が秘書官をやつた譯でなく、所謂公私内外共の親交ではなくして、單に私の長官であつたと云ふ丈の事、内輪の事は一切不明である。公平を望まるゝ人は要するに、不滿足に終るとてあらうとお察しする。畢竟侯が外部に露はれた事ばかりの評に過ぎないからである。

井上侯の子女達とは、不思議に私は親しく致して居る。井上勝之助氏は嘗て私が同僚として、三年も居住を共にした。勝之助氏の妻君も十四五の時代から知つて居る。藤田四郎氏は竹馬の友其の妻君は亦、藤田氏が知らぬ事以上の小說的生ひ立ちを知つて居る。都築馨六氏も先輩の學友其の妻君も肩上げの取れぬ内から心安い。斯く駙馬も娘達も不思儀によく知つて居る。その癖侯自身はよく知つて居ないと云ふのも不思儀な位である。これは僕が斯ゝる緣を以て權門に出入することが嫌ひな性質から態と懇親にせぬのだ。

何でも井上侯は、此の早川に似た人らしい。私はよく「雷(かみなり)」と言はれて居る相だが、井上侯も亦同樣に「雷(かみなり)」だと云ふ事である。直ぐに腹を立つて呶鳴り出す。そこが似て居るのみならず、友人に親しく、特にその子分を慈しむ事の厚い所も、嫌ひな人物となれば、徹頭徹尾嫌ひてある所も、一々なる程似寄つて居る。要するに人間が偏頗で、小心で、大人物でないと云ふ評は侯には免れ得ない樣である。

山縣公評の時に、これが元龜天正の頃ならば、差し詰め德川家康であらうと言つた。と同樣に井上侯を元龜天正の頃に求める事は不可能である。と言ふのは、侯には政治の手腕以外に理財の能があるからである。尤も當時長束政家、本多正純等は文官出身で、多少理財の才を備へてゐたにはゐたが、長州の三傑と云はれた井上侯を當時に喩へるに、德川家康と並び立つ程の

人物を得る事は至難である。要するに侯は政治家にして理財家であるが、どうも狹隘であつて、政治界で申す清濁併呑等は出來得ない人である。親しき者には恐ろしく親しく、嫌ひな者は何所までも嫌ふ。敵とすれば肉薄して攻擊をする。が子分となれば舐めつく迄に厚くなる。愛憎の念の强烈な人である。私の先輩に齊藤修一郎と云ふ人がある。侯の秘書官となつて、大變に信用せられた。この侯に信用せられたと云ふ事は、實に恐ろしい所まで達したもので、一時は全く豆腐、味噌、醬油の點に至る迄、侯は一々關涉をした。晩年その齊藤が侯に捨てられて、全くこれは極端に捨てられて、殆んど饑渴に迫つたまゝ死んで逝つた。思へば哀れな男である。近頃有名な田島信夫が、日糖事件以來侯に捨てられた。此田島と云ふ人も元來山口縣の屬官を勤めた人で、何う見積つても將來地方の郡長位までにしか見通しのつかぬ人である。それが何うした機會か侯の信任を得た。毛利家の財產整理に着手して、突如として實業界に飛て出た。電氣會社から、正金銀行から、至る所の會社の重役となり出した。そして日糖事件の起つた時、侯が一寸口を辷らした計りに毛利家の財產を持ち出した。そして事一旦破綻となつた曉、侯は斷然として田島を排けた。それを最後に田島は實業界から追放せられた。追放せられたのは田島の失敗ではなくて、或は單に井上侯の信用がなくなつたと云ふ迄であつたのかも知れぬ。親分持は樂に出世榮達が出來るが罷り間違ふと頓でもない悲境に陷る。僕等の樣な腕一本脛一本のものは平素苦多くして功少ないがこんな危險はない。

尤も今日では、井上侯は政治界に於ては過去の人てある。過去の人ではあるが大隈とは譯が違つて、侯は今日に至る迄多少の潛勢力を持つて居る。現今の總理桂は往昔井上侯の恩顧の士であつた。のみならず現に桂の妻君は侯の養女である。侯の孫娘は桂の子の妻君となつて居る。百年の後或は勝之助氏の後は桂家から入つて繼ぐ事になるかも知れぬ、と云ふ程親密である。宮中に於ける侯の勢力も亦隨分馬鹿にはならぬ。杉子爵は侯の子分である。その杉の勢力は、先般河村金五郞が次官になつたので解つて居る。順序から行くと中々河村が花房と云ふ老吏の後任として次官になる程の人ではない。それが杉の婿さんと云ふ所から直ちに拔擢せられて次官となつた。これには世人も驚いた位である。

井上侯は政界に於ては桂太郎を持つて居る。宮中に於ては杉孫七郎を子分として居る。とに角侯が大隈より大な潜勢力を府中宮中に持つて居る事は事實である。現に桂内閣の出來る前に、井上侯を薦めた人もあつた。然し侯はよく分を知つて居た。自分が偏頗で、狹隘で、愛憎の強い人間である事をよく知つて居た。これは寧ろ桂を薦める方が當を得てゐると考へて、桂を推した。

斯様な勢力が今日に至る迄侯にあると云ふ事は、一に侯の幸運にあるのである。侯が萬一長州以外に生れたならば、侯の如き雷的性質では到底今日の樣な政治界にも經濟界にも大勢力を有する樣な運には會はなかつた事と思ふ。

侯は長州も、山縣、伊藤などゝ違つて、歴々の武士の家柄に生れて居る。殊に年輩も山縣や伊藤より上であり、之を兩人からすれば何うしても兄分である、兄分として自分の位置に拘らず侯を遇して居た。隨つて侯は今日の勢力になつたのである。侯はなる程若い内から長州に於ける勤王家として東奔西走を試み、軍人として如何にも偉功のある事は事實である。然し侯が明治の政府に何れ丈の功勞を献つたかと云ふ事は、不肯は知らぬ、たゞ侯が事業の跡を尋ねて見て、惡口をする樣ではあるが、一として成功して居ない事丈は確かである。曾て大藏省の財政整理に着手して失敗し、侯は澁澤男と連袂辭表を提出し、澁澤は退いて民間に下り、侯も一時野に下り先收會社（三井物産會社の前身）を組織した。間もなく元老院に入り後英國に渡航した。すると大隈がその跡を引き受けた。明治十一年大久保公が殁した時、私はある有力な役人の家に食客をして居たが、折柄其の役人が私に大久保が死ねば必ず井上が召還さるだらうと言つた事がある。何でもその頃侯と大久保との關係は、大久保の生存して居る內は何うしても內閣に入り得ない狀態に在つたものらしい。案の定侯が歸朝して工部卿となつたが曾て伊藤の初めた赤羽の製作場から美術學校から造船所から鑛山に至る迄悉く止して民業に附して了つた。之は今日に考ふれば隨分遺憾な事である。一々再び官營に移さなくてはならぬ始末になつて來た。殊に遺憾なのは釜石の鑛山である。侯は伊藤彌次郎と云ふ人を鑛山局長にしたが此男子一度釜石に出張して碌に分りもしないに釜石鑛山は鑛量豐富でないと云ふ復命をして其結果鐵道から、熔鑛爐から、百萬の資金を要した設備を丸で

古金の値て即刻民間に賣り出した。それが今日田中長兵衛の手で立派に成功して居る。其他長崎の造船場は、三菱が手をつけてから盛んとなり、川崎の造船場、淺野のセメント等も、一として私營になつてから隆盛とならぬものはない。それが全く捨値同様に賣り飛ばされたものなのだから驚く。外務卿となつて、條約改正に着手したが、目星しい結果を見ず農商務に入つて一時頻りに大農論を鼓吹して居たが、之も遂には行はれず。否本邦の如き地勢の國柄に行はるゝ筈がない。政治上ては自治黨を組織したが中絶し。取引所問題もブールズ問題以來思ふ樣に行かず。後大藏省に居た事があつたが、在任が餘り短かくて物にならず。内務省は内務省で例の埼玉縣選出代議士の齊藤珪次が長州の米問題に就て侯に強硬な反對を試み、爲に侯は辭職の止むなきに立至つたと云ふ始末に終りをよくせず。間もなく朝鮮に渡つて早々急劇な改革を斷行して、日本の官制から法律から一切その儘移植を企てた、然し之さへ遂には失敗に終つて、徒らに紙上の改革(Paper Reform)と云ふ空名を殘した限り、操縦し樣と考へた閔妃に、繰縦しられて終焉となつた。惡口を言へば一體飽つぽい。初は脱兎の如く終を處女の如くしたと云ふのは亂暴だが、多少そんな氣味はある。侯等がこんな改革抔をやつて居ろうものなら未來永劫浮ぶ瀬がない、政府以外に侯は三井家の相談役となり又毛利家及び貝島家の財産整理をやつて居た。貝島家では大に侯の恩を德としなくてはならぬが、毛利家の整理は決して侯一人の力であるとは申せない。その後東本願寺の財政整理に着手し、渥美、石川などゝ云ふ海山千年を經た老狸の坊主相手に役人上りのぼつちやんを差向けてやつてみたが、是も案の定思ふ樣には行かなかつた。

要するに侯は親分子分の關係に於ては、全く古の長脇差流の義理堅い所がある。讀んで字の如く殆んど親子に近い關係に迄進むで行く。此點は大隈伯とは大に違ふ所である。侯の親友には井上の乾兒が多い。自分達の親分の考で僕が貧乏して逆境に立ちて居る時に大隈に相談せよと連りに勸めたが、一身上の事等に就ては大隈伯に相談したつて駄目である。大隈伯には毛頭親分子分の關係がないからである。とに角井上侯の子分となつた人は屹度幸福である。侯は情に脆い。涙に弱い。非常に感情に激しい所がある。随分涙を出して人の爲めに泣いてやる。その代り反對に憎む事になれば、これ亦決して人後に落ちない。骨を削り髓を喰ふ

所迄行く人てある。悠々として明治も今年て四十四年となつた。侯は一度び政界を退いて終に今日政界の人てない。一旦財界を脱して又仕年の意氣もない。これが侯の過去てあつた。而して殘念ながら將來のない人てある。否侯の血の通ふて居る間は三井藤田鴻池の御直參は申すに及ばず、南滿鐵道や九州の炭坑業、臺灣の製糖近くは北海道炭坑汽船會社等孰れも侯の一擧手一投足によりて動かざるはなからう。實業界に於て樂に金を贏けようと思召ものは、內田山に御參詣あるべし。必ず多少の御利益疑なし。只我等の如き生中頑愚にして覇氣あるものは企て及ばぬ所てある。

△昔の井上侯

南　鵲

賚性最も辛厲酷烈を極むる井上世外侯は、溫厚頑執な山縣公、多才敏銳な故伊藤公と、三角の一頂に位して、所謂長州三尊の一人だ。實に、渠は長州最後の三尊の一人て、最も割の悪い籤を抽いてる。謂はゞ它の二尊に比して、其の餘ある實力に副はぬ不平の境にある人、少くも其境を煩悶し續けて來た人だ。明治維新の風雲に對し、最初の長州三尊は久坂玄瑞、福原越後、高杉晋作て、中頃の三尊は高杉晋作、大村益二郎、木戸準一郎てあつた。而して渠は最も高杉晋作の性質に酷似して、苛烈な意思を有してる。

高杉晋作の名辭は即ち、反抗、背行、自主を意味してる。渠は、實に自己を中心にしての大圖を描くに努め、眼中に一切を有して居らぬ。

總評して謂へば、渠は謀叛の人だ。滿身の血熱沸し、滿身の氣炎上して、渠は、一瞬の安靜にも耐えず、自ら投じて、謀叛を敢てする。其謀叛の主幹となり得るあらば、渠は、一切を睹して顧みず、事の成否は意とするなく、猪突猛進、縱橫の術策を劃するのである。

木戸孝允は、西南の役前、大久保利通と一日座談の際、時代の俊士を評し、井上馨に至り、曰く、如何なる場合に在りても、飯を喰ひ得る者は只井上一人、如何なる社會に投じても、相當の地位を保つ者は唯渠一人、眞に時潮の人、世の奴隷とならず、自己の流域、自己の乾坤を作り得る英雄の資を具ふる者は渠孤一人と。

靜觀靜聽せる大久保は、我痛く井上の爲に惜む、渠

は、熱氣酷しきに拘らず、情に乏しく、辛刻なるに關せず、理に強く、豪膽なるに係らず、利を爭ひ、放漫なるに干らず、黨仝を好み、策を弄ぶに反し、客を容れず、事を企つるに過ぎて、倨慢である。此矛盾の故に、渠は敵を作ること多く、就す事は尠し、要するに渠の性質を作る分子が互に調和を缺くの一事大なる遺憾であると。

井上侯の一生を通じての評は恐らく斯二人の言に悉してると自分は察する。

過去の生涯の上から、渠は、最も藩閥に逆ふた藩閥の兒、最も民權を壓迫して商財の威を輝すに努力した人てある。渠は、毎に功績を説かれず、醜を冠さるゝ不平の人、世評と本心と乖反甚しく、常に憤恚を抱く人、寧ろ自分は、渠の志を尊敬して、渠の境に同情を表する。氣の毒千萬だ。渠は天下に殆んど一人の味方を心から有して居らぬ。仇讐環繞の中に動いてる。渠の黨、渠の派、其の權威、其の地位に、畏怖し、阿媚し、屈從する卑怯の者のみてある。渠は寧ろ孤立の豪と快とを悦び甘んじてる。事蹟を以て、褒貶の是非を受くるは、渠の斷じて却くる所、所謂男子中の男子とは渠の自任だ。今日、明治英雄の中で、如何なる渦潮に投じても、一歩も讓らず、一寸も枉げない自信力を有してる者は恐らく渠一人てかなあらう。

渠は極端に世の總てを敵として鬪ふの主義を持してる、曾て恩も、情も、誼も何かあらう、世の中は敵同士の果し合ひだ、親しむとか、狎れるとか、扶け合ふとかは婦女子の哲學で、男子には父も子もないものだ、愛婿都築男に激烈な處世原則を授けたことがあるが、それが最もよく其の性を顯示してる。

明治史に表るゝ渠に就きては、幾多の名士が批評さるゝてあらう。維新前の渠に就き、自分の知れる智識を渠に關する總評に附加して紹介しやう。

渠は、毛利藩中、伊藤、井上犬の糞、尙も多いのは兒玉、内藤と俗説さるゝ多き井上姓の中の極微祿の士家の次男て、家は水車の井上と云はれた家の分家て、片桶悴と嘲られて、悲しい、慘しい生活に生育したが、時代の要求は、渠を永久に小侍で終らしめず、俄かに英名あるものたらしめた。

佐幕、尊王の論海内に沸湧した時、所謂次男坊て、藩中に於て、何等の地位を有しなかつた渠は、突然檄を士家の二三男に傳えて、長男をして家名を保持せしめ、吾々が世に盡す時代が來た。西陲の一角に我藩の

蹶起すべき時、其藩の運命を左右するは一に吾々二三男だと。何等の前顯示ない渠は忽ちに名を知らるゝ者、壯夫の隊長と囑され、將來を恐れらるゝ人となつた。而も、渠は、先輩が、學に勸めよと說くも從はず、兵を研はめよと說くも容かず、學も、兵も泰平時代の消閑具、亂麻の今日、何の追あつて、斯ゝる無用の術を修めやう。吾に氣あり、膽あり、志あり、略あり、何人にも讓る所がないと壯語した。實に暴亂の巨魁、渠は、口に破壞を叫んて、血に渴して、只管に革命の迅急に到るを冀望した。急げ、急げ、短き生命に爲すべき事業は多しとは、實に當時渠の動ける精神てあつた。て、渠は、水滸傳を愛讀する時代壯士の首班となつて、何等の修養なきにも拘らず、山縣狂介以上の地位を保つ人になつた。

狂暴、嬰を奪はれた乳虎の如う、過激てあつた渠は、一日、藩老宍戸、福原の鑑る所となり、議政席に召出され、時勢に對する意見を徵された。渠は、

『佐幕も、勤王攘夷も、開國も、問題てござらぬ。吾の採るべき方針は如何に毛利藩を大ならしむべきかて、單純に云へは、德川幕府に代る毛利幕府建設の一擧てござる。』

是の破題は宍戸國老の耳を傾くる所となつた。而して、

『斯一條て、吾藩の決心は定つてござる。が、因循な俗論派は史乘の命令を知らぬ。抑も我藩は德川幕府に何の恩誼も受けとらぬ、譜代の臣てなし、知行を得たのてなし、當方から知行を持つて、先方の客となつたのて……。』

と渠は簡明に藩心の不定を結斷した。福原越後は成程と首肯した。渠は直に扶持を與えられて、士分取立の榮を得た。

『其の身分になつたのだから、少し品行を愼しまなけやならぬ。』

其亂蕩を諫むる知人があると、渠は、

『莫加云ふな、家老に看出された上は、殿樣のお眼、其上は列藩に、それから天朝に我を認められなけやならぬ。我は狂激の急先鋒て世に立つのだ。』

と毫も其行を改悛しなかつた。

所謂壯士の隊長て、而も系統、修養のない渠は、部下に引率すべき隊を有せず、長脇差の渡り親分格て、彼の黨、是の派の客となつて、將位に重きを爲した。渠は、氣慨のある隊長て、意熱し氣昂るや、身分も、

地位も見界なく、國老の邸にても、重役の宅にても、單身出頭し、刀鋏を叩きつゝ、激急に論辨し、座て左右の結を迫るを慣として居た。

福原越後の命令て、渠は、時勢を知るべく、東京に定府勤となつた。が、例の狂徒魁て、品川御殿山の公使館燒打の巨首となり、所謂長州征伐の種子を蒔いた。當時の變に際して、渠は、激語を放ち、厲聲を叫んで、躊躇逡巡して居た故伊藤等を鞭打し、了に是擧を遂げた。

當時、渠は、只管に破壞を要求し、爲に同志を售り、親を滅すも敢て辭しなかつた。卽ち、今日にも仍ほ其俤を存じてゐるが、目的の爲に手段を擇ばぬ人である。時に、黨の元首高杉晋作が、溫和の說を唱えて、暫らく藩の保育に注念しなけやならぬと云ふや、渠は、高杉斬殺を稱え、了に渠をして山口を逃げ、馬關に訖り、奇兵隊募集に着手せしむるに至らしめた。

爾時の事。

渠の狂暴なる跳梁を憎む兒玉愛二郎は、渠の下城を待伏せ、暗撃に、渠を滅多斬に殺盡し去つた。虫の呼吸てあつた渠は、家兄の救ふ所となり、夜に乘じ、漁船て、馬關に逸走し、町醫者石田梅逸に投じた。石田は、抗慨の處士、渠を迎えはしたが、人の出入多きを厭れ、病井上を馬關の町年寄、入江和作に托した。入江和作は、意氣の士、長藩勤王派の金主で、當時高杉晋作を宿し、奇兵隊募集に着手して居た。而して、高杉、井上の反目をも知つて居たが、傷井上の來れるを聽き、宜しいと、石田に承諾を與え、井上を土藏に陰(かく)まい、高杉に秘して、治療を施した。致死の負傷した井上は、懊惱苦呻、聲土藏の外に洩漏し、了に高杉の知る所となり、突急に高杉は、土藏に走込んだ。入江は、「看破された！」と叫び、大手を擴げて、高杉を沮んだ。

『井上ッ』

と高杉は叫んだ。

『ウム、殺れッ、殘念！』

と臥蓐、苦悶、譫語しつゝありし井上は、高杉に叫び覺され、床に起上り、身構して、高杉を睨んだ。高杉は、突と走寄り、井上の手を握り占め、

『井上、何を云ふ。敵は誰だッ。氣を確にしろ、落膽するな。』

二人は、流涙の眼て相語りて、恩怨を忘却して、高杉は井上の療養に苦心した。而して、

『惡い奴だが、殺されぬ代物。井上の代りは再び生れ

ない。』

と渠を惜しんだ。

意を凝した看護と、氣に勝つた勇猛とは、自他兩面より、死せる井上は甦つて、傷痍八分癒えた。高杉の策で、井上は、馬關稻荷町の藝妓、力松を身請し、相携えて、別府溫泉に湯治し、世を忍ぶ假言を爲し「有夫姦を侵し、本夫の爲に斬られた。其後療治に來た」のだと稱した。妓力松は、質黠狡、湯治中、情夫をこしらえ、井上を捨てゝ、情夫と蹤跡逃走し、後小倉で料理店を開いた。其時、力松は、『何うせ、有夫姦の相手させられ、狂言とは云へ、碌でない名を負ふたのです、爲ぬ前から、奸婦になつたのだ故、男を作えて、井上を寢返したのに、誰も愚痴文句を仰言るまい。』

是一場奇喜劇あつて以來、井上は、長藩尊王派青年中、一方の伯を稱して、隱然首領の槪を示して居た。當時、一般の人心が小心偏狹、猜忌に富んで居たに關せず、井上は開放主義を持し、敵も味方もなく、一目的の下に諸性を糾合しやうとした。併しそれは時勢に進み過ぎた說てあつた。爲に、渠は、山尾、伊藤等と洋行する運になつたのだ。

洋行は、極端な攘夷黨の井上をして、眞面目な開國派たらしめた。

自躰、井上は、餘りに開明、開放であるが爲に、最初は藩中で多く敵を作り、後は天下の敵を招くに至つた。世間と、自己の心と合致しないのに、渠は憤怒し過ぎて、每に遂に世を咒ふ風になり、自己本位の自尊主義を信じ、實に烈辛な惡名を蒙むるに至つた。大に悲しむべきてある。要するに、人心を收攬する術に暗いが、英雄の素は確に有してる。古に例を取らは、渠は、伊藤の劉備、山縣の孫權に對して、曹操であらう。

明治元年、各藩の徵士中、渠は、極端なる親政論を唱えて、列藩を愕した。爾來、渠は明治政府に重要の人となつた。

渠を扶けた高杉晋作は、

『最も情誼に篤いが、無理にそれを隱して、零す泪を抑えて、冷淡な、薄情な風をして見せるのが井上の惡癖だ。渠は、英雄に情なしと云ふて、殊更に繕ふ。その爲に、人からは怨まれる、背かれる。渠は、その心中に入らぬ世を怒る、激する。表面が秋て、心中春とは渠だ。』

と評して、渠を辯護してた。自分も爾く信ずる。

誤解する勿れ、自分は渠の暗き罪を認めぬて無い。

明治英雄で、暗惨な血史の秘相を有して居らぬ者は一人もない、犯罪者豈一人渠のみならんやだ。自分は誤解されたる渠を愍むものである。

△井上侯爵論

法學博士　戸水寛人

井上さんの事蹟については私はよく知らない。又まだお目に懸つた事もない。唯私は小供の時分から政治家の閲歴や性格などを聞く事が好きて、井上さんの事も先輩から聞傳へたり又は講談や何かていろ〳〵耳にした事はある。然しそれが果して當を得て居るや否やは私の保證する處てない。

何ても井上といふ人は、元、井上とはいはなかつた。志路聞多といつた。御維新前に於ても志士の間に奔走して夙に名を知れて居つた。伊藤公などと共に早く洋行し、其時分から才幹のあつた人てあるとは人が皆知つて居る。さういふ人てあるからして、維新の業成つてから後も朝廷から重く用ひられて居つた。けれ共其時分は私はホンの子供てあつたが、何ても大久保公の爲に斥けられて居つたと聞いて居る。何故といふに才幹が餘りあつて行中正にあらざる爲めだといふ。大久保公の眼から見たらば或はさうてあつたかも知れんといふ想像も出來る。當時大久保の勢力は隆々たるものて何人も之に對抗し得ない。伊藤公と雖も固より大久保に對して頭を上げ得るものてはなかつた。今の西園寺侯も最も大久保公に引立てられたのだが、同格になつて話する迄近いてゐなかつたらうと思ふ。其大久保公に井上はいかんといはるれば頭が上らなかつたものと想像する。然るに大久保が暗殺せられて後には、又井上侯が用ひらるゝ機會が生じて來た。即ち朝鮮との修交條約を機會として井上が用ひらるゝに至つた。明治政府は早くから朝鮮と修交條約を結ぶの意があつた。而し朝鮮には排外思想が盛んて、思ふ樣に出來ず、日本人は皆持て餘してゐた。然るに明治八年雲揚艦の事に關して黑田淸隆と井上と二人朝鮮に遣はされた。自分の記憶する所によれば黑田は正使て井上は副使てあつたやうに思ふ。黑田といふ人は膽力に於ては大いに人に秀てゝ居つたけれども、然し其才幹に於ては兎ても井上に及ばない。それで本當か嘘か知らないが、黑田は井上に信賴して何でも井上のいふ通りにして居

つたものらしい。是に於て井上は大いに其手腕を揮つてとう／＼朝鮮と修交條約を結んだ。それが明治九年てあつた。これまで明治政府が屢々失敗したのが、明治九年に至つて初めて成功した。そして其成功は一に井上の手腕に歸せざるを得なかつた。之によつて見ると、井上の手腕は當時の政治家中にあつては種類少いものであるので、伊藤公大隈伯を除いては恐らくは其右に出づるものがなかつたらうと思つて居る。

斯くの如く井上侯の履歴を撿すると、井上侯は才の人であつて德の人のやうには思はれない。が、其後の侯の爲した事柄を人から聞くと、井上侯は又德の人であることを發見した。私の德の人といふのは、些細の點まで道德家の標準に協ふことをいふのではない、小節に關しては人の批難を受けることもあらうけれども井上侯は大抵の人の出來ぬことをやる人だ。それは何てあるかといへば井上侯は義俠心に富んで居る。人が井上侯に賴んで侯が受合ふと何處までも世話を燒く、懇切到らざるなしといふ位だ。其代りに井上侯は其人の些細な臺所の世話までも燒く。何事も其命に從はせる。誠に妙な人だ。私の聞く所によると日下義雄の如きも其一人だといふ話だ。又井上侯は自分の藩公の爲めに非常に世話を燒く。毛利公の內政に對しては何人も井上侯程世話を燒く人がない。伊藤公は　陛下に御信任があり國の爲めに盡したが、主人の毛利家の世話を燒くことは遙かに井上侯に及ばなかつた。加之井上侯は自分の故鄕の學生の爲めに非常に骨を折つて居る。山口縣に於ては學生の爲めに世話を燒く團體が一つある。それは井上侯が起して居るやうに聞いて居る。今は存在して居らんけれども是迄山口縣の高等學校があつた。あれも井上侯の力によつて成立つて居つた。井上侯は山口縣に於ては實に缺くべからざる人物だ。今でも山口縣からは人才が出る。此點確かに他縣を凌駕して居る。これには種々の原因がある。其原因を說くに當つては足利の末の大內家の時代からも述べねばならんと思ふ位だが、然しながらそんなに古い事は別問題として、最近に於ては井上侯の後進を引立てることなどは主もなる原因といはなくてはならぬ。井上侯以前に吉田松陰あり、品川彌二郎あり、それ等の人の功も歿すべからずてあるが、二人の功に眩惑して井上侯の功を忘れてはならぬ。近頃井上侯は巨萬の富を積んで世間に顏出しをせぬ。それが爲めに、中には井上侯の惡口をいふ人もあるが、義俠心に富み、後進の爲

めに、毛利家の爲めにあの位力を盡すのは珍らしい事蹟である。之は實に萬人の手本としてもよい事と思ふ。

△井上侯論

田川大吉郎

明治の元老政治家に對しては、思想感情の異同を離れて私は相應の尊敬を拂つて居る。けれども井上侯は私が尊敬を拂ひ得ざる一人である。山縣公は武人として、武斷主義の政治家として其政策計畫に私は種々の異論を抱いて居る。然し其人格には相當の敬意を拂ひ又其事業の効績も人と共に之を推賞して居る。伊藤公は其生前と死後とに世上の褒貶が趣を變じた傾向がある。私は寧ろ其生前に行はれた優柔にして不斷、外、華美を裝うて、內、彌縫を事とする小心の政治家を慊らなく思ふ。けれども其多難の時機に際して、進歩保守衝突の間に誠實なる調和者となり且つ常に進歩主義の啓導に勸めた苦心の跡は、私は他人よりも敬重して居る。松方侯に至つては明治年間に於ける正直堅實なる政治家の一人である。何等の華麗絢爛なる事蹟はなかつたやうだけれども、常に欺かざる心を以て、成し得る限りの事をなした事は之を認めざるを得ない。從て又大いなる尊敬に値する。此間に於ける井上侯の生涯に至つては種々人目を聳てる事柄があつて其位置は元老の中の先進に位し、今日に於ても巨然たる功臣の雄であるけれども、それが明治の政治史の上に何等有用の貢献をしたか、私は稍々不明に思ふ。

私の聞いた井上侯の功績は藩籍奉還の主張である。近來の伊藤公の傳を讀めば、此事たる伊藤公の主唱に基いたやうになつて居るが、私は之を井上侯の主唱に基いたものと聞いて居る。あの時代の頃の形勢に鑑み、兩人の性格主張に照して考ふるに私は此事の提唱成就の間には井上侯の努力が伊藤公よりも多かつたのであらうと信ずる。果して然らば此一事大政治家の面目を發揮するに足る功業の一つである故に、唯此事丈けで以て男子の生涯を飾るに足るのである。されば此事あつたとすれば、井上侯は明治年間の大政治家の一人である。

處で私は不敏にして此事以外に、侯について侯の履歷を飾るべき善蹟を知らない。私を以て侯を窺へば、餘りに感情强い人で、我儘で、肝癪持て且つ公私の區

別のない人かと思ふ。此性格は立憲政治の敵である。立憲政治を進捗せんとするには努めて此等の性格或は其餘弊を矯めねばならぬ。井上侯に向て此性格を矯めよといふ事は無理な話である故に敢て之を望むのではないが、然し其性癖の我立憲政治に及ぼしたる餘殃は之を慨かざるを得ない。

私は私の立場から見て、井上侯に最も不服なる所以は此點である。此性格の公事に及ぼす第一の影響は無責任である。井上侯は其感情強い、我儘なる、性急なる性質の結果として隨分無責任なる振舞をして居る。其一つの例は西園寺內閣沒落の原因をなした財政計畫の破綻の時である。當時の事は今更ら繰返す迄もなく、阪谷藏相と山縣遞相との間に於ける財政計畫の不調に基き、阪谷藏相の計畫を不適當なりとして之を批難し破棄したるものは井上侯である。然し其井上侯は最初阪谷藏相の計畫に對しては同意を與へた一人である。私の聞く所若し誤らなければ阪谷藏相は井上侯の同意を求めて其承認の調印を得て居るとの事である。後日井上侯より批難せらるゝ場合に至つて先日巳に調印を經て居ると說明したら、先日の調印は盲判であつたと答へたといふ事である。自ら調印して自ら盲判だと抹殺して、元老としての責任は全く顧みない。而して感情の激する所遂に西園寺內閣を斃すに至つた。西園寺內閣の功過得失は之を措くとして斯くの如き我儘亂暴なる態度を恣にするのは今日の元老の中侯は其一人である。私は此等の性癖事情成行を國の爲めに甚だ不祥と思ふのである。それ丈け井上侯に感服することが出來ない。明治の初年侯が財政の將來を悲觀して澁澤男と共に痛切なる批難の書を公けにした事は中外の明かに知る所である、大隈伯が之に應じて起つて其財政を綜攬するに當つて之を善處する成算があつたか否かは知らぬが、結果から見れば大隈伯の唱へた所が國の實際に契合して居つて井上侯の憂慮した事が一片の杞憂に過ぎなかつた事が明かである。井上侯は此事實に對しても財政に對する主張は之を愼まなければならぬ。若し之を再びするに當つては、愼重の上にも愼重を加へ、前年の覆轍を履まぬやうにせねばならぬ。然るに明治四十年か四十一年に當つて、オセツカイにも財政計畫の調査を企てゝ、遂に明治四十三年末に至つては日本は破產の外なしと結論した。勿論其書は秘密の書である。私は之を讀破したとはいはぬ。それにしても其書は現存して居る。內閣にも、大藏省にも、各

省にも、民間の有力なる實業家の間にも其書は散布されて居る。之に對しても侯は相當の責任を負はねばならぬ。今や四十三年は經過した。四十四年の財政計畫も已に公けにされた。之を窺へば決して一點の曇なき堅實の狀態であるとはいへぬけれども、侯の憂慮した破產の悲境にあるとも思はれない。井上侯は我豫言の當らざりしを自家の不面目と思ふよりも國家の慶事として祝して居るであらう。さりながら敢て此重大の豫言を試みて內外に不安危懼の念を與へたる經過に對しては侯自ら負ふべき至大の責任を有して居る。公人としての自殺である。元老としての資格の失墜であらう。最早や政治に容喙すべき面目も本領も資質もない事は明瞭であるといはねばならぬ。然しながら彼は尙恬然として恥色なく、國家の公事に容喙し批評し、一事の意に慊はざるものあれば、忽ち暴言を閣臣にも加へて其所癖を恣まにして居る。此等が私の侯に服する能はざる第二の論點である。

侯の性格は甚だ果敢猛烈で此點に於ては蓋し明治の元老中第一人であらう。伊藤公が相印を佩びて百揆を統率するに往々不斷優柔の嫌あつた場合には井上侯の性格を以て補助し激勵したのは少からぬ公益でもあつたらう。今伊藤公已に去つて井上侯獨り國事に與るのは尙悍婆の其威を挾んで若き嫁いぢりをする嫌ひがある。幸とする所は侯の國事に當つた時代と、今日との間に、國政の位置、財政の標準が一大變化を來して居るが爲めに、今日の大臣等が公の前に惴々焉たりというても侯の指導の及ばざる所がある其一點である。私は今日の老人中に早く退隱して吳ればよいと思ふものが幾人もある。政府の中にもある。政黨中にも頗る多い。實業家中にもある。此間に井上侯が早く其平生の主張通り、見ざる、聞かざる、言はざる位置に立たんことを願ふ。今日に當り井上侯の終りを美にする所以を求むれば此點より外はない。井上侯にして若し自ら改めず、依然として其干涉を續けんとならば、假令其れは閣臣閥族の內輪の事なりとしても天下の井上侯に對する怨は益々深くなるであらう。

△井上侯の性格

中村彌六

井上侯に關して、批評なり何なり知つて居ることに

就いて、話すことにしやうが、記事の種になるか如何か知らん。

井上侯は、社會では善惡二方面の評がある、私も最初の中は、一部世人の噂する如く、惡い事する人と考へて居つた。近年に至りつら〳〵侯の爲した跡を視、且其性質から割出して視るに、そんなに惡い人でない、寧ろ正直過ぎる人だ。一口で言へば、侯は非常に事に熱中して是非とも貫くと云ふ性質を有つて居る上に我儘だから事に當ると、つまり或程度を越える、越えるから人に有ては偏頗に陷り事に有ては惡いことになる親切心も餘り物事に深入りして進み過ぎると、所謂『過ぎたるは猶及ばざるが如し』で善意を以て爲た事までが却つて恨を買ふ事となる、時として人には惡しき事と感ぜしむるに至るものだ。私は侯に就いては、斯ういふ考を有つて居る。侯は決して惡い人ではない、偶ま惡く言はるゝのは前に言つた如く餘り物事に深入し過ぎる結果である。

斯ういふ人であるから種々の方面から即ち表面からも裏面からも觀察して、批評がなか〳〵澤山ある人だらうと思ふ。それ故侯に就いては私は想像でなく、實際視或は聞いた事の一、二を話して見やう。

私が侯を初めて知つたのは、私の農商務省の書記官を爲て居つた時代、即ち明治二十三年前で、政府が議會開會の準備に忙しい時分だ當時井上侯は農商務卿で山林調査會が出來、私共も其委員と爲つて御料の森林を作ること等を定めたが、確か其前後と思つたが、一日私を官房に呼で鑛山備林の必要を滔々と論じられた揚句、私に其備林に就いて意見を書けと命ぜられた、當時某々鑛山を所有する富豪が官林を其備林に拂下せんと密々運動して居た時だから來たなと感付き、で私は只今閣下がお話になつた事を書くのですが、或は私の意見を書くのですかと、尋ねたら、侯は君の意見を書いて見よと言はれる、唯々と命を奉じて見たもの、自分には侯の意見とは、丸で正反對の意見を有つて居つたのである、歐洲諸國で官林を割つて鑛山備林を設けたる弊害を列擧して之が廢止後自由競爭に依りて鑛業の進歩發達した事を書て呈した、すると侯は見る々々顏色變り、言葉荒らかに、是が君の意見か、鑛山備林は惡いと云ふのだな、左樣ですと答ふると、餘程癇癪が起つたものと見へ、それでは宜しい君には用が無いと大喝一聲を喰はされた、それで當時の局長に向つて、長官が用がないと言はるゝ上は私は止めましやうと申

出たけれど、そんな短氣を起さずに居れと言つたから仕方なく遊びなりに務めたことがある。

其後自分は間もなく、上州磯邊溫泉に湯治に行つたが恰も井上侯が、別莊に來られたから、私は自分の長官でもあるし、と思つて伺候して見た。すると侯は私を座敷へ通して置て横向になつて手紙を書いて居つて一向私には挨拶もせぬ、振り向もせぬ。併も尻を向けて平氣に澄し込んで居る、私は折角訪ねて來たのに、この態度を示すとは餘り無禮だと思ひ乍ら正坐して侯を睨んだまゝや、一時間も居つた揚句默つて歸つて來た。其後何年頃で有たか井上侯が内務大臣となられた時分私が民黨の急先鋒をやつた頃友人伊藤彌次郎を介して私に逢ひたいと申した事があつた、そこで侯の邸へ行くのはいやだ料理屋かどこかでなら會見しましよと返事した。夫は先年の復讎に今度はこちらで物を言はずに一時間でも二時間でも手紙を書いて居ろふと云ふ考へて待て居たが遂に逢はなくて仕舞た。

侯は非常に自信力の強い人だ。故に自分の考へた事は公私の差別なく、氣に入れば宜しいが少しでもその氣に叶はぬなら、何と言つたつて肯かない、つまり何事でも極端に行くのである、從て弊害が起つて來るから、此點に於て一般世上の批難の起るを免れないのである。斯う言ふ癖があるから、其癖に乘じて侯は人から利用さるゝのである、侯の門に出入さする者は此の呼吸を飮込み皆侯の意を迎へる者ばかりである、從つて侯の惡い癖を益々增長せしめつゝあるのである。又侯をして益々其短を短ならしめつゝあるのである、現今彼の門に出入する者にして眞に侯に忠實なる者幾人か有る。私は井上侯を以て非常に偉い人とは思つて居ない、然し侯は人の爲には親切て、その親切と來たら肉身も及ばぬ程盡して居る、その眞心から出た情愛には敬服せざるを得ない。侯の人に對する親切と言へば、一度賴まれて一度可しと請合つた時には、肉身も及ばぬ情を以つて、精一杯に盡して呉れる相である、勿論その時は自己の利害などには頓着しないのである。此點は此頃人情の日に益々輕薄に流れ行く點から見て、實に稀に見るの人物と推さねばならぬ。

更に精力の旺盛なことゝいつては、なか／＼老體に似合はぬほどて、壯者がとても及ばない事がある、先年興津で大患に罹つたが即ちその前日まで、海水に浴びて居つたと聞く、それは決して侯が他を倣うて、故意にやるのてはない事は明かてある、昨年てあつた、

桂首相に會うべき約束をした前日より劇しき下痢に罹りたるに拘らず桂首相を訪問されたそうだ。應接中にもぴち／＼粗々をし、紛る丶方なく惡臭鼻を衝くのに、其足で自宅には歸らず、其儘赤坂の三河屋へ上り、藝者を相手に酒を呷つて居る、上の口から酒が入る下の穴から絶へず黄金の汁が出ると云ふ有り難き珍客で有つたそふな。前日から侯の腸の惡いのを知つて居る家人は何時まで經ても侯の歸つて來ないのに、氣を揉み出し、桂邸に聞けど居らず八方探して漸く三河屋に居るとの事を知りて是はとばかり大に吃驚したが、三河屋へ迎へを出した所で中々歸つて來る筈なし、と一計を案じ杉子爵に頼んで三河屋に行き偶然落合つた體に粧ひ、漸くのことで家に連れて歸つて貰つたそふな、話によるとその三日の間に百六回の下痢を爲たのだとのことである、或人が病氣と聞いて怖々御見舞に行つて侯の寢所を訪うて見ると、布團は藻抜けの殼で姿は更に見當らない、さて變だと思つて、四邊を見廻すと、庭の隅で雜草を摘むで居たそうな而かもそれは夏のことて赫々と照る炎天に晒されての事だと云ふ三日間に百六回の下痢をした七十以上の老人の所業とは思はれまい、實に驚かざるを得ない、それも侯の倣うてする事ではないから、とても常人には能くする能はざる所である。一口に言つたならば、衞生とか言ふことには何等の觀念も智識もない、糞を垂れながら三河屋で酒宴をなすなどに至つては、常情を以て言へば、只狂氣の沙汰である、がその我慢の強き氣力の旺盛なる點が、即ち侯の特有で大に買ふべき所である、つまりこの旺盛なる氣力。それが彼の今猶ほ大刀痕を顔面に留むる大負傷を受ながら死より免かれしめた事であらう話は變るが此頃侯の銅像が、興津の庭園内に立ち遥に大平洋を俯瞰して居るさうだが、此は地を卜して其所を得ないと思ふ、私が東京の一市民と言ふ見地からして、撰んだなら新橋橋頭を以て最も好適の地とす可しと思ふ、聞く今度日本橋々頭には家康及び道灌の像を置くと、侯の銅像は正に新橋々頭が最適當の場所ではなからうか、といふのは日本で一番初めの鐵道は新橋横濱間である。帝都に於ける最初の停車場は新橋である。此の鐵道を敷くに至りたるは實に侯の力である、當時朝野共にそれを以て不必要として且財政上よりしても非常に反對があつた、が侯は斷々乎として所信を遂行し、遂に今日あるに至らしめた。

又俗に言ふ銀座通り、微々たる煉瓦構造家屋だが當

時まだ文物の何たるを知らぬ人をして先づ耳目を一新せしめ徐々文明に導くに於て至大の力を有したのであるがこれも亦井上侯の主唱によるのである、確か明治五年て鍛冶橋御門内であつたと思ふ、舊會津の邸から火を失し築地まで焼き拂つたが、其時その跡に市區改正を行ひ碁盤目の樣に道路を整理し且建築の構造をば全然歐洲風にせんと、主唱して止まなかつたのは侯てあつたが、當時島津久光公などが居り、まだ結髪して駕籠て乘廻つた時代なものだから、日本には日本傳來の家屋がある、そんな莫大な眞似はするに當らんなどの說が出て、端なく其處に保守派とハイカラ派との大衝突が起つたのである、それを故伊藤公の仲裁て島津公と井上侯との主張を各々一部づゝ容れ、つまり兩者の折衷て出來たのが現在の銀座てある。此の事實は親しく故伊藤公から聞いたことがあるが、當時を追懐して左もあつたらうと思ふ。若しも井上侯の主張を全部容れてやらせたならば、今日の市區改正の範圍も狹くなつたてあらうと想ふ、今日の文明を最初形以下より輸入し鎖國の迷夢を覺醒したる侯の功勞は尠くない。それ故若し井上侯の銅像を建てるならば、鐵道と云ひ銀座通りと云ひ侯に對する好紀念物故私は正に地を京橋々頭にトすべきだと思ふ、侯は何にせよ閲歷の長い人てあるから凡て維新のことから其他今日までを通觀したなら、非常に逸事もあることゝ思ふ。

兎に角侯は齡を累ぬるに從つて益々我が儘になるべく、頑固になるべき事は明かてある。

我が儘な事は侯の持つて生れた病てあるから仕方がない、而かも此性癖あるによつて、侯の門に出入する者は益々侯の短所を利用すべく工夫して行く事てある。侯たるもの此等輕薄人士に向ひ須く眉に唾して戒心一番すべきてあらう。私は侯の百年の壽を保つと共に、其我儘に、自分を保つ上に注意して今少し自制の道に出らるゝが宜からうと思ふ。どふてす此が雜誌の記事の用になりますか……。

△井上侯爵について

△△△△

井上侯の評をしろといふお話だけれとも、元來私共の考ては、元老の時代は夙うの昔に過ぎ去つて、今は殆んどない。元老の中死んだ人もあり、未だ生きて居

る人もあるが、生きて居る人でも、唯生存して居る丈けだと思ふ。元老はいはゞ國の名物である。其昔の事を論ずれば、國の爲めにも盡し、いろ〳〵やつた事もあるでせう。其中には或は國の爲めになつた事もあり、或はならぬ事もあつたらうけれど、要するに前世紀の事で、今日では殆んど死んだ人も同様だ、そんな元老を持出してどうとか斯うとか論じても詰らん事と思ふ。のみならず又幾らかの害があると思ふ。といふのは今では元老が老ぼれて前世紀の人だと大抵思つて居る。其處へ持つて來て元老はどうだとか斯うだとかいふと、元老といふものが又幾らか世間に勢力のあるものゝやうに誤解させ、又論ぜらるゝ當人も其氣になり兼ねない。要するに害あつて益なしと思ふ。だから私共は元老についていひたくない。若しいへば今では何にもない人、前世紀の人だといふより外はない。

　世間では井上侯を私利一遍の人だなどゝ惡口をいふものが多いやうだが、私共はさうでないと思ふ。なか〳〵俠骨に富んだ人と思ふ。伊藤井上といふが、伊藤公は圓轉滑脫で、それで大政治家といはれるけれども、井上侯は始終不遇で、得意の事が殆んどなく、世間からは私利利慾ばかり計る奸物といはれて來た。然し若し批難者に向て事實を擧げて見よといつたら、そんな事實は餘り無からうと思ふ。寧ろ義俠心に富んだ面白い人だと思ふ。又思ひ立つた事は前後を顧みずして何處までやらうといふ氣慨がある。その爲めに失敗して居るけれども寧ろ面白い所がある。伊藤公の如く八方美人でなく、山縣公の如くシンネリムッチリでない。愛すべくして憎むべきを見ない。矢張り元老としては一個の人物だと思ふ。只世間では金の事に汚ないといふ。又今日でも富豪と關係あるといふが、明治の元勳中さうでない人が澤山あるか。伊藤公はあれ位金のかゝつた人だが、その金は何處から引出したか分らぬけれど、帝室あたりから補助を受けたといはれる。山縣公は何處からか知らんが、矢張り金がある。松方侯もさうだ。大隈伯も兎に角あれ丈けの暮しをする金がある。成程井上侯は富豪の關係がある。そしてそれは三井といふ事が分つて居る。外の人のは分らぬけれども井上侯のゝは分つて居る。寧ろ淡泊だからと思ふ。そして今日に於ても世間に親切に世話をするのは老耄れたとはいふものゝ未だいくらか當年の氣慨が殘つて居る。元勳中では確かに一個の人物である。唯要するに今日はもう過去の人であるから眞面目に批評するの

はよくなからうと思ふ。後世の歴史家が歴史上から之を論評するのはよいが、未だ世間に元勳や元老の勢力を暗々裏にホノメカシテ之を利用せんとするものゝある時代には、元老の話などはせずに、國の名物としてソッと保存して置いた方がよからうと思ふ。

△井上侯の逸話

福本日南

△井上の惡るい事をいへば數限りなくあるが、又なか〳〵面白い事もある。日露戰爭がいよ〳〵初まらうとする時、御前會議が開かれた。其時伊藤は財政を危んで、戰爭を避けることが出來やうかどうだらうといひ出した。すると井上は怒つて、何だ今頃になつてそんな事をいつてどうする。どうしたつて戰爭はやらなくてはならぬ。財政は大丈夫だ！　此井上が請度引受ける！　とやつたので、いよ〳〵戰爭と一決したといふ事である。御維新前に德川征伐と廟議の決する時に西鄕、大久保、木戸、廣澤、小松の五人が召された。そして御下問に應じて西鄕は大丈夫で御座る。お引受申すとやつたのでいよ〳〵幕府征討と決した。其時五人の連中が御前を引下ると、他の四人は西鄕を圍んで、オイ君が引受けたが成算があるのかと問ひ詰めた。處が西鄕がいふには、成算あるもないも今になつてお引受け申さぬといふことがあるものか、吾々が今迄の難儀は皆こゝまで漕ぎつける爲めではないかと答へた相だ。これと一寸似た趣がある。

△井上が毛利家に勢力を揮つて居ることは素張らしいもので、後に元德公といはれた先代の定弘公が何か御用があつて家扶か家令を召される「從一位樣の御召しだよ」と溜りの間か何かに聲が掛ると「只今」といつた切りでなか〳〵起たない。又「從一位樣の御召しだよ」と聲が掛る。又「只今」といつて起たない。此「只今」が三遍位繰り返されてから初めてノッソリ〳〵と出て行つて御用を伺ふ。處が「井上伯のお召しだよ」といふ聲が聞ゆるや否や「ハイ！」といふが早いか慌てゝ起つて御用を伺ふ。若し井上伯のお聲掛りがあるのにウッカリでもしてゐやうものなら、目の前で直ぐ退役仰せつけるからである。

△井上は毛利家の爲めには隨分なつた男で、財産も井上の手で殖やしたらしが、而し井上の所持して居る公

債や何かは皆毛利家の名に書き代へてあつて其所得税や何かは毛利家から拂はせるといふづるい事もして居る男である。

△百三十銀行問題などに對する井上のやり方といふものは實に酷い。泣きつかれると、よし己れが引受けるといふやうな調子て、安田善次郎を召して、貴様よく整理をしろといふやうな事を命じた。銀行潰し屋の名人安田は到底も私に出來ませんといふやうな事をいふ。是非やれといふ。然らば六百五十萬圓？　を無利子て二十箇年返賦て御貸し下さらば拙者お引受け申さうといふ事になる。そして時の藏相曾根か誰かに命じて六百五十萬圓？　を無利子て二十箇年返賦てやらせる。實に無法な話て、何ても六百五十萬圓を無利子て二十箇年返賦て借りて、之を貸附けて居ると、二十箇年後は元金の六百五十萬圓？　はそつくり其儘貰かることになるさうだ。當時殆んど國賊呼ばはりをされたのも無理のない事だ。

△井上は實に我儘な慾張りな奴て、殊に骨董品と來たら他人のものでもずんずん取り上げる。井上には今、開くことの出來ない倉が一つある。それは大和とか奈良とかの寺院社殿の寶物や本尊を持て來て居るのて、其取られた寺院や社殿ては厨子の陰に贋物を代りに置く所が隨分あると聞いて居る。

△井上の世話好きは有名なものだが、先生世話をすると息子や娘の縁談などは無論の事味噌醤油の果てまでに干渉する。これについて面白い話がある。品川彌二郎が貧乏をして居る頃、井上が氣の毒だといふので、都筑馨六を使にして、品川の處へ何處かへ世話しやうといつて來た。處が品川は手を横に振つて眞平御免だ、どんなに貧乏をしても、あの井上の老爺に世話せらるゝよりは増しだと。それから井上は怒つて品川に世話しない。

△井上の氣嫌を損つた奴は皆井上の爲めに必らず酷い目に逢ふ。玆に唯一人の例外は白根專一だ。あれが農商務の下役をして居る時に、井上が農商務大臣て、盛んに小さな官林を拂下げた。其理由は小さな官林を所々に有つて居るのは林の性質上其管理に費用がかゝつて損だ。それよりも小さなものを賣つて、大きなものを少し有つて居つた方がよいといふのである。其説はよい。而し拂下げる小官林の値は、ロハも同樣だ。そこて白根は井上長官の前に出て、大いに其不可なるを痛論した。井上は怒るまい事か、顏が眞赤になつて啖

鳴りつけた。て同僚のものが、ハヽア白根はやられる！　といつて笑つて居ると、暫らくじつとしてゐた井上は何を思つたか「白根はあんな下役に置くに惜しい奴だ！」といつて直ちに某縣の知事にした。

」井上の事について話せば幾らでもあるが、其二つ三つをお話しして御免蒙ることにする。いゝ加減に書いて置て呉れ玉へ。

△井上侯の性行一班

伊藤痴遊

私の見る所では井上侯の一生を通じて、其前半生と後半生とは全く別人のやうな感じがある。維新前の井上侯は誠に名利の念に淡い人て、眞に武人的の氣風が餘程あつた。維新後の井上侯はどうも常に金錢の問題などについて面白くない事が往々ある。自らは信じて疚しくないとしても外から見て批難さるゝことが往々ある。尾去澤の銅山事件、或は百三十銀行の問題などが其一二の例てある。けれども又辯護していへば、それは世話好きの結果てあるともいへるが、然し世話好きの爲めに常規を破つて世間の批難を受ける程に至るのは愼むべきことと思ふ。維新前は同じ世話好きでも常に名利に離れて行つて居る趣がある。これが私の井上侯に對する大體の見方てある。侯の公人としての批評については諸大家の意見も澤山あらうと思ふから、私は主として維新前の侯の履歴をお話し、以て侯の性行の一班を示したいと思ふ。

全體井上といふ家は毛利藩の御譜代てある。家は三百石の小身てあるが、家格がよい爲めになか／＼幅が利いた家柄だ。武家時代には總て相續人に非常の特權があつて次男以下は廢物同樣の取扱を受けた。井上侯は次男に生れた爲めに隨分つらい境遇にあつた。所謂聞多といふた時代てある。それてすから文久の頃志路といふ家に養子に行つた。處が井上家の相續人たる幾太郎は早死をした。それは今の伊藤公や井上勝之助さんのお父さんてある。それて伊藤家と井上家とは眞の親戚となつて居るのてある。

攘夷黨時代の井上は實に燃ゆるやうな情熱を持つてゐた男て、而かも其燃ゆるやうな情熱の中に、非常に冷かな、氷の如き理性——靜かに前途を考へる丈けの餘裕を持つてゐた。死生の間に此氷の如き冷かな判

斷力を失はなかつたといふ事が彼をして同輩に傑出せしめた所以と思ふ。其一例を擧げると品川の御殿山燒打事件——時は文久二年十二月十二日、高杉晋作、久坂玄瑞、山尾陽三、伊藤俊輔、大和彌一郎等の人々十二名、其十二名の一人に加つて御殿山燒打事件を決行した。當時の幕府の老中は安藤對馬守、この人は幕末の政治家中屈指の人傑と私は信ずる。若し阪下見附の事變に頭を切られたならば掃除頭以上の人物とせられたに違ひないと思ふ、只負傷した丈けであつたから世間では餘り知らない。井伊は只開國條約に判を捺した丈け、大勢上判を捺さねばならぬのを捺した丈けだから餘り大した事件でない。對馬守は攘夷熱の盛んな時に幕府の公金三萬圓を以て御殿山に各國公使館を造營した。英吉利の公使館は巳に落成して、其年明くれば、公使オールコックが移轉する準備が整うて居つた。其當時井上などの議論といふものは、攘夷の勅が海岸に沿ふ公卿二十四家に對して降つた。これは毛利家が率先して主唱した爲めてある。然るに攘夷の勅を受けても毛利家は何等の實行もせぬ。其折から島津久光は勅使大原重德が江戸へ來て用務終つて歸る其路で、外國人を切つた。今の奈良原男の兄、奈良原喜左衞門てある。其事を井上が始終いふ。攘夷を主唱した毛利家が實行せぬのに、無言の島津が實行して居る。吾々も何かやらうてはないかといふのが初まりて、武州金澤に横濱の異人が土曜から日曜にかけて遊びに行く。其れを襲ふといふので、土州藩の武市半兵衞など丶相談して繰り出して行つた。之れは武市の口から山内容堂に漏れた。當時の山内の藩公は豐範といふ人て其夫人は毛利公の養女てある。其關係から毛利にいつてやつた爲めに、毛利の若殿の定弘（元德公）が唯一人て、一行の後を追ひ、蒲田の梅田に引込み、涙を流して是非思ひ止つて呉れい、若しやるべき時が來れば己れが先きに實行するからどうか思ひ止つて呉れいと熱心に說かれたものだから、井上等も涙を流してそれは止めた。然し幕府の開國は不平て堪らない。御殿山にはいよいよ公使館が出來た。あれを燒いて了へ！といふので相談一決してとう／＼公使館を燒いた。其燒く時分に井上は一同のものが引上げる退き口を作る時に、一同のもの丶外に自分の出口を別に拵へて置いた。其れから其事件で品川の女郎屋で時を過して待合せる金が要る。非常の窮策で九十兩金が出來た。然し井上は一同のものへは八十兩の報告して、十兩丈けは自分で着服

して置いた、燒打が濟んで引上げた時は、自分丈けは其十兩で元の女郎屋に上つて夜明をし、それから暫らく居續けた。死生の場合に出入するには此落附きがなければならない。づるいとか、こすいとかいふけれども、それは太平の場合にいふ事で、かゝる非常の場合、死生の間にあつて、退き口を別に拵へたり、又同じ女郎屋で遊ぶ金を持つて居るなどといふ事は先づ多少の膽玉がなければならぬ事だ。高杉晋作は常に我々は大小を取られゝば其日から乞丐兒だが、聞多ばかりは大小を取られても食扶持に離れない奴だといふて居つたが、これは井上侯の一生を通じての適評である。

然し井上が諸藩の間に知られ、毛利藩に勢力を造つた土臺は、これは確かに袖付橋の事件が原因をなしたのだ。伊藤俊輔、山尾陽三、井上勝、野村靖、遠藤謹助などゝ共に井上が英吉利へ密行してゐる中に、下關を英米佛蘭の四國が砲擊するといふ噂を聞いた。それで伊藤と二人で戻つて來て、和議を計り、毛利家が戰に負けてどうしても勝つべき見込がなかつたに拘らず、償金も出さずに事を落着させた。其功によつて井上は一躍して政治堂の役人になつた。政治堂の役人は今日でいふ樞密顧問官のやうなもので、毛利家では非常の功勞のあつたものでなければなれぬものだ。さうでせう、此政治堂の役人になれば役を罷めても一生の間十人扶持がつく事になつてる位のものだ。時の幕府の老中は小笠原壹岐守、この人は毛利家に六つかしい事を言ひ込んで來た。詰り元治元年七月十九日京都堺町御門の戰に於いて毛利家の兵から打つた砲丸は皆御所の中へ落ちて居る。これは朝敵だ。下關の戰で德川が開國條約を結んで居るからこういふ事が出來たのだ。此二條に對して毛利家は十萬石の減祿、毛利公父子は隱居といふ難題を持込んで來た。之に對して從ふ從はぬといふ藩論二つに別れる。從はふといふ方が歴史の上で後にいはるゝ俗論黨、之を拒絕して戰はふといふのは後にいはるゝ正義派なるもの、井上は無論正義派の牛耳を執つた。然るに毛利藩の身分のよい重役などは多くは俗論黨、身分の輕いものは多くは正義派である。其年の九月二十五日に山口城内に御前會議がある。井上は畢生の辯を揮つてとう／＼開戰論に極めつけた。其歸りがけに袖付橋で切られ、其れがあの顏に殘つた大疵、身體の十數箇所にある疵の由來である。其時分に井上の侍らしい處は、其れ丈けの重傷を負ふて居ながら、加害者を探して呉れるなと願ふた事だ。

討つも討たるゝも立場は違ふが、皆忠義の一心から出たのだ。だから自分は切つた奴を惡まない、探して呉れるなといふのだ。其處が面白い。此事件は井上の一生を彩る最も面白き事件であつて、同時に今日毛利藩に勢力を拂ふ根本をなしたものと私は思ふ。然し井上といふ男は運もよかつた男で、切られる時分に刀を拔く間がなく、斃れた。其時長い方の刀が横に廻つて、切りつける刄尖を喰ひ止め、胴切りになるのを免れた。此刀は井上の生命の親として今でも大切に保存して居る。昔の侍は人に切殺されても若し刀の柄に手を掛けて居れば半知が殘る。柄に手も掛けぬ位のものは武士の不用意として祿を召し上げられた。處が井上は此不用意ともいふべきもの丶爲めに却て生命が助かつた。實に運のよい人だ。今一つは中西君尾といふ京都祇園の藝者――今でも七十以上になつてまだ生きて居る、二三年前迄は矢張り藝者をして居つた――といふものと井上は馴染を重ねてゐた。英吉利に行く時に其藝者から井上に紀念として贈つた鏡がある。其鏡を井上は懷に入れて居つた。當時の鏡は今のやうな硝子ではなくして金の打物である。止めの一刀を刺した時に、刀が恰度其鏡の上をついた爲めに助つた。もう一つは創が餘りひどかつた爲めに醫者が手をつけない。處へ美濃大垣の在の郷士にして所郁太郎といふもの、これも同志の一人で嘗て大阪の緒方弘庵の塾に入り蘭學の傍醫者をやつたものが來て、創を縫ふた。此三つの爲めに助かつた。實に武運の目出度い人といはねばならぬ。人間が剛情でも武運が無ければならぬ。剛情と武運と相待つて井上は助かつたのだ。

それからずつと降つて、慶應四年正月、伏見鳥羽の戰爭に、薩長の聯合軍は總計二千四五百。德川の同勢は一萬三四千。其外に大阪には一萬の兵隊が居るといふ掛聲だ。數の上に於ては勝敗が已に決して居る。然るに山内容堂が頻りに德川慶喜の爲めに辯護の勞を取り、盛んに薩長に反抗する。戰爭の大勢が已に定まつたやうなものだ。若し山内の兵も幕府に加擔することがあれば、薩長の兵は塵滅される。流石の大久保市藏も之には閉口して居つた。恰度開戰と決した日に井上は長州からやつて來たが會議には間に合はなかつた。て控室に居つた。其時井上は參與の職にあつた。そこへ大久保が出て來て「どうも井上さん困つた事が出來た。十州がいかんワイ」といつた。井上はニヤリと笑つて「結構ぢやないか。八百萬石丈けだと思つたら又二

十四萬石殖えたのは結構ぢやないか」といつたので、大久保も大いに安心して同じく笑つた。土州も打てば廿四萬石殖えるといふ、此場合の一言は百萬の大兵を得た如く大久保の耳に響いた。維新前の井上の事を話せば隨分いろ〱あるが、今お話したやうな事で當時の一班が分らうと思ふから、其方は此れ丈けにして置く。

それから近頃になつて私の非常に感心した事は、どうも井上といふ人は情に篤い、人情の深い人だといふ事である。私が井上侯に呼ばれて行つたら、「己れの話をしろ」といふ事だ。本人の前で其人の事を話すのも異なものだが、然し本人の前で出來ぬやうな話なら仕方がないと思つて私はやつた。即ち袖付橋で切られてから伊藤と高杉が見舞に來る處をやつた。ちよい〱と侯の方を見ると、侯は頻りに涙を拭いて居る。話が終つてから、私は侯爵に向つて、「ナニセ本人の前でやることだからやりにくゝつて非常に話がまづかつた。然しあなたは泣いてお出てしたネ。」といふと、井上侯は「どうも我慢が出來なかつた」と答へた。て私は「當時の事を回想して所謂懐舊の涙を流されたのですか」と訊くと、「イヤさうぢやない。伊藤と二人で並んで此話を聞きたかつた」といはれた。言外に無量の意味があつて實に情に篤い人だと思つた。それから四時間許り私も傍に置いていろ〱話された。そしてちつとも疲たる色がない。七十以上の老翁で、而かも一昨年のあの大病の豫後によくもこう元氣があるものと私もつくづく感心した。昔話の中に攘夷の話が出た時に私はかういふ質問を放つた。「攘夷〱といふのは一體どういふ意味になりますか」といふに井上侯は「異人を切つて異人館を燒き拂へば攘夷ぢやないか」といふ。それで私は直ぐに「それをすれば當時の日本の天下はどうなるんです」と反問した。侯は額に手を當てゝ、「馬鹿な事をいへ。明治年間に生れて明治年間に育つたものに文久年間にどういふ考で働いたなどゝいふ答が出來るものか。異人を切つて異人館を燒き拂へば攘夷ぢやないか」といふた。こゝが侯のエライ處だと思ふ。井上侯の位置としてさういふことは一寸いへない事だ。一般の當時の人に聞けば皆いろ〱解釋を附けて尤もらしい事をいふ。然るに井上侯はさういはんで異人を切つて異人館を燒き拂へば攘夷ぢやないかといふ。一寸大きな處がある。兎に角維新前の井上は名利の念を離れた武人の典型と思ふ。明治以後の事は餘り我々が口を容れぬ方がよいと思ふ。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

實業之日本

二月一日發行 第拾四卷 第參號

一冊郵税共拾貳錢 半年分増刊共壹圓五拾五錢 一年分同参圓

▲我實業界の首領及び其幕僚……岳淵生

▲勉學中の精力集中法……醫學博士 二木謙三

▲在清國の我會社商店は如何なる青年を採用するか……在上海 櫻峯生

◎國體的新道德の修養……新渡戸博士

▼余の見たる藤田傳三郎……森村市左衛門

▼余は如斯して三圓の罰金を課せられたり……侯爵 井上馨

▼蠶種統一は不可能なり……農學博士 外山龜太郎

▼東北地方は何故に振はざるか……貴族院議員 山川健二郎

◎千古を通じて犧牲的精神に富む我國民性……增田社長

▲地方青年團の興起と其活動……楚水生

▲福澤先生の教訓に依りて心からの友人を作りし話……前川清三

▲新時代の三人男……▲一番とビリの卒業生

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替口座三二六番 賣捌全國書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

予爵 谷干城閣下題辭
子爵 三浦梧樓閣下序詞
報知新聞主筆 須崎芳三郎君跋
日本新聞記者 梶井盛君編

再版 羯南文集

故陸羯南先生は一代の文豪也而も其文章は崇高なる其氣節と共に天下に馳せ始終論議重立言の堂々を以て一貫す筆陣縱横其動くや電擊雷搏雲を呼び風を起し幾んど端倪す可らざるものあり而して其半面に於ては花笑ひ鳥啼き春風天を薫ずるが如く濯月梧桐の上に來るが如し一讀一誦人をして感嘆措く能はざらしむ篇中政論、法律論、教育論、文學論、史論、社會問題、祝文、弔辭、詩草和歌隨筆等あり皆以て時文作例の模範とするに足る苟も經世家、政治家、法律家、教育家、詩人、和學者、文士、青年學生は勿論各階級に於ける前途有爲の士は座右一日も缺く可らざるの好侶伴也

洋製菊判 上製美本 五百四十頁
正價 金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢 滿韓十八錢

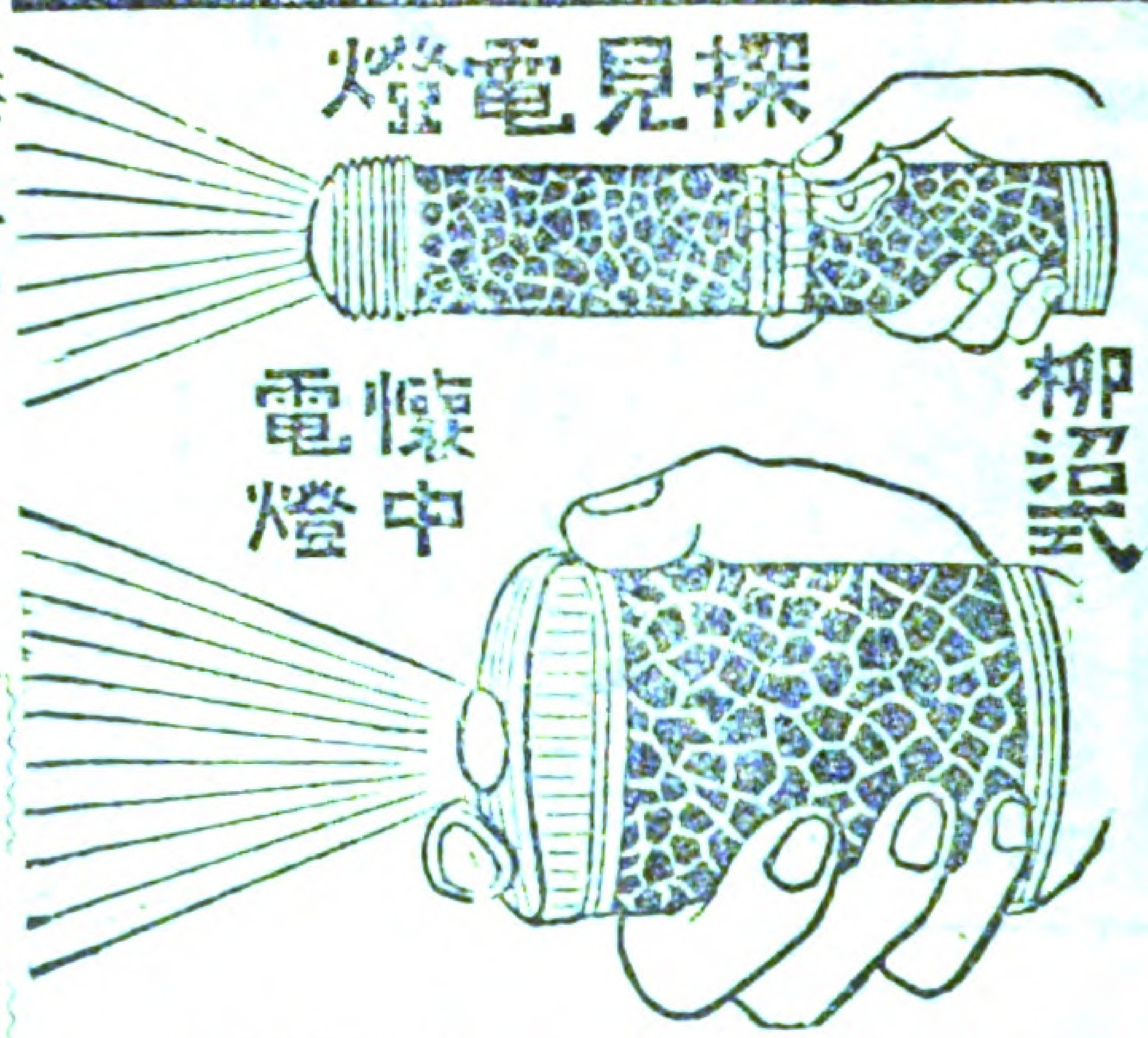
發行所 東京麹町區飯田町六丁目三番地 蟠龍堂 振替東京九九七七

大賣捌所 東京 六合館

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

説明 要部は金屬製其他は人造皮にて頗優美高尚なり中に固形電池ありて發電し光力十間内外に及ぶ電池のみ取換へば器械は永年の使用に堪ふ●旅行夜間外出には勿論来客の送迎便所の往復物品の搜索に甚便利、水火盗難の用意として殊に必要也、失火の恐なく暴風に堪ふる特色あり故に何人にも必要也。

最良品は柳沼商會



極力無上の大競争

本月中の御注文には景品として附屬電池の外に取替用電池壹個宛進呈し尚一千枚限り永久優待券を添へて取替用電池の大割引其他種々の御利益を計る。これ弊店無上の大勉强也。此好機を逸せず至急御注文あれハガキにて御申越あればヾ金引替にて直に發送す但十錢増

注意 並製品は各地商店にて販賣せる普通品を試驗的に發賣するもの也、最良品に比し早く無効となり非常に御損なる事御含み置下されたし。

大勉强特價表

最良最大形　金貳圓半
最良品中形　金貳圓也
最良品並形　金壹圓半
並製品中形　金七拾錢
懐中探見同價電池付屬　但並製の探見形に限る
▲小包送費内地十二錢臺灣樺太清國朝鮮卅錢
▲取替用電池最大六十錢國五十錢並四十錢中華錢小廿錢送料ハ錢宛

（小賣も卸も大勉强）

東京市神田區錦町三ノ二
振替東京二萬八十二番

柳沼商會

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

●英語擬試驗問題及解釋　全一冊

定價金五拾錢　郵税金四錢

反省社編輯局編

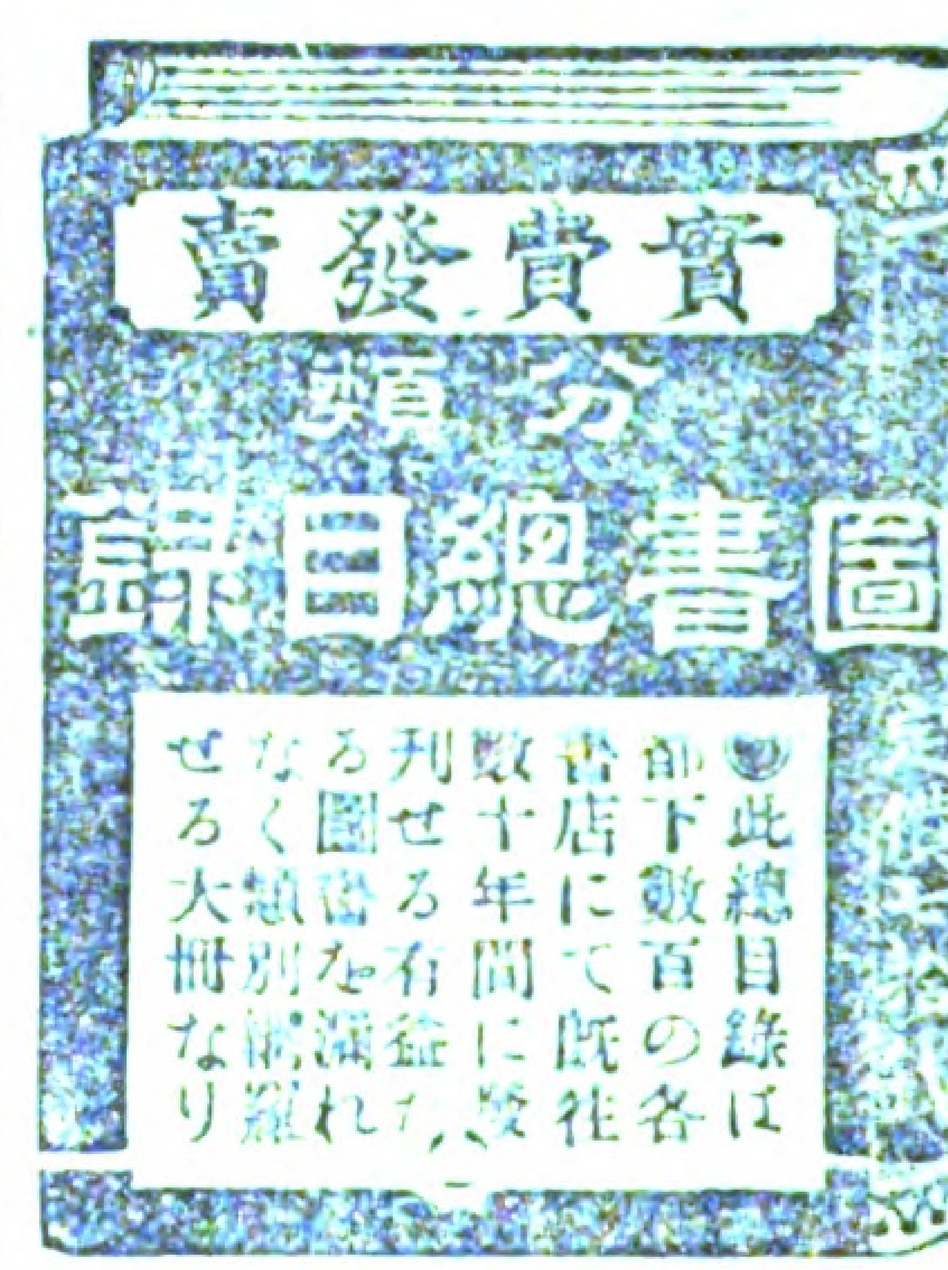
●空文年表（書入れ年表）　全一冊

定價金五十錢　郵税金八錢

發行所　東京市本郷區西片町十番地
反省社庶務部
電話下谷九百十九番
振替東京三十四番

發行所記入
最新刊圖書目錄

無代進呈



弊店儀今回更に地方通信販賣部を一大發展し讀書家の御便宜を計り最近數ケ月間發行の新刊圖書目錄を發刊し送料二錢相添へ御申込次第無代呈送可仕候

此の發行所別分類圖書總目錄は都下數百ゝ各書店にて數年間に發刊せし圖書を漏れなく掲載せる目錄也送料共金廿六錢送

東京日本橋區本石町二丁目
圖書雜誌大取次所
大光堂書店
振替口座東京貳〇貳九九番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

二月號の躍進

文藝倶楽部

二月一日發行　第三號　正價廿五錢　税錢二半

◎演藝界△△△
◎長廣舌△△△
◎活社會△△△

■小説　暗い町　徳田秋聲
■小説　許嫁　山田旭南
■小説　文明の結果　杜翁原作　眞山青果譯
■講談　鬼薊梅吉　錦城齋典山
■劇談　演藝當座帳　岡鬼太郎

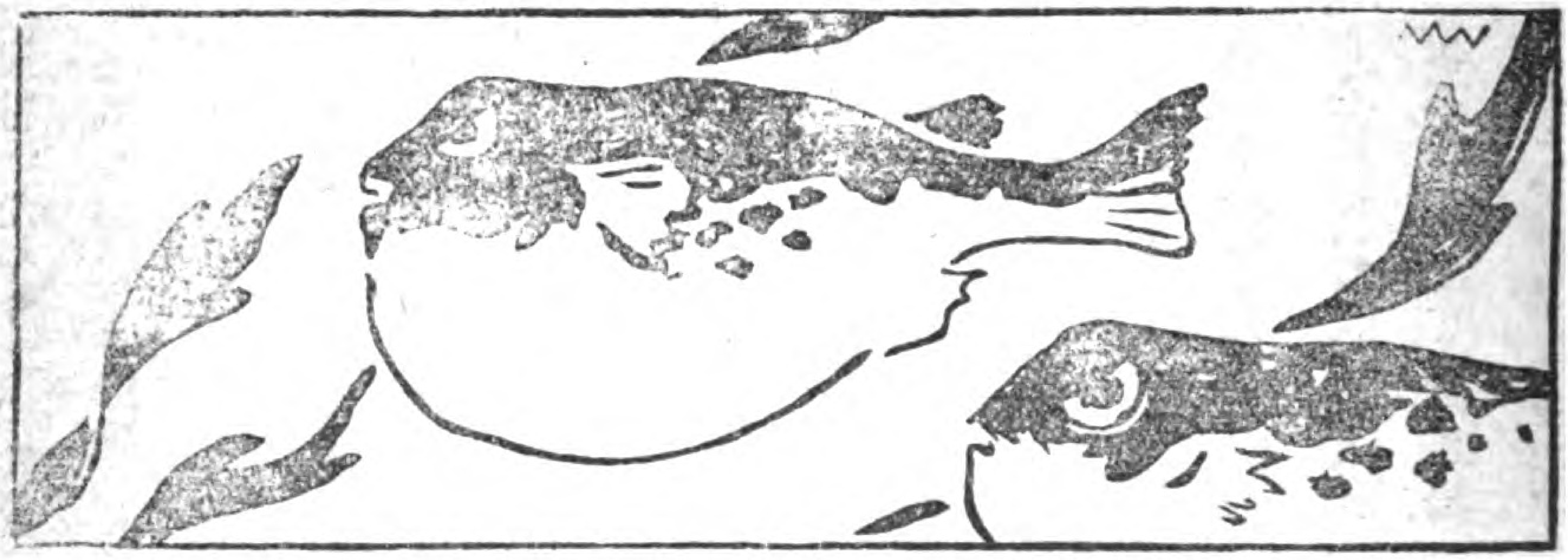
◎懸賞俳句
◎滑稽問答
◎小品文

◎忙中閑△△△
◎新新行△△△
◎落語△△△

◎句相撲
◎端唄
◎新流行

其他の材料悉く天下一品
趣味横溢して二月の文壇の寂寞を破る

東京　博文館　本町



危險人物

正宗白鳥

「これから四五日旅行して來ませう」と、私はその朝俄かに思立つて、まだ寢床にゐる父に向つて云つた。

「それもよからう」と、父は横向きて煙草を吸ひながら首肯いて、「何處へ行くつもりかい、遠方へ行くのかい」

「えゝ。兎に角讃岐へ渡つて、都合て馬關か博多の方へでも行かうかと思ひます」

「まあゆつくり行て來りやえゝ、五日ても十日ても氣長に遊んで來い。九州へ行けば別府の湯に入つて來るとえゝ。溫泉場ぢや彼處がまあ日本一だらう」と、父は近年春毎に出掛ける諸方の溫泉場の話をしかけたが、ふ

と氣付いたやうに、「旅費は持つとるんかい」と、訊いた。

「えゝ、些しは持つてゐます、東京の雜誌社から送つて貰ひましたから、」私は一月あまりも世間と離れて、苦しい思ひをして書上げて、やう〳〵僅かな報酬を手に入れたところであつた。

弟嫁に借りた信玄袋を提げて、私は檻を出るやうな氣持て家を出た。昨日から荒吹んだ西風はまだ止みさうてはなかつたが、久振りに村を出て行くのが悅しかつた。泡立つた海と淋しい畑とを區切つた狹い道を一里ばかり步いて、Kといふ田舍町から俥に乘つて、二里の山道を上つて停車場に向つた。當にした列車はもう出た後て、次の發車には一時間の餘も間があつた。風はます〳〵激しくなるし、空も曇つて、雪さへチラ〳〵し出した。火の氣のない待合室にぢつとしてはゐられなくて、直ぐ前の茶店へ入つて、火鉢を抱へて玻璃越しに外を眺めてゐた。兎に角琴平までの切符を買はうと思つてゐたが、今日何處に泊つて、明日から先はどの方角へ向うのやら、自分でもハッキリしてゐなかつた。この寒い日に目的のない旅をする自分の心根を不思議にも思つた。

「今日は最大急行が遲れましたから、下りも遲れるてせう」と、茶店の子供が時計を見上げて云つた。

「汽車の中も寒いだらうね」などゝ、私は子供を相手に氣乘りのしない話をしながら、敢て發車の遲速を心に掛けてはゐなかつた。

乘客はボツ〳〵停車場へ集つた。山高帽を被りインバネスを着た髯の見事な役人らしい男が俥から飛下りると、襟卷に首を埋めて入口に立つてゐた百姓らしい男が道を避けて會釋した。子供を脊負うた女

がアタフタ驅けて來た。やがて急行車が停車しないで通拔けたが、下り列車は豫定の刻限を一時間近く過ぎてゐながら、まだ來さうな樣子がない。

『馬鹿に遲れたんだね、』私も流石に待遠しくなつた。

『もう切符を賣りませうから、買うて來ませうか』と、子供が側へ來て親切さうに云つた。

『あゝ』と、私は生返事をして、五圓札を渡した。

『何處までのを買ひませうか』

『琴平』

その聲が明かに聞取れなかつたのか、子供は更に問返した。

『琴平』と、私は力を入れて再び云つたが、行先なんか何處でもいゝ、汽車にさへ乘れゝばいゝのだ、琴平が尾の道にならうと、馬關と間違はうと、少しも差支えはないのだと思つてゐた。そして子供の驅出して行くのを見送つてゐたが、今まで玻璃戶の外をウロ〳〵しながら、折々私の方へ目を配つてゐた頑丈な男も、大股に步んで子供の後について行つた。

切符を手に取ると、私は茶店を出て停車場の腰掛に身を縮めて座つた。前を通つてゐる驛夫の靴音までも寒さうに響いた。かの頑丈な男は茶色の中折を被つて麻裏草履を穿き、兩手を外套の下に收めて、時々鼻を啜りながら、場內を行きつ戾りつしてゐたが、私がジロリとその方を見る度に、顏を背けるやうにした。二三度繰返す間に、その顏の背けざまが態とらしく思はれ出した。無論知人ではないのだが、

何故だらうと、私はます〳〵その顔に疑ひの目を注いだ。

やがて汽車の音が遠くから聞えて來たので、線路を横切つて、下りの乘場に立つた。顔向けも出來ぬやうな寒い風が禿山の方から吹付ける。乘客の顔はどれも朽ちた色をしてゐる。やう〳〵三等車に乘込んで窓際の空いた席を搜して座を占めたが、かの男も同じ車内へ乘込んだ。しかし私は最早それに注意するでもなく、目を閉ぢて快く汽車に搖られて、知らず〳〵岡山まで來た。一先づ下りて時間表を見ると、高松直行の連絡船に乘るには、六時發の列車が都合がよいが、時計は一時を過ぎたばかりだつた。まだ五時間は此處に待つてゐなければならぬ。で、二等室のストーブの前に立つて、手を溫めながら時間の利用法を考へた。冬枯の公園を見たところが仕方がない。この春にも一度立寄つたのだから、古馴染の市中を散歩する興味も起らない。一月あまりも海や畝ばかり眺めてゐたので、三味線の音や女の臭ひには渇してゐれど、その音や臭ひに惑はされて今宵をこの地に過ごす氣にもなれぬ。兎に角早く知らぬ土地へ行つて見たい。

窓越しに外を見てゐると、旅館や水菓子屋などの間に小さい理髮屋が目についたが、それと共に自分の髮の延びてゐるのが氣になり出した。急に頭がむづ搔くなつて來た。で、差迫つた用事として理髮屋へ入つた。鏡に映つる自分の顔は如何にも田舍の垢が染込んでゐるやうに見えた。散髮の濟むまでに市中の知人の事が止切れ〳〵に思出されてゐたが、其處を出る時は、これから中學校敎師の神部を訪ねることに心が決つてゐた。

直ぐに俥に乘つて東中山下まで行つたが、番地が分らないので、あちらこちら尋ね廻つた。

「そんな人は知りませんなあ」と、醬油屋の主人が門口へ出て來て考へながら答へた。

「ぢや轉居したのかも知れん、確か一昨年まで此地にゐた筈だが」と、私は失望して、ぢや、發車までの時間を何處で過ごさうかと屈託してゐると、

「神部と云ふのは敎師ですか」と、後から聲がした。見ると、先つきから私の行く方へ俥て隨いて來た色の黑い目の飛出た男が、矢張俥を留めてゐる。

「えゝ」と、私は薄氣味惡い男だと思ひながら氣のない返事をした。

「それならこの四五軒先の角を右に曲つたところです」と、その男は頤で示した。

私は敎へられた方へ行つたが、神部の家は思つたよりも立派な門構への家だつた。二階の書齋に通されて、主客は別後の四角張つた挨拶は拔きにして、火鉢を圍んで雜談に耽つた。東京の話や文學談も互ひの口に上つた。

「今時分、琴平詣りとは妙だね、何か種にてもするんかい」と、主人は訊いた。

「さうでもない。暇つぶしに旅に出たんだ。家にゐて親兄弟の顏ばかり見てゝも飽きて來るし、東京へ行つたつて差詰め何をする當てもないしね」

「しかし君なんか自由行動が取れるからいゝさ。僕なんか年に一度の旅も出來なくなつちやつた。つい向ひてあつても、讃岐の土地へ足踏みしたこともないんだ。琴平へは一度お詣りしたいんだが」

「あんな所は別に行つて見る價値はないんだらうが、しかし僕には讃岐といふ土地は夢に見た土地のやうに頭に殘つてる。何しろ母の故郷祖母の故郷曾祖母の故郷と、三代つゞいて讃岐の血を受けてるんだからね。赤ん坊の時分から、生れた國の地理や傳説よりや、讃岐の地理や傳説をよく聞かされてる。この邊の島の名なんか今でも碌に知らないが、鹽飽與島だとか、八栗屋島に壇の浦なんか子守唄のやうに覺えてゝ、何だか懷かしいよ。だから今度もその夢の土地を實地に踏んで見たいといふ好奇心も多少あるんだ。一體に僕の性質や容貌は母の方に似てるんだから、僕の本當の故郷は讃岐かも知れない。」

私は言葉に熱を含んでかう語りながら、未見の故郷を夢のやうに頭に浮べた。激しいヒステリー性て、僻ぎ勝て、『お母さんは何をしても面白うない』と、此間も染々云つてゐた母の性質から推して、讃岐といふ土地が陰氣な淋しい土地のやうに思はれた。

「母の故郷といふ者は懷かしいものだ、僕の母は松江の生れだが、僕も一度行つて見たいと思つてる」と、主人は相槌を打つて、暫らく二人て土地と氣風との關係を語合つた。

そこへ妻君が着物を着變へて、膳を持つて來た。寒いから酒も添へて來た。私はもう薄暗くなつたから暇乞ひしやうとして時計を見たが、まだ四時を過ぎたばかり。

「まだ早い」と主人の引留めるまゝに座直して、二三度杯を受けてゐると、

「ちよつと貴下(あなた)にお目に掛りたいと云ふ方が入つしやつたんですが」と、妻君が襖を開けて云つた。

「僕に會ひたいと云ふんですか、不思議だね」と、私は妻君にその名前を聞かせにやると、黑塚とい

ふので、まだ會つたことはないんだがと答へた。

『變だね』主人と私と一度にさう云つて目を見合せた。

兎に角階下へ下りると、玄關には此家を教へて呉れた男が立つてゐたが、私を見ると、言葉を出す前に、頻りに啞が物を云はうとするやうな口付をしてゐたが、やがて小聲で、『私は岡山署の者ですが』と前置きして、實はかう〳〵だと云つた。

今朝からの私の疑ひは晴れたが、その代りに新に不快の念が萌し出した。『六時ので立ちますから、此家てゞも停車場てゞも待つてお出てなさい』と云つて、二階へ上ると、

『誰れだい』と、主人は不審げな顏付して私を見上げた。

『刑事だ、僕が家へ歸るまで行動を共にしろと命ぜられたんださうだ』と、私はいま〳〵しさうに云つた。

『へーえ、それや少し變だね、君に刑事がつくのは可笑しい』主人は驚くよりも、むしろ滑稽に感じてるらしい目付をしてゐたが、それを見て私は侮辱されたやうに感じて苦笑した。

『しかし君もえらい者になつた。何か天下を騷がすやうな危險なる著述でもしたのかい』と、わざとらしく眞面目で訊いた。

『どうだか、あまり危險でもなさゝうだね。僕の小說て迷へる者を一人導いたことはないだらうが、その代り一人の讀者に魔術を掛けたこともないだらう。僕の頭にも筆にもまだそれだけの力がないん

情ない藝術家だよ。今の作家て本當に危險なる著述をなし得るものは一人もないかも知れん」

「我々の立場から云へば、そんな作家は先づ出て呉れん方がいゝね」と、神部は此頃の中學生の考への生意氣になつたことを、さも小癪なと云はぬばかりに說立てた。私は身を入れて聞きたくはなくて、空返事しながら、時計の針の進むのを見てゐた。

「しかし、君が監視されるのも多少理由があるだらう。いくら警視廳だつて故意にする譯はない」と、神部は再びくどく問ひ出した。顏には酒がまはつてゐる。

「そりや理由があるかも知れん」と、私は相手の氣休めだけの曖昧な返事をした。「兎に角僕の村の巡査は僕に對する取調が粗漏だつたので、俸給百分の二十五の罰を喰つたつて零してたよ。巡査だつて商賣だからさうなりや溜らないやね。賭博や泥棒の注意は怠つても、僕に對して立入つた取調をするやうにならあ。だが、毎日二階に閉籠つてる者を取調べるんだから困つたらしい、無い種を報知は出來んからね」

「さうかねえ。さう下らない事に手數を掛け出しちや稅が高くなる譯だ。岡山でもこの春刑事がチボから賄賂を取つてたのがバレて大騷ぎだつたが、仕舞ひには刑事に刑事を隨けなくちやならなくなる」と、主人の氣焰は次第に高くなりさうだつたが、私は少し早目に出て行くことゝした。

黑塚は呑氣らしく玄關に腰掛けて火鉢に當つてゐた。私は連立つて外へ出た。友人と一緒に旅をするのさへ好まない私が、今度は是非ともお伴を連れなければならぬと思ふと、旅の樂しみは半ば消えてし

まつた。黒塚は停車場への近道を案内しながら、いろ〳〵の事を話したり問ふたりした。「貴下方文士の方のお邪魔をするのはお氣の毒だけれど、役目ですから」と謙遜して、文學の話をもした。「文章世界」などを讀んでゐるとか云つて、知名の文士の近狀をも多少知つてゐた。

「貴下方が旅行なされば、何れ方々 歡迎會が催されるでせう」と云つたが、それはお世辭でもなさゝうだつた。

「どうして歡迎會なんかあるものですか。それに僕は一人旅が好きですからね」と私は答へた。

停車場へ來ると、何時の間にか黒塚は姿を隱した。私は旅行案内を買つて、四國や九州や諸方の線路を調べて、琴平參詣後の方向をいろ〳〵に考へながら發車時刻を待つてゐた。

輕便鐵道のやうな粗末な小さい宇野行の列車に乘つた時は、外は眞暗だつた。車內も薄暗くて向側の客の顏もはつきり分らぬ程だつたが、黒塚が少し離れて乘つてゐるのは目に付いた。

汽車は五月蠅く小さい停車場に道寄りして、のろ〳〵闇の中を通つた。「どうせ人力の代りだから」と隣の客が云つた。蒼白い女は泣止まぬ子供を賺しかねて立つたり座つたりしてゐたが、仕舞ひには自分ても泣出しさうな顏付をした。「今朝作州の勝山を立つて、これから母の病氣見舞に高松まで行くのだと云つた。左右ては見ず知らずの客の打解けた雜談が賑はひ出した。高い話聲やら泣聲やら笑聲やらで、汽車の音も聞えぬほどに騷々しくなつた。默つてゐるのは私と黒塚とだけのやうだつたが、煙草の五六本も吸盡した頃、黒塚は私の側へ來て、「この次が宇野です、彼處でお別れしますが、御挨拶は致しませ

んから」と、小聲で一言云つて元の席についた。

薄暗い寒い汽車を下りて、明るい溫い連絡船に乘つた時は、空も晴れかゝつて、所々に星が鋭く光つてゐた。晝間よりは風も歇いてゐたが、それでも打付ける波の音は激しかつた。船は新しくて小奇麗で、三等室にも新しい疊を敷き大きな火鉢を据ゑてあつた。私は片隅に肱枕で寢ころんでゐたが、火鉢の周圍では船の進むにつれて、ますます話に興が添つて來た。汽車の中で朧げに見覺えた人の顏もその座に加つてゐた。諸國の遊廓や賣春婦の話が皆んなの口から出た。

「一晩ぐらゐなら宿屋へ泊るよりや遊廓へ泊る方が餘程經濟だ。それに夜具がよくつて、女を側に置けるんだからねえ。博多の柳町なんか廉くつて大事にして呉れる。三兩も出しや、奇麗な部屋でスバラしい夜具で寢かして呉れるて」と、東京の賣藥商だといふ顏の細長い老人が目に無邪氣な微笑を湛へて云つた。

「新潟の女は肌自慢で裸で寢るといふけれど、ありや經濟から割出してるんですぜ、寢卷を汚すまいと思ふからだ」と、威勢のいゝ愛知の若い男が云つて笑つた。

「いや、長野で共進會のあつた時はひどうがしたぜ。あの頃は女郎が一日に四十何人客を取るといふんて、警察の方でも評議をして、消毒器を備付けさせることにしたんださうです」

それから東北の草餅の話やダルマの話を物珍らしさうに講釋する者もあつた。

私はふと身を起して甲板へ上つて見た。雲は忙しく走つてゐて、左右の島は黒く見えた。寒さを忍んで、暫らくベンチに腰掛けて凄い波を見下していた。風のない春の夜か秋の夜だつたら、この甲板にかうして空想に耽つてゐるのも似つかはしからうが、今年も十日あまりと押迫つたこの冬の夜に、一人ぽつちで甲板で震へてゐるのは、あまり心地よくもなかつた。せめて明日は晴れゝばよいがと願ひながら、元の部屋へ入つたが、女話はまだ終りを告げてはゐなかつた。私はボーイに珈琲を命じ、繪葉書を書きなどしてゐたが、雜談の音頭取らしいかの賣藥商は心持席を空けて、「貴下も少しお當んなさい」と、私を顧みた。そして何處の者で何處へ行くと、取調を始めて、

「東京と云はれちや懷かしいね、私は九月の末に彼方を出立したんだが、この樣子だと旅で年を取るかも知れん。どうです、東京の景氣は」と、乘出した。

「僕も暫らく旅をしてるから、彼方の樣子は分りません」

「洪水はあつたし、今年も不景氣々々々で暮れるんだらう。」と、女話をしてゐた時とは目付までも變つた。「私は三年に一度ぐらゐは旅で正月をするんだが、不斷は何ともなくても、宿屋で雜煮餅を食べてると、妙に東京が戀しくてならんね。この年になつて旅で年を取るのも氣が利かないから、もう今年きりにしやうと思ひながら、矢張こんな事になつちまう。因果な身の上だ」と、淋しく笑つて、「貴下はお詣りをしたら、直ぐ東京へお歸りなさるか」

「どうですか。彼方の正月も別に面白くはないから」

「いや、何と云つても東京だ。同じ事なら暮の中に彼方へお歸りなさい」と、老人は親身の口振りで云つた。

やがて、汽船が築港へ入りかけると、乘客は身仕度に取掛つた。高松者だといふ前歯に金を嵌めた男に向つて、手堅い宿屋の名を問ふてゐる者もあつた。

私は人に先つて身輕に棧橋へ下りたが、浮かりしてゐては海へ吹飛ばされさうな位に、風が強く吹いてゐた。身を屈めて陸へ上つて、足の向く方へ歩いた。ふと、今迄忘れるともなく忘れてゐた刑事のことを思出して、振返ると、五六間後に外套の頭巾で頭を蔽うた脊の高い大男の歩いて來るのが目についた。道は暗く風は埃を揚げて、外に人影はない。私は確かにそれと察したが、わざと立留つて見詰めてゐると、その男はわざと横道へ外れて行く風をした。そして私が歩き出すと、再び元の道へ戻つて間を置いて隨いて來る。

その夜は停車場前の宿屋に宿つたが、夜中雨戸が騷がしくて快い眠りは得られなかつた。で、夜明け前にランプを點けて、信玄袋の中から讀掛けのダンヌンチヨの『ヴイクチム』を出して、寢床の中で讀つゞけた。"A Warm, rosy June twilight, fraught with mysterious Perfumes" といふ作中の文字そのまゝの、温かい柔かい、薔薇のやうな匂ひのする小説は、一枚々々私の心を酔はさうとした。悲しみも怒りも惑ひも音樂で味つけられ、匂ひて燻されてゐるのが羨しい。妬ましい。私とものの悲しみや惑ひには

はこんな音樂もなければ匂ひもないのだ。パオロ、フランチエスカ、ロミオ、ジユリエツト、ジオルジオ、イポリタなど、物語で馴染の伊太利人の生涯に比べると、我々の生涯は死灰枯木のやうである。日々身窄らしい醜い暮しをしてゐる。何だか影が薄い。…………

暫く讀耽つてゐる間に、手の先が龜んだ。廣い部屋の隅々まで薄明るくなつてゐる。煙草に火を點けて起きて、雨戸を一枚繰開けると、寒い風がまだ吹いてゐたが、空はスツキリ晴れてゐた。薄青い色をした屋島は眞向うに見えた。

朝餐が濟むと、急いで栗林公園を見て、琴平行の汽車に乘つた。絶えず窓外に目を注いで讃岐といふ土地を視察しやうとした。が、別に異つた所も心に留まらなかつた。郷里の備前と同じやうによく開けてゐる。著るしく松が多い。南を堺してゐる山は平凡で際立つた大山も見えない。内海の島々は絶えず目についた。

やがて母の故郷の多度津に近づくと、私は出抜けに隣りの客に向つて、「鹽飽島はどれでせう」と訊いた。その客は私に脊を向けて腰掛に座つてゐたが、大きな眼で斜に見て、一つの島を指差して、言葉少なに卒氣なく敎へて呉れた。私は島よりも先づその客の目付と素振りとに注意した。そして「これだな」と、直ぐに感付いた。

琴平に着いて、信玄袋を虎屋へ置いて、高い石段を上つてゐる間にも、大きな眼は絶えず後から隨いて來た。此所は善光寺と東西相對して參詣人に富んだ所ださうだが、この日は前後に五六人の參拜者の

目についたばかりだつた。櫻の馬場も寳物館の庭園も、冬枯れて何の風情もなかつた。本社へ來ると、母から託された賽錢を袂から出して投げた。繪馬堂の側の青銅の神馬の周圍には、銀杏の葉が散つてゐた。

私は足早に境内を歩いて、虎屋へ歸つて、サイダで渇を醫してから、晝飯を食べた。兎に角これで琴平詣でも終つたのだが、さてこれから何處へ行かう？

一時間後には私は善通寺の境内の藥師堂の側の茶店に憩うて、大師堂や四國山を見渡してゐた。長い半纏を着て髮を額に垂らした男が、大福餅を喰ひながら、茶店の女と話込んでゐたが、誰れかゞ情死しかけた噂らしい。毒藥を呑んだが死に切れなくて、二人とも病院へ擔込まれたといふ要點だけは分つたが、細かな事は聞取れなかつた。茶店の女は屢々眉を顰め、口を開けたり閉ぢたりして感動してゐる。

「大人しい堅い人でもねえ」と、溜息を吐いた。

「どうした機勢だかおれ達にも分らねえ」と、男は指先を舐めずりながら門の方へ行つた。

女は茶をつぎ變へてから、店先の埃を刷き出したが、埃は私の茶碗にまで散込んだ。私は弘法大師の遺跡よりも、今聞嚙つた話に興を寄せて、門前から乘つた俥の上で、車夫に向つて、「此頃この町で心中した者があるのか」と訊いたが、車夫は一向知らないと答へた。

心中といふ大事件がこの狹い町に知れ渡らぬ譯がない。して見ると、あの話は他所の出來事だらうか、

それとも過去の話かも知れぬと、私は惑つた。よく聞取らなかつたのを殘念にも思つた。

私が茶店にゐる間、所在なくブラついてゐた色の白い顏立の柔しい新たな刑事は、驛へ來ると知らぬ間に姿をかくした。私は何となく氣掛りて、其處等を搜して見たが見當らない。

驛長室を覘いたが其處にもゐない。はてなもう發車時刻も迫つてるのに、警察署へて行つたのか知らんと思ひながら、プラットホームへ出た。間もなく汽車に乘つて車內を見渡したが、その人の姿は見えぬ。まさか、代りを乘込ませたのでもあるまいから、外の車にでもゐるのだらうと、思はれた。最早高松までの途中に名所古蹟もないから、安んじてゐるのかも知れぬとも思はれたが、さうなると、私もこの機會に乘じて、一度自由の身となりたくなつた。かねて母の故郷の多度津を見たいと思つてゐたのだから、寒くとも下りて見よう。巧みに煩い者の目を避けて下車しようと決した。

金藏寺の次はもう多度津だ。私は信玄袋を外套の下にかくして、出口に坐を移した。多度津では可成りに下車客が多い。私は荷物を提げた大きな男に添うて下りて、人の中に紛込れて停車場を出て、跡をも見ずに道を曲つた。曲つてから振返ると、それらしい人は見當らない。三四町は絕えず振返りながら步いたが、最早氣遣ふ必要はなくなつた。これからが本當の氣儘な一人旅だ。風が凪ぎさへすれば高松までの切符は棄てゝ、此處から尾の道へ渡つて馬關あたりまで旅行するといゝのだが、海はまだ激しく荒れてゐる。

擦違つた巡査に昔の家中屋敷の方角を問ふて、先づその方へ步いた。道の左右に荒壁に取捲かれた小

さいくすんだ家が幾つも並んでゐる。一萬石の小さな大名の遺跡だけに如何にも見すぼらしい。所々の庭には橙や柚の木が壁の上に枝を出してゐる。私は一つ〳〵表札を見て、母の家は何處だつたらうと想像しながら歩いた。家は叔父の放蕩の結果早くから人手に渡り、家族は悉く他國へ流浪して、祖父一人土藏に住んでゐたが、その土藏も鐵道布設の際に引拂はれたのだと聞いてゐるので、線路の方へ足を進めた。線路を越えると直ぐに海だ。線路に沿うて古風の根上り松が遠く續いてゐる。私はその松の根の側に腰を卸して、程近い鹽飽與島や、遠い備中備後の海岸を望んだ。母や祖母や曾祖母が、この景色を見ながら育つたのだと思ふと、他郷に來てゐるとは思はれない氣もする。

子供の時分から、辰一叔父さんといへば、恐ろしい人として記憶されてゐる。十三四の頃から茶屋酒の味を覺えて、幾代もこの地に榮えてゐた一家を叩潰した上に、親類縁者にも迷惑を掛けたことが、折々幼な耳に觸れてゐた。母方の祖母はよく『辰の獄道々々』と、さも憎らしく罵つてゐた。だが、一二度私の郷里へ立寄つた辰叔父さんは、色の白い目顏の優しい話の面白い人だつた。今は妻子を棄てゝ、京坂地方で貧しい商賣をしてゐるのだとも聞いてゐるが、この人に傷けられた十數人の骨肉はそれ〴〵にどう收りがつくんだらう。

私は一人々々母方の家族の顏を心に浮べながら、再び寂しい家中屋敷を通つて、町の方へ出た。高松へ歸るにしても、汽車は一時間毎に出るのだから、さう急ぐにも及ばない。何處かで溫かい物を食べて休みたい、と思つて、相應はしい家を捜してゐたが、やがてすしと暖簾にしるされてゐる小料理染みた

家が目についた。考へる間もなく内へ入つて二階へ通ると、入口の見すぼらしいのに似合はず、小奇麗な部屋が三つ四つあつた。只の飲食店ではないらしいのが恠しかつた。誂へた料理の來るまで、火鉢に寄つて冷えた身體を溫めてゐたが、ふと裏の方から三味線の音が聞えた。障子を開けると、小高い崖の上の小祠(ほこら)が斜に見えた。目の下の低い軒には干大根が吊されて、屋根には草が生えてゐる。絃の音は其處から洩れて來るらしい。

「この土地にでも、些とはいゝ藝者がゐるんかい」と、私は膳を持つて來た女中に訊いた。

「この土地だつて、さうあなづつた者ぢやありませんぞな。お目に掛けませうか」と、女中は媚を含んだ目付をした。

「おや、大急ぎで呼んで來い、一番いゝのを汚なかつたら直ぐ歸へすぞ」

「えい〳〵」

女中が下りて行くと、やがて下の家の絃の音はぱつたり止んだ。私は膳の上を見ながら、ふと辰叔父が昔この邊で遊んでゐたのだらうと思つて、一種厭な感じに打たれた。かの荒壁の中の陰氣な家を拔出ては、此處等で氣儘な眞似をしてゐたのだらうと、次第に心がその事にのみ向つて來た。そして、屋敷町で思出した時にはボンヤリしてゐた叔父の面影が、此處では不思議に濃くあり〳〵と浮んで來た。

私は自然に俯向いて、何を見るともなく目を凝らしてゐたが、氣付かぬ間に襖が開いて、紫色の羽織を着た色の白い唇の艶つぽい女が現はれた。ろくに挨拶もしないで、座ると直ぐに私の煙草を取つて、

首を搖ぶりなり吸出した。

「お前は藝者かい」無作法な奴だと思つて、私は皮肉に云つた。

「左樣て御座います、これてもなあ」と、わざと澄まして後、馴々しい笑ひを浮べた。

「ぢや、三味線ても彈け」

「そんな氣の利いた者、わたい知りまへん。彈ける者を誰れぞ呼びませう」

「ひどい藝者だねえ」戯談だとは思ひながら、私は興が醒めてしまつた。海邊の荒々しい客をのみ相手にしてゐる爲か、少しも素振りに優味がない。

ても、暫くすると、女中の持つて來た三味線を引寄せて、聲張上げていろ〳〵の流行唄を騒々しく唄つた。私の默諾を得て、雛妓をも連れて來た。雛妓は肩揚のある紋付の羽織を着て稚子髷に結つてゐる。二つ三つ手短かな踊を踊つた。

「もう澤山だ」と、私は踊をも唄をも押止めて、

「おれは次の汽車に乘るんだから、お前達はもう歸つていゝよ。」

「何てさう急ぎなさるんぢや。お歸へりの時は停車場まてお見送りしますけに」

「それには及ばないよ。本當にもう歸つて呉れ」と、私は追立てるやうにして踊らせた後て、女中に向つて、「あれてもこの土地て一番いゝ藝者なのか。名は何と云ふんだ」

「小波さんてす。隨分よう賣れます。お氣に召さんのてすか」と、女中はやゝ訝しさうな顔をした。

『下の家で彈いてた時にや、三味線も味さうだつたがなあ』兎に角高松へ行つて見よう、彼處ならこんなに殺風景でもなからうからと、私は直ぐに此家を出た。後を見ると、狹い道の左右に所々料理屋の軒燈が光つて賑かな聲もしてゐた。この界隈は多度津の色町で、若い者の心を惹いてゐる所らしい。丸い提灯を先きに藝者らしい女が歩いてゐる。

闇に包まれた多度津に別れて、汽車で坂出といふ驛まで來ると、左右に目を配りながら、アタフタ乗込んで來た男があつた。私の顏を見ると側へ來て、『貴下(あなた)は丸龜からお乗りになつたんですか』と訊く。

『いゝえ』私は輕くさう云つて首を振つた。その男は『さうですか』と云ふが早いか、次の室へ行つた。

プラットホームには制服巡査が二人目を尖らせて何か話しながら歩いてゐる。やがてその一人が車の入口へ上つて、氣つかぬやうに私の方へ目くばせしながら、或男に手帖を見せて何か呟いた。その男は二三度首(うな)づいてゐたが、やがて汽笛が鳴ると共に私の側へ來て、煙草を取出し、『失禮ですが火を一つ』と、會釋して腰掛けた。丸顏の艶のいゝ聲の太い男だ。

『風も凪ぎましたなあ。今夜は高松へお泊りですか』と、打解けた口を利いた。

『えゝ』私は話を避けようとしたが、相手は絶間なく話しかける。土佐の生れだといつて、大町桂月や幸徳秋水の噂をもした。高松と丸龜との勢力爭ひや、讃岐の氣風やを、私に問ひに應じて講釋し出した。

『高松も築港が出來てから、以前より餘程繁盛し出しました。大きな船も着くやうになりましたから

ねえ。しかしあの土地はどうも氣風が姑息だからいかん。それから見ると、多度津といふ所は餘程進取の氣象に富んでゐます。商人でも昔から冒險的の事をやる者が多いやうですよ」

「風景は讃岐中で何處が一番いゝんでせう」

「左樣。先づ西では觀音寺、東では屋島でせうな。屋島へは是非御見物にお出でなさい。古戰場が一目に見下ろされます」

「ぢや、天氣でもよかつたら行つて見ませう。」

「貴下方は古跡や名所を遊覽なさつて、それがちやんと材料になるんだから面白いですなあ、風流を樂んでそれがお金になるんだから」と、その男はさも羨ましさうに無邪氣に云つた。

「そんなに風流でもありませんね、」と、私は苦笑して、『しかし貴下方の御商賣は氣骨が折れるでせう」

「いや、高松からも妙な奴が出たので困りますよ」

その男は現代の惡教育の攻撃など、氣焔を吐いてゐたが、高松へ着くと、巧みに姿をかくした。私は昨夕の宿へ歸つて、電燈の下で信玄袋を開けて、ダンヌンチヨを取出したが、ふと手帖のないのに氣づいた。外套のポッケットを搜しても見當らない。二三年いろ〳〵の事を書留めて置いたのに、何處で無くしたのだらう。他人に見せたくない秘密をも書留めてゐるし、長篇の材料も心覺えに記してゐる。

私はそれを失つたらしい場所を考へながら、若しかそれがどの刑事かに拾はれてゐはしないかと思つ

た。隅々まで注意して見たらば、危險な分子の露ほども見當らぬのに失望するかも知れぬが、私の下らない日常生活の一端や、自分一人の胸の中に葬りたい事件の缺片を窺はれるのが厭な氣がした。

て、私は手帖の中に收めてある秘密の記事を一つ〳〵思浮べながら、淋しい夜を過ごした。

露肆

泉鏡花

寒く成ると、山の手大通りの露店に古着屋の數が殖える。半纏、股引、腹掛、溝から引揚げたやうなのを、ぐにや〳〵と捩ッつ、卷いつ、洋燈も漸と三分心が黒燻りの影に、よぼ〳〵した媼さんが、頭からやがて膝の上まで、荒布とも見える襤褸頭巾に包まつて、死だとも言はず、生きたとも言はず、默つて溝のふちに凍着く見窄らしげな可哀なのもあれば、常店らしく張出しを三方へ、絹二子の赤大名、鼠の子持縞と云ふ男物の袷羽織、こゝ等は甲斐絹裏を正札附、づらりと並べて、正面左右の棚には袖裏の細り赤く見えるのから、淺黄の附紐の着いたのまで、ぎつしりと積上げて、小さな圓髷に結つた、顔の四角な、肩の肥つた、きかぬ氣らしい上さんの、黒天鵞絨の襟巻したのが、同じ色の腕までの手袋を嵌めた手に、細

い銀煙管を持ちながら、店が違ひやす、と澄まして講談本を、ト圓心に翳して居て、行交ふ人の風采を、時々水牛縁の眼鏡の上からじろりと視めるのが、意味ありさうて、此の連中には小母御に見えて——湯歸りに麥蕎て極めたが、此節當もなし、と自分の身體を突掛けものにして、そゝつて通る横町の酒屋の御用利らしいのなぞは、相撲の取的が仕切つたと云ふ逃尻の及腰て、件の赤大名の襟を恐る〳〵引張りながら、

「阿母、」

など丶敬意を表する。

商賣冥利、渡世は出來るもの、商はするもので、五布ばかりの欝紺の風呂敷一枚の店に、襦袢の數々、赤坂だつたら奴の肌脱、四谷ぢや六法を蹈みさうな、けば〳〵しい胴、派な袖、男もので手さへ通せば其處から着て行かれるまてにして、正札が品により、二分から三兩内外まて、膝の周圍にばらりと捌いて、主人はと見れば、上下縞に折目あり。獨鈷入の博多の帶に銀鎖を捲いて、きちんと構へた前垂掛、膝て豆算盤五寸ぐらゐなのを、ぱち〳〵と鳴らしながら、結立ての大圓髷水の垂りさうな、赤い手柄の容色も滿更てない女房を引附けて居るのがある。

時節もので、めりやすの襯衣、めちや〳〵の大安賣、ふらんねる切地の見切物、濱から輸出品の羽二重の半帕棄直値と云ふのもあり。外套、まんと、古洋服、どれも一式の店さへ八九ヶ所。續いて多い、古道具屋は、あり來りて。近頃古靴を賣る事は‥長靴は烟突の如く、すぼんと突立ち、半靴は叱られた體に畏つ

て、ごちや〳〵と浮世の波に魚の漾ふ風情がある。

兩側は扨て軒を並べた居附の商人‥‥大通りの事て、云ふまでも無く眞中を電車が通る‥‥

夜店は一列片側に並んて出る。‥‥夏の内は、西と東を各晩てあるが、秋の中ばからは一月置きに成つて、大空の星の沈んだ光と、どす赤い灯の影を競ひつゝ、末は次第に流の淀むやうに薄く疎には成るが、軈て町盡れまで斷えずに續く‥‥

宵を些と出遲れて、店と店との間へ、脚が極め込みに成る卓子や、箱車を其のまゝ、場所が取れないのに、兩方へ、叩頭をして、

「如何なものてございませうか、飛だお邪魔に成りませうか。」

「何、お前さん、お互樣です。」

「ては一ッ御不省なすつて、」

「えゝ可うございますともね。だが何てすよ。成たけ兩方をゆつくり取るやうにして置かないと、當節は喧しいんだからね。距離を其の八尺宛と云ふお達してさ、御承知てもございませうがね。」

「てすから、何ほ恐入りますんて、」

「其處にまたお目こぼしがあらうッてもんてすよ、まあ、口明をなさいまし。」

「難有う存じます。」

などは毎々の事。

二

此の次第て、露店の間は何うして八尺が五尺も無い。蒟蒻、蒲鉾、八ッ頭、おでん屋の鍋の中、混雑と込合つて、食物店は、お馴染のぶつ切飴、今川焼、江戸前取り立ての魚焼と名告を上げると、目の下八寸の鯛焼と銘を打つ。眞似はせずとも可い事を、鱗焼は氣味が惡い。

引續いては兵隊饅頭、鷄卵入の滋養麵麭。……かるめら焼のお婆さんは、小さな店に鍋一つ、七つ五つ、孫の數ほど、ちよんぼりと並べて寂しい。

茶めし餡掛、一品料理、一番高い中空の赤行燈は、牛鍋の看板て、一山三錢二錢に鬻ぐ、蜜柑、林檎の水菓子屋が負けじと立てた高張も、人の目に着く手術てあらう。

古靴屋の手に靴は穿かぬが、外套を賣る女の、卸さら〳〵と羅紗の筒袖、小間物店の若い娘が、毛糸の手袋嵌めたのも、寒さを凌ぐとは見えないて、廣告めくのが可憐らしい。

氣取つたのは、一軒、古道具の主人、山高帽。賣つても可いさうな肱掛倚子に反身の頰杖、からくた壇上に張交ぜの二枚屏風、づんどの銅の花瓶に、からびたコスモスを投込んて、新式な家庭を見せると、隣の同じ道具屋の亭主は、炬燵櫓に、ちよんど乘つて、胡座を小さく、風除けに、葛籠を押立て、天窓から、其の尻まですつぽりと安置に及んて、秘佛は何うだ、と達摩を極めて、寂寞として定に入る。

「や、此奴ァ洒落てら。」

と往來が讃めて行く。

黒い毛氈の上に、明石、珊瑚、トンボの青玉が、こつ〳〵と寂びた色で、古い物語を偲ばすもあれば、青毛布の上に、指環、鎖、襟飾、燦爛と光を放つ合成金の、新時代を語るもあり。……又合成銀と稱へるのを、大阪で發明して銀煙管を並べて賣る。

「諸君、二圓五十錢ぢや言ふたんぢや、可えか、諸君、熊手屋が。露店の賣品の値價にしては、聊か高値ぢや思はるゝぢやらうが、西洋の話ぢや、て、分るぢやらう、二圓五十錢、可えか、諸君。」

と重り合つた人群集の中に、足許の溝の縁に、馬乘提灯を動き出しさうに据えたばかり、店も何も無いのが、額を仰向けにして、大口を開いて喋る……此の學生風な五ッ紋は商人ではなかつた。

此處等へ顏出しをせねば成らぬ、救世軍とか云へる人物。

「其處でぢや諸君、可えか、其の熊手の値を聞いた海軍の水兵君が言はるゝには、可、熊手屋、二圓五十錢は分つた、ゑかしながらぢやな、此處に持合はせの錢が五十錢ほか無い。則ち此の五十錢を置いて行く。直ぐに跡金の二圓を持つて來るから受取つて置いてくれい。熊手は預けて行くぞ、誰も他のものに賣らんやうになあ、と云はれましたぞ、諸君。

手附を受取つて物品を預つて置くんぢやからあ、」

と俯向いて唾を吐いて、

「ぢやから諸君、誰にしても異存はあるまい。宜しうございます、行つて入らつしやいと云ふて、其の金子を請取つたんぢや、可えか、諸君。處でぢや、約束通りに、あとの二圓を持つて、直ぐに其の熊手

を取りに來れば何事もありませんぞ。

そうら、其が遣つて來ん、來んのぢや諸君、一時間經ち、二時間立ち、十二時が過ぎ、半が過ぎ、何うぢや諸君、聽て一時頃まで遣つて來んぞ。

他の露店は皆仕舞ふたんぢや。其て無うてから既に露店の許された時間は經過して、僅に巡行の警官が見て見ぬ振と云ふ特別の慈悲を便りに、茫乎と寂しい街路の霧に成つて行くのを視めて、鼻の尖を冷たくして待つて居つたぞ。

處へ、てくり〳〵」

と兩腕を奮んで振つて、円づぼん下の脚を上げたり、下げたり。

「向ふから遣つて來たものがある、誰ぢやらうか諸君、熊手屋の待つて居る水兵ぢやらうか。其の水兵ならばぢや、何事も別に話は起らんのぢや、諸君。然るに世間と云ふものは爰が話ぢや、今來たのは一名の立派な紳士ぢや、夜會の歸りかとも思はれる、何分か醉うてのう。」

三

「皆さん、申すまでもありませんが、お家て大切なのは火の用心てありまして、其の火の用心と申す中にも、一番危険なのが洋燈てあります。何故危い。お話しをするまでもありません、過失つて取落しまする際に、火の消えませんのが、壺の、此の、」

と目通りて、眞鍮の壺をコツ〳〵と叩く指が、掌掛けて、油煙て眞黑。

頭髪を長くして、きちんと分けて、額にふら〳〵と捌いた、女難なきにしもあらずなのが、渡世となれば是非も無い。

「石油が待てしばしもなく、發と燃え移るから起るのであります。御覽なさいまし、大坂の大火、青森の大火、御承知でもありませう、失火の原因は皆此の洋燈の墜落から轉動(と妙な對句て)を起しまする。其の危險な事は、硝子壺も眞鍮壺も決して差別はありません。と申すが、唯今もお話ししました通り、火が消えないからであります。其處で、手前商ひまするのは、ラヂーンと申して、金山鑛山に於きまして金を溶かしまする處の、爐壺にいたしますものを使つて製造いたしました、口金の保助器、内務省お屆濟みの專賣特許品、御使用の方法は唯今お目に懸けまするが、安全口金、一名火事知らずと申しまして、」

「何だ、何だ。」

と立合ひの肩へ遠慮なく、唇の厚い、眞赤な顏を、ぬい、と出して、確と睨むで、醉眼をとろりと据ゑる。

「うむ、火事知らずか、何を、」と喧嘩腰に力を入れて、もう一息押出しながら、

「燒けたら水を打懸けろい、げい。」

と嚔をするかと思ふと、印半纏の肩を聳やかして、のッと行く。新姐子がばら〳〵と避けて通す。

ト險な目を一寸見据ゑて、

「あゝ云ふ親方が火許に成ります。」と苦笑。

昔から大道店に、醉拂ひは附いたもので、お職人親方手合の、然うしたのは有觸れたが、長外套に

茶の中折、髯の生えた立派なのが居る。

辻に黒山を築いた、が北風の通す、寒い背後から藪を押分けるやうに、杖で脊伸びをして、

「躍つとるは誰ぢや、何しとるかい。」

「へい、面白づくに躍つてるぢやござりやせん。唯今、鼻紙で切りました骸骨を躍らせて居りますんで、へい、」

「何ぢや、骸骨が、踊を躍る。」

どた〱と立合の背に凭懸つて、

「手品か、うむ、手品を賣りよるぢやな。」

「へい、八通りばかり認めてござりやす、へい。」

「うむ、八通り、此の通か、はッはッ、」と變哲もなく洒落のめして、

「何うぢや五厘も投げて遣るか。」

「えゝ、投錢、お手の内は頂きやせん、材あかしの本を賣るのでげす、お求め下さいやし、」

「ふむ……投錢は謝絶する、見識ぢやな、本は幾干だ。」

「五錢、」

「何、」

「へい、お立合にも申して居りやす、へい、えゝ。特の外音聲を痛めて居りやすんで、お聞苦しう、……

……へい、お極りは五銅の處、御愛嬌に割引をいたしやす、三錢でございやす。」
「高い！」
と喝つて、
「手品屋、負けろ。」
「毛頭、お掛直はございやせん、宜しくばお求め下さいやし、三錢でごずいやす。」
「一錢にせい、一錢ぢや。」
「あッあ、推量々々。」と對手に成らず、人の環の底に掠れた聲、地の下にて躍るやう。
「お次は相場の當る法、辯ずるまでもありませんよ。……我人ともに年中螻では不可ません、一攫千金、」
お茶の子の朝飯前と云ふ……次は、」
と細字に認めた行燈をくるりと廻す、綱が禁札を卜捧げた體で、芳原被りの若いもの。別に絣の羽織を着たのが、板本を抱へて佇む。
「諸人に好かれる法、嫌はれぬ法も一所ですな、愛嬌のお守と云ふ條目。無錢で米の買へる法、火なくして暖まる法、飲まずに酔ふ法、歩行かずに道中する法、天に昇る法、色を白くする法、婦の惚れる法。」

四

「お痛え、痛え、」

尾を撮むて、によろりと引立てると、青黒い背筋が畝つて、びくりと鎌首を擡げる發奮に、手術服と云ふ白いのを被つたのが、手を振つて、飛上る。

「えゝ驚いた、蛇が喰着くてすーだが、諸君、こんな事では無い。……此の木製の蛇が、僕の手練に依つて、不可思議なる種々の運動を起すてす。急がない人は立つて見て行き給へよ、奇々妙々感心と云ふのだから。

だが、諸君、だがね、僕は手品師では無いのだよ。蛇使ひてはないのてすが、こんな處ぢや、誰も衞生と云ふ事を心得ん。生命が大切と云ふ事を辨別へて居らん人ばかりだから、其處て木製の蛇の運動を起すのを見て行き給へと云ふんだ。歯の事なんか言つて聞かしても、何の道分りはせんのだから、無駄だからね、無駄な話だから決して賣らうとは云はんてす。賣らんのだから買はんても宜しい。見て行き給へ。見物をしてお出でなさい。今、運動を起す、一分間にして暴れ出す。

だが諸君、だがね諸君、歯磨にも種々ある、花王歯磨、ライオン象印クラブ梅香散……雑と算へた處て五十種以上に及ぶてす。だが、諸君、言つたつて無駄だ、何うせ買ひはしまい、僕も賣る氣は無い、こんな處ぢや分るものは無いのだから、賣りやせん、賣りやせんから木製の蛇の活動を見て行き給へ。」

と青い帽子をづぼらに被つて、目をぎろ〳〵と光らせながら、憎體な口振て、歯磨を賣る。二三軒隣ては、人品骨柄、天晴、黒縮緬の羽織ても着せたいのが、悲愴なる聲を揚げて、殆ど歎願に及ふ。

「何うぞ、お試し下さい、ねえ、是非一回御試験が仰ぎたい。口中に熱あり、歯の浮く御仁、歯齦の弛

むだお人、お立合の中に、もしや萬一です。口の臭い、舌の粘々するお方がありましたら、此處に出して置きます、此の芳口劑で一度漱をして下さい。」

と一口がぶりと遣つて、悵然として仰反るばかりに星を仰ぎ、頭髪を、ふらりと掉つて、ぶら〳〵と地へ吐き、立直ると胸を張つて、これも白衣の上衣兜から、綺麗な半帕を出して、口のまはりを拭いて、

ト恍惚とする。

「爽かに淸き事、」

と黄色い更紗の卓子掛を、しなやかな指で彈いて、

「何とも譬へやうがありません。唯一分間、一口含みまして、二三度、口中を漱ぎますと、歯磨揚枝を持ちまして、もの〻三十分使ひまするより、遙かに快く成るのであります。口中には限りません。精神の淸く爽かに成りますに從ふて、頭痛なども立處に治ります。何うぞ、お試し下さい、口は禍の門、諸病は口からと申すてはありませんか、歯は大事にして下さい、口は綺麗にして下さいまし、ねえ、私が願ひます、何うぞ諸君。」

「此の砥石が一挺ありましたらあ、今までのよに、盥ぢやあ、湯水ぢやあとウ、騒ぐにはア及びませぬウ。お座敷のウ眞中でもウ、お机、卓子臺の上エでなりとウ、唯、こいに遣つて、すうい〳〵と擂りますウばかりイイイ。菜切庖丁、刺身庖丁ウ、向ウへ向ウへとウ、十一二度、十二三度、裏を返しまして、黒い色の此のウ細い砥ウ持イましてエ、柔かう、すいと一二度ウ、二三度ウ、撫るウ撫るウばかりイ、

此ゥ菜切庖丁が、面白いやうにイ切ますうウる、切れまあすウる。こいに、こいに、さッくりさッくり横紙が切れますやうなら、當分のう内イ、誰方樣のゥお邸でもゥ、切ものに御不自由はございまぬゥ。此のゥ細い方一挺がァ、定價は五錢のゥ處ウ、特別のゥ割引イてェ、粗のと二ッ一所に、名倉の砥を添へまして、三錢、三錢てェ差上げますゥ、剪刀、剃刀磨にイ、一度ゥ磨がせましても、二錢とゥ三錢とは右から左イ……」

と塞の目に切つた紙片を、膝にも敷物にもばら〳〵と夜風に散らして、縞の筒袖凛々しいのを衝と張つて、菜切庖丁に金剛砂の花骨牌ほどな砥を當てながら、餘り仰向いては人を見ぬ、包ましやかな毛糸の襟巻、頬の細いも人柄で、大道店の息子株。

押並んで、めくら縞の襟の剝げた、袖に横撫のあとの光る、同じ紺のだふ〳〵とした前垂の首から下げて、千草色の半股引、膝のよぢれたのを捻つて穿いて、づんぐりむつくりと肥つたのが、日和下駄が突立つた、いけずな悴が、三德用大根皮剝と云ふのを喚く。

五

其の鯉口の両肱を突張り、手尖を入ッ口へ突込んで、頸を襟へ、もぞ〳〵と擦附けながら、

「小母さん買つてくんねえ、小父的買ひねえな。千六本に、おなますに、皮剝と一所に出來らあ、内が製造元だから安いんだぜ。大小あらあ。大が五錢て小が三錢だ。皮剝一ッ買つたつてお前、三錢はするぜ、買つとくんねえ、あ、あ、あ、」

と引捻れた四角な口を、額まで濶と開けて、猪首を附元まで窘める、と見ると、仰狀に大欠伸。餘り度外れなのに、自分から吃驚して、

「はつ、」と突掛る八ツ口の手を引張出して、握拳で口の端をポン、と蓋をする、とほつと眞白な息を大きく吹出す……

いや、順に並んだ、立つたり居たり、凸凹とした何の店も、同じやうに息が白い。むら〳〵と沈んだ、燻つた、其の癖、師走空に澄透つて、蒼白い陰氣な灯の前を、ちらりちらりと冷い魂が徉徜ふ姿で、耄碌頭巾の皺から、押立てた古服の襟元から、汚れた襟巻の毛羽の中から、朦朧と顯はれて、搖れる火影に入亂れる處を、ブン〳〵と唸つて來て、大路の電車が風を立てつゝ、颯と引攫つて、チリ〳〵と紫に光つて消える。

と何の顏も白茶けた、影の薄い、衣服前垂の汚目ばかり火影に目立つて、煤びた羅漢の、トボンとした寂しい濁つた形が溝端にばら〳〵と殘る。

こんな時は、時々ばつたりと往來が途絶えて、其の時々、對向つた居附の店の電燈瓦斯の晃々とした中に、小僧の形や、帳場の主人、火鉢の前の女房などが、繪草紙の裏、硝子の中、中でも鮮麗なのは、軒に飾つた紅入友染の影に、くつきりと顯はれる。

露店は茫として霧に沈む。

忽ち、ふら〳〵と黑い影が往來へ湧いて出る、其の姿が、毛氈の赤い色、毛布の青い色、風呂敷の黃

色いの、寂しい媼さんの鼠色まで、フト判然と凄い星の下に、膝のやうな夜の中に、淡い彩して顯はれると、商人連はワヤ〳〵と動き出して、牛鍋の唐紅も、おでん屋の屋臺もくわつと氣勢か出て、白氣濃やかに狼煙を揚げる。翼の鈍い、大な蝙蝠のやうに地摺に飛んで所を定めぬ、煎豆屋の荷に、絲のやうな火花が走つて、

「豆や、煎立、煎立豆や、柔い豆や。」

と高らかに冴えて、思ひもつかぬ遠くの辻のあたりに聞こえる。

又一時、がや〳〵と口上が彼方此方にはじまるのである。

が、次第に引潮が早く成つて、――漸つと柵にかゝつた海草のやうに、土方の手に引摺られた古股引を、はづすまじとて、媼さんが曲つた腰をむづ〳〵と動かして、溝の上へ膝を摺出す、其の效なく……博多の帶を引摑みながら、素見を追懸けた亭主が、値が出來ないで舌打をして引返す……煙草入に引懸つただぼ鯊を、鳥の毛の釆配で釣らうと構へて、ストンと外した玉屋の爺樣が、餌箱を檢べる體に、財布を覗いて蹲き込む、齒磨屋の卓子の上に、お試用に掬出した粉が白く散つて、賣るもの〻鯲鬚にも薄り霜を置く――初夜過ぎに成ると、其の一時々々大道店の灯筋を、霧で押伏せらる〻間が次第に間近に成つて、盛返す景氣が其の毎に、遲く重つくるしく成つて來る。

づらりと見渡した皆が悄乎する。

勿論、電燈の前、瓦斯の背後のも、寢る前の起居が忙しい。

分けても、眞黑な油紙の上へ、見た目も寒い、千六本を心天のやうに引散らして、づぶ濡の露が、途切れ／＼にぼた／＼と足を打つて、溝緣に凍ついた大根剝の悴が、今度は堪らなさうに、凍んだ兩手をぶる／＼と脣へ押當てゝ、貧乏搖ぎを忙しくしながら、

「あ、あッ」

と又大欠伸をして、むら／＼と白い息を吹出すと、筒拔けた大聲で、

「大福が食ひてえなッ」

六

「大福餅が食べたいとさ、は、は、は、」

と直き其の傍に店を出した、二分心の下で手元暗く、小楊枝を削つて居た、人柄なだけ、可憐らしい女隱居が、黑い頭巾の中から、隣を振向いて、掠れ／＼笑つて言ふ。

其の隣の露店は、京染正紺請合とある足袋の裏を白く飜して、ほし／＼と並べた三十ぐらゐの女房で、中が一寸隔つただけ、三德用の言つた事が大道でぼやけて分らず……但し吃驚するほどの大音であつたので、耳を立てゝ、聞合はせたものであつた。

會得が行くと然も無い事だけ、をかしく成つたものらしい。

「大福を……ほゝゝ、」と笑ふ。

と其の隣が古本屋で、行火の上へ、髯の伸びた瘦せた頤を乘せて、平く蹲つた病人らしい陰氣な男が、

釣込まれたやら、

「ふふふ、」

と寂しく笑ふ。

續いたのが、例の高張を揭げた威勢の可い、水菓子屋、向顱卷の結び目を、山から飛んで來た、と押立てたのが、仰向けに反を打つて、呵々と笑出す。次へ、それから、引續いて――一品料理の天幕張の中などは、居合はせた、客交じりに、わは〳〵と笑を揺る。年内の御重寶九星貢が、恵方の方へ突伏して、けた〳〵と堪らなさゝうに噴飯したれば、苦虫と呼ばれた歯磨屋が、ウンふンと鼻で笑ふ。聲が一所で、同音に、もぐらもちが昇天しやうと、水道の鐵管を躍抜けさうな響きて、片側一條、夜が鳴つて、哄と云ふ。時ならぬに、木の葉が散つて、霧の海に不知火と見える灯の間を白く飛ぶ。

なごりに煎豆屋が、くわッと笑ふ、と遠くて凄まじく犬が吠えた。

軒の邊を通魔かしたのであらう。

北へも響いて、町盡の方へワッと拔けた。

時に片頰笑みさへ、口元に莞爾ともしない艶なのが、露店を守つて一人居た。

縦通から横通りへ、電車の交叉點を其の町盡れの方へ下ると、人も店も、灯の影も薄く歯の拔けたやうな、間々を冷い風が渡る癖に、店を一ツ一ツ一重ながら、茫と渦を卷いたやうな霧で包む。同じ燻ぶつた洋燈も、人の目鼻立ち、眉も、靑、赤、鼠色の地の敷物ながら、宛然鶏卵の裡のやうに、渾沌とし

てふうわり街燈の薄い影に映る。が、枯れた柳の細い枝は、幹に行燈を點けられたより、却つて此の中に、處々すつきりと、星に蒼く、風に白い。

其の根に、呉蓙を一枚の店に坐つたのが、件の婦で。

年紀は六七…三十に先づ近い。姿も顏も窶れたから些と老けて見えるのであらうも知れぬ。綿らしいが、銘仙縞の羽織を、なよ〳〵とある肩に細く着て、同じ縞物の膝を薄く、無地ほどに細い縞の、これだけはお召らしいが、透切れのした前垂を締めて、晝夜帶の胸ばかり、淺黄の鹿子の下締なりに、乳の下あたり膨りとしたのは鼻紙も財布も一所に突込むだものらしい。

雜と一昔は風情だつた、肩掛と云ふのを四つばかりに疊んで敷いた、其を、褄は深いほど玉は冷たさうな、膝の上へ掛けたら、と思ふが、察するに上へは出せぬ寸斷の繼塡らしい。火鉢も無ければ、行火もなしに、霜の素膚は堪へられまい。

黒繻子の襟も白く透く。

油氣も無く擦切るばかりの夜嵐にばさついたが、艶のある薄出な丸髷がツくりと、焦茶色の絹のふらしてんの襟卷、房の切れた、男物らしいのを細く卷いたが、左の袖口を、ト乳の上へ悄乎と捲き込むだ袂の下に、利久形の煙草入の、裏の緋鹽瀬ばかりが色めく、が其も褪せた。

生際の曇つた影が、瞼へ映して、面長なが、然して瘠せても見えぬ。鼻筋のすつと通つたを、横に掠めて後毛をさらりと掛けつゝ、ものう氣に拂ひもせず…切の長い、睫の濃いのを伏目に成つて、上氣

して乾くらしい脣に、吹矢の筒を、一寸含んで、片手で持添へた雪のやうな肱を搦む、唐縮緬の筒袖のへりを取つた、繼合はせものゝ其の、緋鹿子の媚かしさ。

七

三枚ばかり附木の表へ、(一くみ)も假名で書き、(二せん)も假名で記して、前に並べて、きざ柿の熟したのが、ころ／＼と揃つたやうな、昔は螺が尼になる、これは紅茸の悟を開いて、ころりと參つた張子の達磨。

目ばかり黒い、けば／＼しく眞赤な禪入を、木兎引の木兎、で三寸ばかりの天目臺、すく／＼とある上へ、大は小兒の握拳、小さいのは團栗ぐらいな處まで、づらりと乘せたのを、其の俯目に、ト狙ひながら、件の吹矢筒で、フッ。

カタリと云つて、發奮もなく引くりかへつて、輕く轉がる。其の次のをフッ、カタリと飜る。續いてフッ、カタリと下へ。フッ／＼、カタ／＼カタと毛を吹くばかりの呼吸づかひに連れて、五つ七つ立處に、パッ／＼と石鹼玉が消えるやうに、上手にてんぐり、くるりと落ちる。

落ちると、片端から一ツ／＼、順々に又並べて、初手からフッと吹いてカタリと言はせる。……同じ事を、絶えず休まずに繰返して、此の玩弄物を賣るのであるが、玉章もなし口上もなして、ツンとしたやうに默つて居るので。

霧の中に、笑の虹が發と渡つた時も、獨り莞爾ともせず、傍目も觸らず、同じやうにフッと吹く。

カタリと轉がる。

「大福、大福、大福かい。」

と些と粘つて訛のある、キリ〱と勘定つた高い聲で、亀裂を入らせるやうに霧の中をちよこ〱走りて、玩弄物屋の婦の背後へ、ぬつと、鼠の中折を目深に、頭首を覗いて、橙色の背廣を着 小造りなのが立つたと思ふと、

「大福餅、暖い！」

又疳走つた聲の下、一寸と蹲む、と疾い事、筒服の膝をとんと揃へて、横から當つて、婦の前垂に附着くや否や、兩方の衣兜へ兩手を突込むで、四角い肩して、一ふり、ぐいと首を振ると、ぴんと反らした鼻の下の髯とゝもに、砂除けの素通し、ちよんぼりとした可愛い目をくるりと遣つたが、ひよんな顏。

……と云ふものは、其の、

「……暖い……」―を機會に、行火の箱火鉢の蒲團の下へ、潜込ましたと早合點の膝小僧が、すぼりと氣が抜けて、二ツ、ちよこなんと揃つて、灯に照れたからである。

橙背廣の此の紳士は、通り掛りの一杯機嫌のぞめきでも何でもない。冷かし數の子の數には漏れず、格子から降ると云ふ長い煙管に縁のある、煙草の脂留、新發明螺旋仕懸ニッケル製の、巻莨の吸口を賣る、氣經な人物。

自から稱して技師と云ふ。

て、衆を立たせて、使用法を辯ずる時は、こんな輕々しい態度のものではない。

下目づかひに、晃々と眼鏡を光らせ、額で睨んで、帽子を目深に、然も歷々が忍びの體。冷々然として落着き澄まして、咳さへ高うはせず、……其のニコチンの害を説いて、一吸の卷煙から生ずる多量の沈澱物を以て混濁した、恐るべき液體をアセチリンの蒼光に翳して、屹と試驗管を示す時の如きは、何某の教授が理化學の講坐へ立揚つた如く、風采四邊を拂ふ。

其處で、公衆は、唯僅に硝子の管へ煙草を吹込むで、ぷく〳〵と遣ると水が濁るばかりだけれども、技師の態度と、其の口上のきぱ〳〵とするのに、ニコチンの毒の恐るべきを知つて、戰慄に及んで、五割引が盛に賣れる。

なか〳〵何うして、齒科散が試驗藥を用ゐて、立合の口中黃色い齒から拭取つた口鹽から、立處に、黴菌を躍らして見せる處の比ではない。

よく賣れるから、益々得意で、澄まし返つて説明する。

が、夜が稍深く、人影の薄く成つた恁うした時が、技師大得意の節で、今まで嚔を堪へたやうに、むづ〳〵と身震ひを一つするのと、固く成つて居た卓子の前から早くもがらりと體を碎いて、飛上るやうに衝と腰を輕く、突然ひよいと隣のおでん屋へ入つて、煮込を一串引攫ふ。

此奴を、フッ〳〵と吹きながら、すぺりと古道具屋の天窓を撫でるかと思ふと、次へ飛んで、あの涅槃に入つたやうな、風除葛籠をぐら〳〵搖ぶる。

八

爾時きやつ〳〵と高笑、靴をぱか〳〵と傍へ外れて、何の店と見當を着けるでも無く、背を屈めて蹲つた婆さんの背後へ一寸と踞んで、

「寒いですね。」

と聲を掛けて、トン〳〵と肩を叩いて遣つたもので。

「きやつ〳〵、」と又笑ふて、横歩行きにすら〳〵〳〵、て、居合はす、古女房の背をドンと啖はす。

突然、年増の行火の中へ、諸膝を突込んで、けろりとして、娑婆を見物、と云ふ澄ました顏色で、當つて居る。

露店中の愛嬌もので、總籬の柳繚さん。

即ち又、其の傳て、大福暖いと、向ふ見ずに遣つた處、手遊屋の婦は、腰のまはりに火の氣が無いので、膝が露出しに大道へ、吳蓙の薄霜に間拍子も無く並んだのである。

橙色の柳繚子、氣の拔けて肩を窄めて、ト一つ大な達摩を眼鏡でぎくり。

婦は澄ましてフッと吹く……カタリ……

はッと頤を引く間も無く、カタ〳〵〳〵と殘らず落ちると、直ぐに、其のへりの赤い筒袖の細い雪て、一ッ一ッ拾つて並べる。

「堪らんですね、寒いですな、」

と髯を捻つた。が、大きに照れた風が見える。

斜違に之を視めて、前歯の金をニヤ〳〵と笑つたのは、總髪の大きな頭に、黑の中山高を堅く嵌めた、色の赤い、額に畝々と筋のある、頰骨の高い、大顏の役人風。迫つた太い眉に、大い眼鏡て、胡麻鹽髯を貯へた、頤の尖つた、背のづんぐりと高いのが、絣の綿入羽織を長く着て、霜降のめりやすを太く着込むだ巌丈な腕を、客商賣と袖口へ引込めた、其の手に一條の竹の鞭を取つて、バタ〳〵と叩いて、三州は岡崎、備後は尾の道、肥後は熊本の刻煙草を指示す……

「内務省は煙草專賣局、印紙御貼用濟、味は至極可えて、喫んで見た上て買ひなさい。大阪は安田銀行、第三藏庫の擔保品、今度、同銀行藏掃除に就いて拂下げに相成つたを、當商會に於て一手販賣をする、低當流れの安價な煙草ぢや。喫んで芳う、香味、口中に遍うして而して其の聊も脂が無い。私は痰持ぢやが、」

と空咳を三ツばかり、小さくして、竹の鞭を袖へ引込め、

「此の煙草を用ゐてから、頓と惱みを忘れた。がぢや、荒くとも脂がありとも、唯強いのを望むと云ふ人には決して此の煙草は向かぬぞ。香味あつて脂が無い、低當流れの刻は何うぢや、」

と太い聲して、些と充血した大な瞳をぎよろりと遣る、其の風采、高利を借りた覺えがあると、天窓から水を浴びさうなが、思ひの外、溫厚な柔和な君子て。

店の空いた時は、其處等の小兒をつかまへて、

「あ、然ぢやての、」などゝ役人口調て、眼鏡の下に、一杯の皺を寄せて、髯の上を撫て下げ〳〵、滑稽けた話をして喜ばせる。

其の小父さんが、

「いや、若いもの。」

と云ふ顔色て、竹の鞭を、ト笏に取つて、尖を握つて捻向きながら、帽子の下に暗い額て、髯の白いに、金が顯な北叟笑。

附穂なさに振返つた技師は、これを知つて倘ほ照れた。

「今に御覧じろ。」

と遠灯の目ばたきをしながら、揃へた膝をむく〳〵と搖つて、

「何て、寒いてしやう、おゝ寒い。」

と金切聲を出して、ぐたりと左の肩へ寄凭る、……骸の重量が、他愛ない、暖簾の相撲て、ふわりと外れて、ぐたりと膝の崩れる時、ぶる〳〵と震へて、堅く成つたも道理こそ、半纏の上から觸つても知れた。げつそり懐手をして一寸も出さない、すらりと下つた左の、其の袖は、何も支えぬ、婦は片手が無いのてあつた。

九

最う此の時分には、其方此方て、徐々店を片附けはじめる。まだ九時些と廻つたばかりだけれども、

師走の宵は、夏の頃の十二時過ぎより歸途を急ぐ。て、處々、張出しが除れる、傘が窄まる、其の上に冷い星が光を放つて、ふつ〳〵と洋燈が消える。突張りの白木の柱が、すく〳〵と夜風に細つて、積んだ棚が、がた〳〵崩れる。其の中へ、炬燵が化けて歩行き出した體に、むつくりと、大な風呂敷包を背負つた形が耀上る、消え殘つた灯の前に、霜に燒けた脚が赤く見える。

中には荷車が迎に來る、自轉車を引出すのもある。年寄には孫、女房には其の亭主か、何の店にも一人二人、人數が殖ゑるのは、より〳〵に家から片附けに來る手傳、……と其ればかりては無い。思ひ〳〵に氣に合つたのが、歸際の世間話、景氣の沙汰が主なもので、

「相變らず不可ますまい、然う云つちや失禮てすが。」

「否、思つたより、昨夜よりは些と増てすよ。」

「又私どもと來た日にや、お話に成りません。」

「御多分には漏れませんな。」

「最う休まうかと思ひますがね、其でも出つけますとね、一晩でも何だか皆さんの顔を見ないぢや氣寂しくつて寢られません。……無駄と知りながら出て來ます、へい、油費てさ。」

ト一處に團まるから、何の店も敷物の色ばかりて、枯野に乾した襁褓の光景、七星の天暗くして、幹枝盤上に霜深し。

まだ突立つたまゝて、誰も人の立たぬ店の寂しい灯先に、長煙草を、と横に取つて細いぼろ切れを引掛けて、のろ〳〵と取つたり引いたり、脂通しの針線に黒く畝つて搦むのが、恁る折から歯磨屋の木蛇の運動より凄いのであつた。

時に、手遊屋の冷かに艶なのは、

「寒い。」と技師が寄凭つて、片手の無いのに慄然としたらしい其の途端に、吹矢筒を密と置いて、唯其だけ使ふ、右の手を、すつと内懐へ入れると、繻子の帯がきりゝと動いた、其のまゝ、茄子の挫げたやうな、褪せたが紫色の小さな懐爐を取つて、默つて術と技師の胸に差出したのである。

寒くば貸さう、と云ふのであらう。……

擧動の唐突な其の上に、又ちらりと見た、緋鹿子の筒服の細いへりが、無い方の腕の切口に、べとりと血が染むだ時の狀を目前に浮べて、ぎよつとした。

何うやら、片手無い、其の切口が、茶袋の口を糸でしめたやうに想はれたのである。

「其には及ばんですよ、えゝ、何の、御新姐。」と面啖つて我知らず口走つて、ニコチンの毒を說く時のやうな眞面目な態度に成つて、衣兜に手を突込んて、肩をもそ〳〵と搖つて、筒服の膝を不狀に膨らましたなりて、のそりと立上つたが、忽ちキリ〳〵とした聲を出した。

「嫁娶々々！」

長提灯の新しい影て、すつすと、眞新しい足袋を照らして、紺地へ朱て、日の出を染めた印半纏の揃衣

を着たのが二十四五人、前途に松原があるやうに背の其の日の出を揃へて、線路際を靜に練る……

結構さうなお爺さんの黒紋着、意地の惡さうな婆さんの黄色い襟も交つたが、男女合はせて十四五人、いづれも俥で、星も晴々と母衣を刎ねた、中に一臺、母衣を懸けたのが當の夜の縁女であらう。

黒小袖の肩を圓く、但し引緊めるばかり兩袖て胸を抱いた、眞白な襟を長く、のめるやうに俯向いて、今時は珍らしい、朱鷺色の角隱しに花簪、櫛ばかりでも頭は重さう。ちらりと紅の透る白襟を襲ねた端に、一筋キラ〱と時計の黄金鎖が輝いた。

上が身を堅く花嫁の重いほど、乘せた車夫は始末の成らぬ容體なり。妙な處へ楫を極めて、曳据えるのが、がくりと成つて、ぐる〱と磨骨の波を打つ。

十

露店の目は、言合はせたやうに、きよと〱と夢に辿る此の桃の下路を行くやうな行列に集まつた。

婦も一寸振向いて、（大道商人は、いづれも、電車を背後にして居る）蓬萊を額に飾つた、其の石のやうな姿を見たが、衝と向をかへて、其處へ出した懷爐に手を觸つて、上手に、片手でカチンと開けて、熟と俯向いて、灰を吹きつゝ、

「無駄だねえ。」

と淸い聲、冷かなものであつた。

「弘法大師御夢想のお灸であすソ、利きますソ。」

と寢惚けたやうに云ふと齊しく、此も嫁入を恍惚視めて、恰も其の前に立合はせた、つひ居廻りて湯歸りらしい、島田の亂れた、濡手拭を下げた娘の裾へ、矢庭に一束の線香を押着けたのは、あるが中にも、幻のやうな坊樣て。

つくねんとして、一人、影法師のやうに、ぴよろりとした黒紬の間伸びた被布を着て、白髮の毛入道に、ぐたりとした眞綿の帽子。扁平く、薄く、然も大ぶりな耳へ垂らして、環珠數を掛けた。鼻の長い、頤の こけた、小鼻と目が窪んで、飛出した形の八の字眉。大な口の下脣を反らして、がッくりと拔衣紋。長々と力なげに手を伸ばして、かじかまつた膝を抱へて居たのが、フト思出した途端に、居合はせた娘の姿を、男とも女とも辨分へる隙なく、馴れてぐんなりと手の伸びるまゝに、細々と煙の立つ、其の線香を押着けたものであらう。

此の坊樣は、人さへ見ると、向脛なり踵なり、肩なり背なり、燻ぽつた鼻紙を當てゝ、其の上から線香を押當てながら、

「おだゝ、おだゞ、だゝぶだふだふ、」と齒の無い口でむぐ〱と唱へて、

「それ、利くてあしよ、此處て點えるは施行ぢやいの。艾入らずてあす。熱うもあすまいがの。それ利くてあしよ。利いたりや、利いたら、しよな〱と消して置いて、又使ふてあすッ。それ利くてあしよ。」

と嘗め廻す體に足許なんぞ、じろ〱と見て商ふ。高野山秘法の名灸。

矢庭に長い手を伸ばされて、はつと後しざりをする、娘の駒下駄、靴やら冷飯やら、つひ目が疎いか

して見分けも無い、退く端の褄を、ぐいと引いて、

「御夢想のお灸であすッ、施行ぢやいの。」

と鯰が這ふやうに黒被布の脊を乗出して、ぐり〳〵と灸を押着けたもの、堪らうか。

「あれえ、」

と叫んで、ついと退く、ト脛が白く、横町の暗に消えた。

坊様、眉も綿頭巾も、一緒くたに天を仰いで、長い顔できよとんとした。

「や、聊かお灸でしたね、きやッ、きやッ、」

と笑ふて、技師は此を機會に、殷鑑遠からず、と少しく窘んで、浮足の靴ポカポカ、ばら〳〵と亂れた露店の暗い方を。……

さて此處に、膃肭臍を鬻ぐ一漢子！

板の如くに硬い、黒の筒袖の長外套を、痩せた身體に、爪尖まで引掛けて、耳のあたり襟を立てた、帽子は被らず、頭髮を蓬々と抓棄てたが、目鼻立の凛々しい、頰は窶れたが、屈強な壯佼。

澁色の逞しき手に、赤錆ついた大出刃を不器用に引握つて、裸體の婦の胴中を切放して燻したやうな、赤肉と黒の皮と、寸々に、血筋を縢つた中に、骨の薄く見える、やがて一抱もあらう……頭と尾ごと、丸漬けにした膃肭臍を三頭、縦に、横に、仰向けに、胴油紙の上に乘せた。

正面の肋のあたりを、庖丁の脊でひた〳〵と叩いて、

「世間てはてすわ、めつとせいはあるが、膃肭臍は無い、と云ふたりするものがあるてすが、めつとせいにも膃肭臍にも、眞個のもんは少いてすが。」

無骨な口で、

「船に乘つとるもんでもが……現在、膃肭臍を漁つた處で、其が膃肭臍、めつとせいと云ふ區別は着かんもんて。

世間て云ふめつとせいと云ふから雌てせう、勿論、雌もあれば、雄もあるてすが。

孰が雌だか、雄だか、黑人にも分らんて、唯此の前齒を、」

と云つて推重なつた中から、ぐいと、犬の顏のやうて眞黑なのを擡げると、影干の臭が紛として、内へ反つた、しやくふやうな、霜柱の如き長い齒を、あぐりと剝く。

「此の前齒の處ゥを、上下噛合はせて、一寸の隙も無いのうを、雄や、(と云ふのが北國邊のものらしい)と云ふてすが、一分一寸てすから、開いて居ても、塞いて居ても分らんのうてす。

私は辯舌は拙いてすけれども、膃肭臍は確てす。膃肭臍と云ふものは、矢鱈むたらにあるものてはない。東京府下にも何十人賣るものがあるかは知らんてすがね。矢鱈むたらあるもんか。」

と何か然も不平に堪えず、向腹を立てたやうに言ひながら、大出刀の尖て、纖維を掬つて、一角の如く、薄くねつとりと肉を剝がすのが、……遠洋漁業會社と記した、まだ油の新しい、黄色い長提灯の影にひく〱と動く。

其の紫がゝつた黒いのを、若々しい口を尖らし、むしや〳〵と嚙んで、
「二頭かのは賣つて了ふたてすが、まだ一頭、腦味噌もあるてすが。腦味噌は腦病に利くンのてすが、膃肭臍の效能は、誰ても知つて居る事て言ふがものはない。
疑はずにお買ひ下さい、まだ確な證據と云ふたら、後脚の爪てすが、」
ト大様に視めて、出庖を逆手に、面倒臭い、一度に間に合はせう、と狙つて、づるりと後脚を擡げる、
藻掻いた形の、水掻の中に、空を摑んだ爪がある。
霜風は蠟燭をはた〳〵と搖る、遠洋と書いた其の目標から、濛々と洋の氣が虛空に被さる。
里心が着くかして、寂しく二人ばかり立つた客が、あとしさりに成つて……やがて、はら〳〵と急いて散つた。
出刄を落した時、赫と顏の色に赤味を帶びて、眞鍮の鉈豆煙管の、眞中を無手と握つて、糸切齒て嚙むが如く、引啣えて、
「うむ、」
と、何故か呻る。
處へ、ふわ〳〵と橙色が露はれた。脂留の例の技師て、
「何うですか、膃肭臍屋さん。」
「いや、」

と唯言つたばかり、不愛想。技師は親しげに擦寄つて、

「昨夜は、飛だ事でしたな……」

「お話に成りません。」

「一體何の事ですか、」

「何や云うて、彼や云うて、まるでお話しに成らんのですが。誰が何を見違へたやら、突然しらべに來て、膃肭臍の中を捜すんですぞ、眞白な女の片腕があると言うて。……」

（完）

和歌

尾上柴舟選

岩谷莫哀

○

帽子かぶりいそ〳〵として家を出てゐさていづかたへ足をはこばむ

年くれぬまづしき書架をながめつゝ思ふにもあらぬ物思ひする

心ゆるす友にもあかし得ぬほどの秘密のなきは淋しかりけり

偏狂もおほかたにしていざこれより世のつねびとの中間入りせむ

死なむと思ふほどのくるしみいまだなしそれが味ひたくなりにけり

やう〳〵に吾の心のさだまれば亡きちゝはゝのおもはれて來ぬ

更けわたる都の夜はあはれなり大建築の上に星見ゆ

ばち〳〵と電車が殘す火花より黄昏れそむる街のどよめき

○　佐野光雄

風は吹く落葉はみだる林間に月ただ一つ憂ひてぞ居る

旅に來て心幼くなりにけり指を吸ひつゝ夕べ戶に凭る

いとせめて兄てふ責(せめ)のこればかりなかりせばなどおもひさしぐむ

森に來てたゞわけもなくむくろをば大き木を選りよせにけるかな

われのことよくあやまたずくみとれる友のひとりに心なぐさむ

一服の煙草にさへもめまひするものゝ疲れのしるきこのごろ

父母を忘れてひとり旅にあり安しといふもそれほどのこと

はつ〳〵とくべたての炭鳴り止むを見てまた物を言ひたげにする

○　芝野花

わがとまりわが行くところかなしみは一縷の絲

とまつはりて來も

あはれあはれ三十にして名をたつと兼ねてここ
ろにちかひしものを

なつかしき名にもあるかな時雨時雨汝が落葉を
うつ音よろしも

ひき來つるかなしみどもの面はぎて打ちても見
たき年の暮かな

風寒し如何なればわれたゞひとりさびしき道を
辿り來にけむ

○　丸山英

試驗紙の變る磁石の鐵を吸ふ酸素の燃ゆるなべ
てたゞごと

夢なくて明けしは淋し末枯たる大野の果に佇む
に似て

附木もて造れる小さき水車こはれし機の弱き悲
しみ

言ふことのくだくしさよ穴守の稻荷につゞく
華表にも似て

草といふ小草みな秋の色に生く枯るといはんは
うとましきかな

われ今日も生てふ水脈の中にある蟻の大河を流
さるゝ如

○　玉野光二郎

木枯のすさぶ街路の中程の水の溜りに映る青空

うす紅き林檎に光る白刃あて靜かに動く手の美
しさ

水色の冬空寒く晴れ渡る中にさびしきひとつら
の霧

初雪や君が小窓の下に敷く白き小石のしめやか
に濡る

さらさらと雪ふり出でぬ稽古屋に琴のなるとき
灯のともるとき

○　下村淳

我がペンのうごきにつれてえがかるる黒きみに
くき文字のさびしさ

かざしたる手に心ようしむ火氣をむさぼる冬の
夜のうら寒さ

鉛などかぶりしごとくもつかれけるかしらに更け
し夜の空氣しむ

ペンもてばしみじみ冬の朝の氣の指の尖よりし
みきたるかな

火の氣なき火鉢の灰のさびしうも飢ゑてかへり

し目にうつりけり

○　　　飛川晶[illegible]

冬ざれの野に悲しみてかへり來ぬ小さきわが家
に灯のともるころ

うら枯れし灌木に來て鳥なけり音なく暮るる冬
の野のいろ

悲しみを涙と共に捨てて來し落葉林に月あをう
落つ

つつましう物縫ふ君が白き手にまつはりてあり
夜の悲しみ

○　　　今村和平

午前二時ふと夢醒めて君想ふ病院の夜ぞいと靜
かなる

病室のカーテンにさす太陽の淡き光よ冬とはな
りし

ひやゝけきベットの上に夢を見る夢は昔の溫か
きこと

○　　　正木哲夫

あかあかと灯をともしつゝ來し方を限りもあら
ず思ひ續くる

かへりみるに餘り寂しき過去なれば眼ふたぎて
胸押してゐる

幼兒は泣きて求むる母のありふとし泣かるゝ我
誰呼ばむ

○　　　龜山敬外

ふるさとの丘の上飛ぶ青鷺の一群さへも思ひい
づるや

王城にひとしき家にわれ住みて悲しき話きゝお
ぼへにし

若き日はゆかむとぞする悲しみをいとはるかに
もかへりみるべく

日を浴びて海はもだせり山もまたもだせり吾も
云ふことはなし

○　　　細井魚袋

曲り曲りいづくへゆくか知らぬ川我がさすらひ
によく似たるかな

木の葉皆落ちつくしける初冬のもの靜かなる山
にねころぶ

つまさきのすこし破れし靴はきて重たき思ひ一
人町ゆく

雨の日の港の市街はうらがなし船の底うつ鐵錨
の音

白げたる甲板の上にこの若きかなしみ多き子は
ゐねてあり(以下旅出して)
年老いし古郷の父母を思ひつゝ深山の中に旅を
つゞくる
秋の晝低ききたなき大間間の町を我れゆく旅人
なりき
大海の唸りの中に我がすてし煙草の殼は輕くた
ゞよふ
さゝやかの事にみ母をとがめたるあとしばらく
はさびしかりけり
けだものの疲れて山にねる如く物思ひする身を
投ぐるかな

○　千住徳治

草木みなねむれる丘にみぞれ降る初冬の日の暮
のしづけさ
ちゝ色のペンキの家にみぞれふるうらがれし日
のもののかなしさ
いたましき涙のあとを見るごとし嵐のあとのあ
はれなる月

○　武田青眼

石多き險しき徑につまづきぬかゝる時なほ物を
思へり
藥の香身にせまりくる病院の冷めたき椅子に物
思ひ出づ
風なき日白々と降る秋の日を吸ひて流るゝ大野
の流

○　外山廉三

人は皆ふかく寢入りぬ病床にめざめ居る身のあ
ゝやるせなき
身にせまるかなしみもなく一日を送り得し身の
うらやすきかな
神よ神よすがりも得ざる不信徒に大なる力感ぜ
しめ給へ

○　石塚紫園

白き灰少し積れる火鉢にもこの北國の寂しさの
這ふ
街に逢ふ女のまみの冷やかさ其れにも似たる雪
の山々

○　古木青葉

窓掛の白きに朝の陽のにほふ眼を病むごとき室へ
のありさま
瀨戸物の水さしひとつ寢覺めたるわが枕邊にう

るほへる朝

○　乾山茶花

ほろ〳〵と涙ながるゝ温かさそのこゝろよさ今日もまた泣く

夕されば青き木原の靜けさに吸はるゝ如くけふもいて行く

○　香取秋二

やう〳〵に今日のひと日も暮れぬとて柱暦をそゝくさと剝ぐ

○　竹田實雄

力なき冬の日ざしのしら〳〵と築土にあたりまつはるが愛し

風寒き木立の中に身をおきてひろがり震ふ旋律を聞く

○　武田秋華

驚かす親しき人は二人までぞ病みますと國の老けき母の

夕されば魂ぬけし人のごととよみの中にうち浸りをり

○　村井屛山樓

頭痛など持てる女の顏の色今ストーブは燃えさかるなり

吹く風に走る木の葉を追ふがごと冬の朝を里立ちて來ぬ

○　井田葉歌

小石など投げては一人やるせなき野の一日をすごすかなしさ

なにとなくうとめる君が笑聲ふと耳にあり目覺たる時

○　伊藤綠水

この心つゝまんとして殊更に酒をとる時冬の夜更けぬ

淋しさに年の迫れる夜の街のとよみの中にあゆみ出しかな

○　西村孤舟

別れきて人一人なき陸橋の夜の淋しさをこつこつとゆく

君に得しこの悲しみのつくる日の來む日をおそれ今日も淋しむ

○　高鹽背山

古城の堀に釣してさびしさも知らずありにし頃の戀ひしさ

初冬の夜明の麥出冷え〳〵と風ふく中に鳩のおりゐる

○　松井綠水

潮の香によいたる如くくづれたる赤土山の冬をさく花

○　岡田重一郎

いと小さき墓いと多く列びたつ山の畑など汽車にして見る

○　林白愁歌

教會の旗にまつはるいさゝかの風が乗せ來し冬のさびしさ

○　太田豐惠

はらばひて煙草の煙見てありぬ秋の眞晝の物靜さよ

○　小別當小三郎

夜芝居のどよめき遠くきゝながら人なき道をゆきもどりする

○　津田月穗

うつけ心今更何の驚きぞ己(おのれ)がふみし地のおちしごと

○　落合夕空

一群の鳥なき過ぎし野の路をものおもふ子は思ひつゝゆく

○　廣瀨涼眉

椎の葉に夜風そよげばふと我れにうら安からぬおもひ出のあり

○　桑田寶

秋の日の淡き悲しみその中に佛を刻(きざ)みありけりわれは

○　山邊溪韻

しばらくは主人(あるじ)といへるいましめに旅もおもはぬ寂しきこゝろ

○　赤松星岬

おもふことなかば語りて別れたるかの八月の森の黄昏

○　林白愁歌

戸を引けばガラスにうつる月光に落葉ぞ見ゆる君いまだ來ず

○　香取秋二

何者にか追はれし心地街を出て海邊に來たりさて雲を見る

○

母逝きし事に少しのかゝはりもなき事思ひ悲し

みてあり

○

海越えてそよかぜしたる八月の晝の埠頭に見し少女はも　眞下茅花

朝風に草はそよげど羅のごときうす水色の空の靜けさ

○

結場小谷

人々にすかるゝ子ともならむかと好まぬ酒をのみにゆくかな

○

村上白愁子

醜かるあまたの人の歩み行く都會に棲みて歌謳ふかな

應募和歌は東京小石川區原町百三十三尾上柴舟宛の事

俳句

氷　高田蝶衣選

墓前有梅出づれば野路の薄氷　湧漁聲

氷るやと師の訪ひませり子路が門　同

塾制の起因はあれど意氷る　同

淡路より京へ句稿の氷りけり　同

氷割る乾鮭の門に響あり　同

深夜讀書

氷るよに當壚の人の聲遠し　同

石場者氷伐場に匿れ在り　月樗

氷阪あやまてる雪舟荷月に積む　同

氷谿三越えも爐裏の情に來し　同

氷叙す水荘記父が戀を識る　同

奇巖界樹氷柱簾の月も奇に　同

山居一筧水得んと氷打つ夕　同

氷る恐る水車響や夜半の粉屋　明兮

壁干すに焚火や寸涉の垂氷して　同

笠つれば簑もす釘や垂氷軒　同
秘め酒に夜業勵むを氷りけり　同
死ねと呼ぶ魔瀧は涸れて氷りけり　同
氷上に馬いたはれる窓に見て　同
大衆の垢離場七池氷りけり　雨郎
奇策容れず氷上兵馬渡すこと　同
奔流の餘勢閉さぬ湖氷かな　同
鴨場跡とも岸邊見る氷かな　同
昨夜荒れの猶耳に渚氷踏む　同
氷湖抱く倒寫の樹姿瓦壁など　木犀
移り住んで氷上に廬や鮒も釣る　同
市日果てゝ離散の轍氷りけり　同
鳥誘ふ樹形沼も氷りけり　同
隠亡が殘り火捨つる氷かな　同
置けば氷る厨具に辷る皿のあり　不騒改鬼見愁
氷上を運びしと肌そゝくれ木　同
木の葉石の名どころ谿間花氷　同
柑一樹只黄に氷る池畔來し　同
鍰切りて賣る刀も見つ薄氷　同
機尺も織りけん頃を落つ氷柱　影法師
不漁戻りを酒肆に寄る廨網氷る　同

結氷に舟も出ず背て運ぶ炭　同
浪かゝる松も街道も氷かな　同
かせ買の見倒し振や落つ氷柱　同
捨てられし意地氷塊と解け難き　哭鬼哉
氷る江や絶望に立つその夜半　同
離愁記に氷の胸と序歌してむ　同
厚氷頑迷の師に疎遠詫ぶ　同
楠の根の氷りて石になる夜かな　但翠
腰簑に氷る音ある夜漁かな　同
錐戸や針磨ぐ夜々の灯氷る　同
氷る夜や産婆に化けて來し狸　同
尖り杉に峯も氷ると思ひけり　都月
猿遊びし岩床も夜を氷りけり　同
小舍に入るゝ馬車の灯を消す氷哉　同
石牢の吹き水氷る御山風　同
祝ぎ更けてすて置く器具の氷りけり　五黄
鐘氷る夜半なり君が破門想ふ　同
風雨ありて沖を氷らぬ湖面かな　同
覺むる折々ふくむ藥も氷る夜や　猥子
漁利はあれど氷らぬ海に行かまくす　同
試し投げの石もとざゝれ氷るかな　同

納め奉書渡くに夙起や初氷　不寐庵
湖氷り初めぬ四山も誘ひ寐に　同
鳥たちし波紋氷れとさす月か　同
夜泊して江の月氷るとも吟に　寒泉
氷る夜を狐に借りし木の葉錢　同
負け菲惜さにもあらず氷る夜を默す　同
篆刻や花なき瓶の氷る夜に　十黄
放馬して湖氷をためす軍使かな　同
厨の戸氷るを湯もてあく朝な　同
日のくれや古潭の氷黑ずめり　雪骨
山人の怒に觸れし氷柱かな　同
猿悲し彼の猿酒の氷りけむ　同
氷湖庭よろしくに漁家の薪積む　栗川
新寮規掲示に見たり初氷　同
虛を衝かん計も北湖の氷ればや　同
薄氷や村の老人今日も逝く　唯郎
西風吹いて船去來なし瀉氷る　同
去らざりし燕死ぬあまた川氷る　同
梅干のわりなきを飯も氷りけり　枯月
止火せしそこら這ふ水氷りけり　同
魚扠も家の魔除にや垂氷軒並に　同

節刀をおびて氷の湖渡る　摘星辰
刀鍛冶の口傳す夜半や氷晴　同
氷面鏡飛ぶ灰色の蛾を見たり　同
湖魚贈るに笹葉に氷など配す　風車
軒風呂の湯氣に氷柱や落ちにけん　同
鍋尻背むる火舌の照りも壺氷る　鶯樓
聽法の崩る下駄音や夜の氷　同
水涸の瀑裏不動を刺す氷柱　橙重
良きを着て足袋先濡れも薄氷に　同
白樺の疏林古沼氷りけり　無腸子
大熊のうち試る氷かな　同
船の眞水掟嚴しきに氷りけり　琳琅居
手拭氷りて乾鮭の如き炙りけり　同
山下りる獵夫の蓑に垂氷かな　蓮意
隱家や氷柱地上に着かんとす　同
髯氷る湖北の族や目の光る　非析
乾坤只ならず氷柱何窟や　同
夜水朝水氷るに打たぬ町規哉　鷺江
吹き尖る巖の根白き氷かな　同
舟に見る橋の二柄目の氷柱かな　水竹
戸樋尻の垂れかゝる繩に氷かな　同

涙筆の氷を嚙むも恨かな　夜光
貧乏な咳すれば氷柱響く音　同
この池の氷を解きし妖婆かな　石楠花

雲濱城跡

殿閣や化生の柳氷柱せり　同
山の尾の湖より出てゝ氷雲　紫皐
涸れ瀧の上の大景や氷る湖　同
舟綱の舷をたれ居る氷柱かな　秋虹
麓訪へば溫泉止りのことや山氷る　山彦
この子等は國患を知らず氷わる　三鱗
偶に啼かぬ蛙捿む池氷りけり　白刄
うつゝ寝や厨に氷叩く音　水馬
寒獄の日をや重ねし海氷る　春雨
氷山や北を指したる羅針盤　蒼蛇
猫寝しも夜焚竈や氷る朝　句人
妓に狎れて手水の氷割らせけり　枕水
僻氣なる師の事觸れも鉢に氷れるを　銀蛇
氷原や毛深き犬を飼ふ主　三脊
隣國と隙して氷る軍備かな　石幽
茶器氷れば主庭木に人雇ふ　昔泉魚
壯心を試す歸農の氷かな　油子

村居・引拂ふ朝や田に氷　孤風子
竹樓や垂氷を折れば月のさす　紫明
吹荒むに氷る茄菜も里店かな　曉湖
閑に居て瓶の氷を解かしけり　木瓜子
知らぬ魚食ふ客心や氷る窓　闔郎
盆石の氷の塵を拂ひけり　檜笠
山行けば小石に結ぶ氷かな　一九
額古き穴妙見や軒氷柱　掬泉生
初氷遺兒里扶持となりにけり　寸江
火口湖を三冬鎖す氷かな　行々子

課題

引鶴　二月十日〆切
春日　三月十日〆切

規定

▽淡路國假屋在高田蝶衣宛
▽一人三十句限▽字體明瞭

評論

獨帝外交の勝利

一

獨帝が三國協商(アンタント)の一角たる露國を攻落し、歐州均勢に變動を來さんと欲するや一日にあらず、然かも圖らざりき、ポーツダム宮中一夕の兩帝會見、俄かに其志を成さしめんとは。

見よ、最近に漏洩せる所に依れば、露國は獨逸との間に他邦と聯合して互ひに攻擊するが如きこと無かる可きを約したり、又難問題發生するあらば、互ひに意見を交換し意思の疎通を謀らんことを誓ひたり、是れ猶可也、左れど兩國は之のみを以て滿足するものにあらざりき、彼等は更らに進んで兩國の利害扞格せる波斯、小亞細亞に關する協約を定めたり、是れ果して何事を意味するものぞ。

其の內容に曰く、獨逸は北波斯に於ける露國の特殊的利權を承認し、露國は小亞細亞に於ける獨逸の特殊的利權を承認すと、顧みるに一九〇四年の英佛協約は埃及及其他北部阿弗利加に於ける双互の利益範圍を劃定せり、是に於て乎英佛親交の基礎成りき、又一九〇七年の英露協約は波斯、西藏、阿富汗斯旦に於ける兩國の勢力範圍及關係を決定したり、是に於て乎英露協力の端緒生じき、知らず獨露間の利益關係を劃定せる此協約の結果如何、吾人は最早や多言を要せざるを覺ゆる也。

二

是に至つて、英佛兩國は如何なる態度を執らんと欲する乎、

他は差措き、バグダド鐵道を國際的經營せんことは佛英兩國が熱望措かざりし所也、蓋し佛國は十億圓の資本を土耳其に投じ、加ふるにシリアに發展しつゝあるが故に、交通機關が獨逸一國の獨占に委せらるゝを默過するを得ざる也、又英國は同鐵道が埃及、印度間

の通路を横れると、波斯灣に於ける自己の商機に多大の影響ある可きを恐るゝとに依りて、其國際化を希望しつゝありたる也、然かも其共同者たる露國に見離され、售られたる（少くとも斯くの如き姿となれり）兩國は今や如何にして此間に處す可き乎、

此苦境に陷つては、最早や降服の外無き也、一昨年十二月佛國外相ピシヨン氏が代議院に演說せるバグダド鐵道を英佛獨露四國の經營に委す可しとの意見は、最早や實現す可らざる也、此際佛英兩國が收め居可き最大なる成功は、恐らくは唯獨逸が鐵道工事資金に惱めるに乘じ、資本提供を好餌として同鐵道中一部の國際化を約せしむるに在らん、左れど是亦た決して容易の業にあらざる也、

三

吁嗟エドワード七世長逝して僅かに半歲餘、アルビオン島國の外交振はざるの虛に乘じて、巧みに露國官廷の親獨派を使嗾し、利用し、親英外相イスウオルスキイを退けて、經驗不足のサゾノフを以て之を代へしめ、巧みに之を籠絡して利を收むる所、流石に獨帝の辣腕靈才を發揮したりと言はざる可からず。

知らず、此の三國協商（英佛露）を弱むるに成功し、列强競爭の地區たる小亞細亞を獨逸の勢力下に齎らすに成功したる維廉二世は、更らに何處に向つて驥足を伸べんとする乎。

憐れむ可き哉土耳其

憐れむ可きかな土耳其、憐れむ可きかな土耳其、彼は恃み〳〵し親友獨逸に售られたり、然かも其境遇は同じく售られたる英佛よりも慘也、

夫れ小亞細亞は其堂々たる領土にあらずや、（列國茲に投資し、經濟的利權生したりと雖も、斷じて英露の勢力範圍劃定せる波斯の類にあらず）、然るに是迄土耳其の誘導者を以て任じ、其陸軍を改善し、且つ相結托し來れる獨逸は、今や土耳其領域の處分に關して土國政府を無視し、恣に露國との間に決定せんとするにあらざる乎、

一月中旬ネエフ回敎僧官檄して曰く、回敎徒はスンニ派とシヤ派と問はず、從來の感情を一掃し、以て波斯、土耳其を防護す可しと、何等の麗はしき言辭ぞや、然かも悲しむべし其時機已に過ぎたる也、

葡萄牙の將來

葡萄牙の情狀紛々たり、曰く王族ミゲル等再度の革命を擧行せんとす、曰く民心、共和政府の成す無きに飽きたり、同盟罷業の續起の如き其證也と、

又別報に曰く、假政府は大體佛國憲法を模範として新共和國憲法案を定めたり、之に依れば大統領は任期五年にして再選を許さず、內閣は立法部の形勢に準して大統領之を任命す可く、唯陸海、大藏、公共工事諸大臣は、內閣信任を失ふことあるも留職するを得可し、議院の任期は三年なりと、

吾人は今一々此報導を批評する無かる可し、兎も角も共和政府の民心を收むるは、其憲法制定と共に異常の難業たらん、從つて目下無經驗の身、能く此難局に當り、精勵倦むを知らざる詩人大統領ブラガ君に對しては、洵に深厚なる同情の念を禁する能はず、

西班牙對摩洛哥

一月上旬、西班牙皇帝、摩洛哥に行幸し、リーフ山戰役忠死兵士の爲めに記念碑除幕式を擧行す、列席者數千、慨然たり、

左れど、同月批准交換の新西摩協約に依り、該區域が愈西班牙の勢力範圍に歸したるを見は、彼等の英魂亦自ら慰む所あらん、果然、首相カナレャス氏は凡庸の外交家にあらざりし也、

アルサスローレン自治

一月九日、獨逸ローレン州メッツに親佛的示威運動あり、群衆行列をなしマイサイユの曲を歌ひて佛國名將ネエ銅像下に至る、警吏憲兵之を制止せんとして、負傷者八名を出せりと、

何か故の示威運動ぞや、是恐らくは獨逸政府が今回のアルサス、ローレン新憲法に於て、眞成の自由を與へざるが爲めならむ、唯怪む、宰相ベートマン、ホルウエヒ氏は今頑冥にも銃劍の力に依りて此の四十年前佛國より强奪せる民主的鄕土の國民的精神を壓服し得可しと信ずる乎を

(備考、獨逸聯邦議會は十二月を以てアルサン、ローレン新憲法案を可決せり、其要領は皇帝の代表者として總督を置き、同法部として上下兩院を置く、

上院は議員十八名より成り下院は議員六十名より成る、前者は任命主義重きを置かるゝも後者は普通選擧に依りて選出せらる、人民の不平は州立法部の權限狹きと帝國聯邦會議に代表者を出すや如何につき帝國政府が之に反對し居る等の事情に出てたり）

英國總選擧の結果

英國總選擧に關しては、前號已に之を論評せり、今に於て縷說するの要を見ず、

唯新議院の黨勢を示さん、則ち下の如し

　自由黨二百七十二、勞働黨四十二、レッドモンド派國民黨七十六、獨立國民黨八、統一黨二百七十二

　即ち自由黨は前議會に比し三名を、獨立國民黨は三名を統一黨は一名を各減少し、之に反し勞働黨は二名を、レッドモンド派國民黨は五名を各增加したり、若し獨立國民黨をも政府黨中に算定せんか、今回の選擧は僅かに一箇の議席を變動せしめたるに過ぎざる也、換言すれば政府黨三百九十七對二百七十三の數字は三百九十八對二百七十二と變化したるに過ぎざる也。

　唯注意す可き一事あり、何ぞや愛蘭に於けるオブライアン派の勢力衰退して、レッドモンド派の勢力增進したること是也、願くは妄斷して在米愛蘭人醵出金二十萬弗の力となすこと勿れ、曷くんぞ是自治熱勃興の反映たる無きを知らむ、

何等の矛盾ぞや

巴奈馬共和國の法規に曰く、巴奈馬共和國市民に土地所有權を附與せざる外國市民は、巴奈馬國內に於て土地所有の權利無しと、然るに米國人は之を不便となし（米國には外人の土地所有を許與せざる州少からざるが故に）、巴奈馬政府に迫つて此制限を撤廢せしめたり。

　吁嗟土地所有權を得んが爲めに、此公平なる相互的規定をさへ廢止せしめて憚らざる米國人は、新に外人に同權を附與せる日本國の臣民に對し、是迄貸與し來れる同權を拒否せんとする國民也、（加洲排日事件）何等の矛盾ぞや、何等の得手勝手ぞや、

米國陸軍擴張

米國下院、一月十八日を以て陸軍費一億八千六百圓支出を可決す、之に先つて戰備不足の問題紛々討議せられたりと

思ふに米國陸軍の過少は、天下之を知る、試みに列國との兵數比額表を示さんか、

露西亞百二十萬、獨逸六十二萬、佛蘭西五十五萬
墺洪國四十萬、英國二十五萬、伊太利二十四萬、
日本二十二萬、米國八萬四千、

海軍に於ては八十三萬九千噸を有し、英國にこそ遜色あれ、遙かに獨佛日露を凌駕せる同國も、陸軍に於ては兵數十萬に滿ちずして、諸國の後に落ち、實に世界列國中第八位に在り、然らば則ち何ぞ今にして陸軍擴張の聲起るを驚かむ、

唯怨む、陸軍卿以下米國政事家が、擴張の目的を遂せんが爲めに、必要も無きに秘密報告なる名稱を付けたる公然的報告を發表せしめたることを、是斷じてタフト執政の重きを成す所以にあらざる也、

カーネギー平和資金寄附

富豪カーネギー、世界平和運動資金として二千萬圓を寄附す、蓋し其利子を以て平和運動家の費用を給せんと欲する也、嗚呼彼や先きに約一億二千萬圓を各地圖書館に寄附し、數千萬圓を諸大學に寄附し、今亦此美擧を見る。黄金も散じて斯くの如くなるに至つて、始めて光彩ありと言ふ可き也、

然かも是豈獨りカーネギーとのみ言はん、財界の王ロックフエラーが昨年末約三千萬圓を市俄高大學に移し、前後七千萬圓の大學資金寄附を完了したるが如き、亦子孫を醉生夢死せしめんとして汲々たる日本富豪の比類にあらざる也、（以上懷沙隱客）

大叛逆人の宣告

無政府主義を標榜せる二十六人の特別裁判は、舊臘に審理と辯論とを終結せるが、一月十八日に至り、之が判決あり、中二十四名は死刑二名は有期懲役に處せられたり。其の未曾有の戰慄すべき大犯罪の判決の全文は載せて同十九日の東京諸新聞にあり。依て玆に之を

掲げず。

此の問題に就て、桂首相等四大臣は、恐懼の餘、罪を闕下に待てるが、十九日其の議に及ばずとの御沙汰を賜へるのみならず、更に死刑廿四名中十二人の犯罪者に對して特赦の恩典を下し、死一等を減じて、無期懲役とせられたり。

衆議院開かる

貴衆兩院とも一月廿一日を以て開議するや、桂首相は兩院に於て其施政方針を演說し、特に衆議院に於ては、併せて財政に關する演說をも爲せり。

桂首相の演說に對し、各黨領袖は沈默せるも、松田源治氏は韓國併合の際、議會を開かざりしは憲法第七十條の違犯にあらずやと問ひ、首相の答辯あり、小川平吉氏は關税問題のため日英同盟に影響せずやと問ひ、小村外相より、關税問題は目下英國と極めて良好に交渉するをば確言するも、內容は未だ發表する時機に達せすと答へしが、鈴木力、佐々木安五郎の諸氏は、奇句警語を連發して首相等の頭上に浴せたり、然かも一場の揶揄に過ぎざれば、大臣も素より答へざりき

朝鮮の武斷政治

朝鮮總督府は嚴酷なる會社令を發表したるのみならず、邦人の出願せる鑛山採堀其の他の出願二千餘件を一併に許可せずといふ、且つ明石警務長の如きは、草鞋とサアベルの外總て日本人を入れずと放言せしとか、此等のため朝鮮に於ける武斷政治の非難頗ぶる高く、寺內總督の聲望頓に衰へたるが如し。

國民黨の紛擾

國民黨は大會準備のため一月十八日領袖會を開き、議の廣軌改築案に及ぶや、仙石貢氏は贊成を主張し、犬養氏の反駁あり、結局調査委員十五人を擧げ、廿日を以て調査するに決し、大會宣言書には姑らく之を揭げざるに決したり。

然るに翌十九日の黨大會に至り、阪口仁一郎氏より廣軌案の贊否を明かにせざるは失體なりとて、反對說を提出するや、多數を以て政府の廣軌案杜撰にして信を措くに足らずと宣言するに至れり。

茲に於て貢氏は面目を保つがため脫黨せんとし、而して黨中領袖の不信義を鳴らすもの少からず、將來或は紛爭の種子たるべきか(以上YX生)

新刊批評

▲新進化論

シドニー、ギューリック著
博文館發行

「宇宙の進化」「地球の進化」「生物の進化」の三編に分ち、各編亦數章又は十數章に分ち、進化論の最近の研究までをも含めて最も通俗明瞭に說述したり。丘博士の進化論講話に比して讀物としての面白味少きも、丘博士の著の主として生物の進化に限られたるに對して之は其範圍も廣く、又最近の研究をも網羅したるは本書の特徵といふべし。菊版五號活字六百餘頁の著述にして、近來の出版書中の最も有益なるものたるを失はず（定價貳圓參拾錢）

▲佛陀

三並良譯
東江堂發行

印度學者を以て歐洲學界に名高く、現にゲッチンゲン府大學教授たる獨逸の碩學オルデルベルヒの名著「佛陀、其傳、其教、其教會」第四版を飜譯したるものにして、總論に於て、佛教以前の印度哲學並びに宗教より佛教の起因を論じ、次に佛陀の生涯を叙し、佛教の教理を說き、最後に佛弟子の教團を記したり。蓋し佛教が我國文明と密接の關係あるは今更ら言ふを俟たざる所なるも、其教典は廣汎にして一般人に近き易からず、此書の如き歐洲碩學の眞面目なる研究の下に一般人士に佛教を知らしめんとして懇切を極めたるもの、我國の思想界を益すること尠少からず（定價三圓五十錢特價三圓）

▲青年修養訓

嘉納治五郎著
同文館發行

講道館々長にして高等師範校長たり數十年間青年子弟の教養に盡瘁せる嘉納氏の著にして敢て高遠の理論なきも、一々實際に適應せるものあり、眞に修養に資すべき良訓戒書也。五十箇條の訓戒青年の一讀を勸む（定價一圓八十錢）

▲孔子

白河鯉洋著
東亞堂發行

著者が在清五年間に集めたる材料によつて孔子を論究したるものにして、先づ孔子の傳を說き、其人格を論し、終りに其事業を述べたり。尙最後に孔子の教育說、政教論を附し、叮嚀なる索引をも添へたり。筆路暢達讀みて心地よし（定價一圓廿錢）

▲人生心理學

勝水淳行著
啓成社發行

人生心理學とは何ぞ。之れ「科學の範圍内に於て治心の法を教へ」「人心を常に平かにする方法を研究する學科」なりと。吾人未だ其一部をしか讀まざるも、比較的眞面目なる研究の跡あり。江湖に推奨するに足る良著なるが如し。（定價一圓）

▲治生要訣 産語

太宰春臺著
有隣閣發行

春臺の產語は其教訓多少保守的消極的の嫌ひなきにあらざるも引例自在、行文暢達、讀んで面白く、又修養にも資すべき箇所少からざる書也。嘗て假名交り文に直したるもの印行せられたることありしが此書は漢文のまゝにて出版し鼇頭に少しく註を施せり。（定價五十錢）

▲現代の傾向と心的革命

高島平三郎著
洛陽堂發行

著者が現代に對する——殊に現代青年に對する感情を述べ、之に對する救治策を說きたるものにして、眞面目なる所取るべし（定價八十錢）

▲町人の天下　白柳秀湖著　盛文館發行

白柳氏の文は今の青年文士の論文中最も讀むべきものゝ一つなるが、此書、經濟的方面より――マルクスの所謂歴史の物質的解釋の立場より――德川三百年史を研究したるものにして、着眼點なかなか面白し。附錄として「三菱及び三菱の天下」を載せたり(定價五十錢)

▲運命開拓秘密の鍵　兒玉修治著　樂山堂書房發行

運命を開拓するの秘訣を說き、又逆境に處しても安心するの道を論じたるもの也(定價五十錢)

▲俳諧坂に車　樋口銅牛著　樂山堂書房發行

「談林の俳風」「俳諧の流派」「美濃派の俳風」「闌更の俳論」等の研究的のものを集め、附錄としては千三百句を收めたる「刀洗會句存」、千百句を收めたる「北陸の秋」を載せたり。(定價五十錢)

▲理想と結婚　千勝義重著　樂山堂書房發行

結婚について總ての心得べき條項を說きたるものにして若き男女の參考となるべし(定價五十錢)

▲早老の豫防法　大西直三郎譯　樂山堂書房發行

醫學博士ウエーベル翁の著を譯したるものにして、附錄としてペルツ博士の長壽論を添へたり(定價廿五錢)

▲新譯孟子　濱野和三郎註譯　至誠堂發行

孟子の本文を總て假名交り文に直し、之に叮嚀懇切なる註釋を施したるもの、孟子の文は原文にても最も讀み易きものゝ一なれども、漢學の力衰へたる今日、青年學生を益すること尠からじ(定價九十錢)

▲新譯評釋文章軌範　友田宜剛評解　至誠堂發行

前著と同じく、本文全體を假名交り文に改め、欄頭に原文を掲げ、叮嚀懇切なる評釋を附せり。一讀せば文章上益を得ること多かるべし(定價一圓十錢)

▲商權爭奪史論　永野八郎著　啓成社發行

自序に曰はく『予をして經濟の史的研究を志さしめたる動機は田尻博士の著經濟史眼に在り』と、又『書名の內容と適ふやにつき危む所あり云々』其自由貿易、保護貿易兩主義の及ぼせる國家興亡盛衰の跡を一々例證論斷せる所或は書名の內容に添はざるの憾なきにあらざるも、而も此兩主義が商權の消長に大なる關係を有し、商權の消長が國家興亡盛衰の素因たるべきを歷史的に述べたる所必ずしも其書名に背かず、材をロッシャース、プライス、パーカー、ウェルスフォルド等に取り經濟の史的研鑽に勗めたるもの若くは此道に志すものゝ一讀に値すべし、特に現時の大問題たる通商條約改締、就中日英關稅問題の喧騷を極むるに際し此著ある時流に適したるものと謂ふべき歟。(定價一圓五十錢)

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅拾錢但淸國を除く）

冊數 / 國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵稅共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十四年一月廿五日印刷納本
明治四十四年二月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

旅順工科學堂教授 工學士 久保田圭右氏著

新刊

通俗畫用遠近法

菊判洋裝金壹册
紙數二百八十頁
挿圖百九十五種
正價金壹圓六拾五錢
郵税金拾貳錢

由來遠近法を無視するは日本畫の弊也、**如何なる大家の作も遠近法より見る時は零也、**然るに遠近法は繪畫の骨髓なれば遠近法を無視したる繪畫は縦令色彩のイリュージョンを以て美感を昧ますとも冷靜なる科學的鑑賞眼より見れば自然を扁平したるか或は狗縮したるか何れにもせよ萬象惣て變形したる滑稽の感ある例へば自然を凹凸の鏡面に照したると殆んど同一也久保田學士玆に慮ばかつて多年の造詣を擧げて實際に**展覽會受賞の邦畫又は國定教科書の挿畫**に就て一々遠近法の誤まれるを正して鄭寧周密に説く、**今後の日本畫は本書に學んで此侮りを受くる莫らん事を欲す**

東京、大阪、京都

丸善株式會社

本店 東京日本橋通三丁目
支店 大阪心齋橋筋博勞町 京都三條通麩屋町西入


二月十日より開會
雛人形陳列會
雛祭もいよ〳〵近づいて參りましたから、今回以上の如く新製各種の雛人形及び附屬品一切を陳列販賣致します。
お子樣方を御連れ遊ばし、御遊覽くださる樣御願ひ申上げます。
東京駿河町
三越呉服店